
歌を忘れたセイレーン～祈りの歌が聞こえる～

梨雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌を忘れたセイレーン〜祈りの歌が聞こえる〜

【Nコード】

N0880H

【作者名】

梨雪

【あらすじ】

年が明け、新年の挨拶に伯母がやってきた。「相変わらず良くない相してるわねえ」悪いのは顔か、人生か、それとも間なのか？相変わらずの白砂亭を中心に相変わらざる面々が織り成す新たな物語。新しく登場する人物達で賑やかさもアップするかも？

プロローグ（前書き）

「歌を忘れたセイレーン」の続編になります。
前の物語を読んでないとわからないところが出てくるかもしれません。

プロローグ

風に乗ってセイレーンの歌が聞こえる。

青年はその声を頼りに浜辺を彷徨い歩く。

今日は昨日の岩場とは違うところから声が響いてくる。
導かれるかのようにその方向へと足を向けた。

「やだ、あなた、また来たの？」

青年に目をとめたセイレーンは歌を止めるとそう言った。

「ああ。今日はいつもと場所を変えたんだな」

そう、いつもいる場所からここは数時間歩かなければ辿りつけないほど離れていた。

「当たり前でしょ、あなたが毎日毎日くるから場所を変えたのよ」

いつもとは違う岩肌の上につつ伏せに寝そべったままセイレーンは言う。言葉に合わせたかのように跳ね上がる鱗に覆われた下半身が太陽の光を反射していた。

「なぜ？私がお前に会いに行くことが悪いことなのか？」

青年はさも面白くなさそうに眉を寄せた。

「何言ってるのよ、あたしがなんの為に魅惑からあなたを解除してやったかわかってる？」

「さあ？そんなものにかかった覚えもないが」

そもそも魅惑とはなんのことだと小さな声で言った。

その声が聞こえたセイレーンは激昂した。

「あんた、何言ってるのよ、あんたには成すべきことがあるから海に連れて行くわけにはいかないって言ったじゃないのよ、この前に！」

「ああ、言われたかもな」

「言われたかもじゃなくて、言ったのよ、このあたしが！」

「ああ、だからそれがどうした」

「それがどうしたじゃないでしょ！つまり、あんたは、ここで、呑気に、魔物の相手してる場合じゃないのよ！」

一向に話の内容を理解してくれない青年に苛立ったのか、セイレーンは一言一言を区切り言い聞かせるように言葉を放った。

そう言われた青年の方はというと……特に表情を変えるわけでもなく……。

「お前は魔物なのか？」

などと、また更にセイレーンを苛立たせるような呑気な科白を吐いた。

「あんた達人間はそう言うわね」

「どこのあたりで魔物と判断すればいいんだ？」

案の定セイレーンの眉は大きく跳ね上がった。ついでに体も跳ね上がり、うつぶせの状態から横座りの状態に体制を変えた。

「あんた、その今更もいい科白言わないでくれる？この体見てなんとも思わないわけ？」

この体と言われて青年は顔を赤らめた。

「なんでもいいが、もう少し慎みを持ってだな、服を着てくれ」

「いや、問題なのはそこじゃないから。あたしの下半身見て魔物と思わない方がどうかしてると思うの」

「全裸だと魔物なのか？」

「いや、だからあたしの下半身は人間とどう見ても違うでしょ」

セイレーンの視線につられるかのように青年もセイレーンの下半身に目をやった。

「魚だな」

「そう、魚よ」

「焼いたらうまいのか？」

価値観のあまりに違うズレた会話を聞いていたカモメは呆れたように飛び立った。これ以上聞くだけ無駄だと思ったのかもしれない。「あんた、あたしの上半身見て顔赤らめるくせに、下半身見て食べるのかって、頭どうかしてない？」

「さあな、敵に切られまくって血と共に理性もなくなったかもな」
ほんの少し疲れたような悲しいような、色々な感情が入り混じったような顔で青年は地平線へと目をやった。

「何言ってるのよ、傷だつてあたしが治療してやったじゃないの。
なかなかないんだからねセイレーンに治療してもらうなんて。だから――」

「ああ、わかつてる。だけど、もう少しだけ私に時間をくれないか」
つまりは青年はセイレーンが何を言いたいかも、自分が成すべきことが何かもわかつていたのだ。

人と魔物はしばらくの間静かに寄せては返す波に見入っていた。
「なあ、セイレーンよ、お前が魔物だというならば、名前などないのか？」

突然青年はそんなことを言った。初めて会った時から数回会うことがあったが、名前を聞いたのは初めてだった。

「あるわよ、たとえ魔物でもね」

「そうか、いずれ私がここを去る時の土産に教えてもらってもいいか」

「そんなの土産になんかならないじゃないの」

「いいんだ、私が失くした者達への土産なのだから」

青年の静かな言葉に、セイレーンはしばらく波を見つめた後、ぽつりと言ったのだった。

「セレン――」

プロローグ（後書き）

ふとNEWVELのファンタジーカテゴリを見ていたら、最近よく検索されるワードに「歌を忘れたセイレーン」があって驚きました。検索して読んでくれている人がいることが嬉しくて、つつい調子に乗って続編はじめちゃいます。

調子にのりすぎか。。。。

新しい年がやってきた。

ヒキガエル事件の時に赤や黄色に色を変えていた木々の葉も、今ではすっかりなくなっていた。

だが、寒々しい姿でいたのはほんの束の間で、今では空から零れおちてくる雪に覆われ、また別の姿を見せてくれている。

セレイナ王国は温暖な土地柄ではあるが、冬の厳しさはそれなりだ。国土の一番北に位置するセレンでは、冬になると北からの風に晒され続けることになる。

空は毎日どんよりと厚い雲に覆われ、輝く太陽を目にすることが出来るのは極まれで、来る日も来る日も白い景色ばかりを見ることがなるのだ。

「あーあ、新しい年になったと言っても、お天道様を望めるわけでもなくて、空はどんより。なんか憂鬱だわ」

降りしきる雪を店の窓から眺めながらレネスは言った。

今日は新年最初の日。年に一度の白砂亭の休日だ。いつも賑わっているはずの時間なのに店の中はシンとしている。

休日だからと言って、この通りの天気ではどこに出かける気持ちにもならないし、何より出かけたところで今日はどこの店も白砂亭と同じく休んでいる。

「毎年毎年折角の休みだからゆっくりしよーって思うけど、毎年毎年やることもなくてばーっとして終わっちゃうわよねえ」

先程からずっとレネス一人で喋っているが、別にレネスのでっかい独り言ではない。傍には父親のジンもちゃんとして、レネスの言葉にただ頷いている。

試しに編み物にでも挑戦してみたこともあったのだが、レネスはどうもそういう類のことには向かないらしく……

「父さん、もうその襟巻、捨てたら？見てるこっちが居た堪れないから」

レネスはジンが防寒の為に首に巻いている襟巻を指差した。あちこち網目が飛び出たそれは、はつきりいつてボロ雑巾よりみすばらしい。

何度かやつてるうちに上手になると聞いたので、数度挑戦してみたのだが、結果は惨敗。上手くなるどころかどんひしやげたものになっていく。レネスは自分のあまりの不器用さに涙したものだ。ちなみに、一番最初作ったものは無謀にも手袋だった。初心者のかせにいきなり上級の物に手を出し、鍋つかみにすらならない穴だらけの手袋が完成した。

その次に作ったのは帽子だった。これならば手袋より簡単に違いないと思い作ったのだが、毛糸が途中で足りなくなり、出来上がったのは子供ですらかぶれない物。もちろん穴あき。

そして三度目の正直と作ったものが、今ジンが首に巻いている襟巻だった。まっすぐに編んで行っているつもりが、なぜかほとんど斜めに編みあがり、それに修正を加えているうちに襟巻として果たして機能できるのかどうか不安なものが出来上がった。当然これも穴あき。この時、ついつい作りながら「父さんに襟巻作ってあげるね」と言ってしまったので、取り消すわけにもいかず、そのままジンへと渡してしまった。使い物にならなきゃ捨てるだろうくらいの軽い気持ちだったのだが、父の愛は海より深かった……。

捨てたら？とのレネスの声にジンは首元のそれを両手で握り、ぶんぶんと言が鳴りそうなほど首を左右に何度も振った。

（嬉しいけど、嬉しくないし……）

この間二人で雪かきをしていた時に、近所の人が言っていたのだ。「おいおい、ジン、いくら男やもめだからって、その襟巻はあんまりだろう」と。

とはいえ、このジンの様子じゃこれを捨てることはきつと無理だろう。後で夜中にもこっそり捨てることにしようとレネスは決め

た。

「父さん、雪かきするの？」

襟巻はともかく、長靴を履き厚い外套も身につけ始めているジンを見てそう言った。なんなら手伝おうかと思ったからだ。

「一人で間に合う」

レネスが言い出しそうなことを察したのか、それだけをぽつりと言うつとジンは外へと出て行った。

「さーてと、じゃあ何もすることもないし、たまには読書でもしてみようかなー。折角若様から借りた本もあることだし」

今度こそでつかい独り言をつぶやきながら、部屋から本をとってこようと立ち上がった。

ボタン！と激しい音にドアを見れば、つい先ほど外に出たばかりのジンが戻ってきていた。

「あれ？早すぎない？」

レネスの問いかけに対し、何も言わないのはいつものことだが、ジンは突然レネスに向かって突進してきた。

「え？なに？」

言い終わる頃にはすでにレネスはジンに荷物のように肩に担がれていた。

「は？なんで？父さんどうしたのよ！」

ジンは何も言わずレネスを担いだまま厨房を通りぬけ裏口のドアへと足早に向かう。レネスは何が起こったのかさっぱりわからない。ドアの前に到着すると、バサリとレネスの背に何かがかぶせられた。見れば裏口の傍にかけてあるレネスの外套だ。つまりはこのま外に行くということなんだろうか。

わりといつも落ち着いているジンがこんなに慌てるのは珍しいとレネスは思った。レネスが慌て者なのはきつと亡き母譲りだばかり思っていたのだが。

ジンの肩に担がれたまま、開けられたドアから外へと出た。出たと同時にジンの動きがぴたりと止る。訝しく思った瞬間、丁度それに合わせたように突風が吹く。背中からの突風に外套が上半身の方へと煽られた。レネスは外套が飛ばされないように握りしめた。ジンなど正面から突風を受けているのだが、足もとが揺らぐことなく立ちつくしている。

しばらくの間ゴウゴウと吹いていた風がやっと納まった。目の前では吹きこんだ突風に晒された厨房の惨状が広がってた。ジンがドアを開いたままだったらしい。

「すごい風だったわね、父さん」

厨房を片付ける仕事が出来たと思いながら、ジンへと声をかけた。ジンは何も言わない。まあ、いつものことだが。ついでに言えば先程から動く気配すらない。

なんだか先ほどより更に様子がおかしいような気がする。レネスは思った。ジンの肩に手をつき担がれたままの状態で上半身を起こしてみた。

「父さん？」

ジンの顔を見れば、珍しく顔色が悪い。それになんとか表情も強張っているように見える。やはり何かあったのだろうかと思ったその時、レネスの背後から少し低めの女性の声が聞こえた。

「久しぶりの客の姿を見て逃げ出すとは、いい度胸してるじゃないの……ジン」

その声にレネスは聞き覚えがあった。無理やり体をひねって見てみれば、そこにはフードのついた厚い外套を身につけた女性……。

「伯母さん!？」

母マリンの姉、スカリナの姿だった。

暖炉に一番近いテーブルの一つに三人で腰を落ち着けた。目の前にはレネスが淹れた温かいお茶が置かれている。

スカリナはお茶を手にとると静かに飲み始めた。栗色の綺麗な髪が動きに合わせてさらさら流れる。

レネスは数年ぶりのスカリナの登場に驚いていた。スカリナは街から離れた森の中に一人で住んでいて、姿を見せることはあまりない。特に市街地は嫌いだと言っていただけに、この街にやってくるのは本当に稀だ。最後に会ったのは確かマリンが亡くなった時だったろうか。

先程拳動不審な行動を行ったジンの方はいえ、スカリナを前にまるで石像のように固まっていた。

スカリナの登場も驚きならば、こんなジンを見るのも初めてだとレネスは思った。

茶器をテーブルに戻したスカリナはレネスの顔をしげしげと見た。「すっかり大きくなったわね、レネス」

微笑みを浮かべてレネスへとそう声をかけてくれた。こうやって笑うとどこか母に似ていて懐かしいような気持ちになる。

「うん、もう今日で十八だし」

基本的にセレイナ王国では年がかわると共に自分の歳も一つ重ねることになっている。だから今日からレネスは十八歳だ。

「早いもんだわね。マリンが逝った時はまだ幼い少女だったのにね」しみじみと語る伯母にレネスもなんだかしんみりと当時を思い出す。

「ところで、数年ぶりに会ったけど、レネス」

しんみりした雰囲気スカリナは突然払拭した。そういえばスカリナは暗い雰囲気は大嫌いな人だった。

マリンの葬儀の後も泣きやまないジンに「ええい、いつまでもメソメソと辛気臭い！」と蹴りを入れ、ここから逃げ出すようにいなくなつたのだった。そんなスカリナだけに辛気臭い話を切り上げたのは納得がいくとレネスは思った。

いきなり身を乗り出すようにして、テーブルを挟んだレネスへとずいっ顔を突き出した。栗色の髪に縁取られた白い肌はシミもシワ

もない。

「な、なに伯母さん」

「久しぶりに見ても、やっぱり相変わらず良くない相をしてるわねえ」

「は？」

良くない相とはなんのことだろうか。顔が悪いということだろうか。確かにマリンや伯母には似てないし。マリンも美人だったが伯母も美人だ。

「え、顔似てないから？」

「やだ、そういうことじゃないわよ」

違うならばなんだろうとレネスは思った。相ということは……。

「えええっ！あたし不幸なの？」

そういえば伯母は先読みの達人だったと思いだし、レネスはそう叫んだ。

「不幸とはちよつと違つわね」

慌てつぷりの激しいレネスを見たスカリナは嘆息するように言った。

「え、不幸ではないの？」

不幸と違つなら自分の将来は幸福なのか？とレネスは思った。夢見る乙女代表レネス十八歳としては、そのあたりはしつかり聞いておきたい。

「ええ、ようするに、あんたの場合は難に巻き込まれることが多いというのかしらね」

難に巻き込まれることが多い？つまりこの間のようなことが度々あるということだろうか。

死体を発見してみたり、殺し屋に殺されそうになってみたり、兵士に捕えられそうになってみたり、ヒキガエルの皮をかぶった人間にすりつかれてみたり、果ては爆発騒ぎと火事騒ぎに巻き込まれ……。数え上げているうちになんだが具合が悪くなってきた。あんなこと二回も三回もあつてたまるかと思う。

「それっていわゆる不幸そのものなんじゃ……」

頭痛のしてきた頭を押さえながらレネスは言った。

「そう？ちよつと人より緊張感ある毎日が送れるだけよ」

緊張感どころか最後にはドリアンまみれになり悲壮感が漂つていた人を見送らねばならぬことを考え頭痛が増す。

「あたしは普通に安定した静かな毎を送りたいんだけど……」
できればヒキガエルもドリアンも勘弁願いたいと切に願う。

「そうよね、安定した毎日がいいわよね、やっぱり。だ、そうよ、ジン」

にやりと笑みを浮かべたスカリナはジンへと視線を移した。声をかけられたジンは何も言わない。顔つきがなんだか厳しくなってい

る。

「父さん、どうしたの？具合悪いの？」

心配してそう問えば、ジンはただ力のない腕をふるふると持ち上げてはレネスの頭をわしわしとなでた。

（重症？）

腕をあげるのにさえ時間がかかるとは、これはもう近くのゼム爺のところ连接到いくべきだろうか？とレネスは本気で心配した。

ちなみに近くのゼム爺とは、七十も過ぎた爺様なのだが、若かりし頃は貴族屋敷に勤める薬師だったと言われる人物だ。商業地区に住む住人は何かあればすぐにゼム爺の元へ行くのがあたり前のことであつた。

「父さん、ゼム爺のところ行く？」

ジンは青い顔のまま、ふるふると首を左右に振った。嫌だとは言われたものの後で自分だけでも相談に行こうかとレネスは思案する。レネスの心配をさくつと解消してくれたのはスカリナだった。

「ああ、レネス放っておきなさいな。私が現れたことに怯えてるだけだから。ゼム爺に行っても滋養強壯の怪しい薬渡されるのがオチよ」

テーブルに頬杖をついたスカリナは空いている方の手でゆったりと茶器を傾けながらそう言った。

「え、なんで伯母さんに怯えるの？」

確かに葬儀の後蹴られていたことを考えれば怯えなくもないとも思えるが、猪さえ素手で倒すジンがこんなか弱い女性相手に怯えるとは思えなかった。

（一体に何に怯えてるんだらう？）

「ところでジン、あんたやもめ生活長いからってその襟巻はどうなの？雑巾にもならないじゃないの」

突然振られたレネスお手製襟巻。激しい衝撃を受けレネスは椅子に座ったままよろめいた。

どんなにボロ雑巾より酷いかは自分で嫌というほど知ってはいる

が、身内に言われると衝撃が増した。

「お、伯母さん……ごめん、それあたしが作った………」

しょんぼりしながら言えば、スカリナも「えっ」と言ったまま絶句した。殆どしゃべらないジンはともかく、その場をしばし静寂が支配した。

「ま、まあ、ほら、マリンもないし、教えてくれる人いないんだから、仕方ないわね」

慌てたスカリナの言い訳の仕方はなんだか自分に似てると思い、別の意味で悲しくなった。もう少しマシな言い訳を、もう少し上手に言って欲しい。

「う、うん。まあ、誰に似たのか知らないけど、あたし不器用みたいで……」

「ほ、本当にねえ。誰に似たかしらねえ」

ハハハハ、ほほほほ、と今度は乾いた笑いが支配した。

誰に似たのかと言った瞬間微妙にスカリナの顔がひきつったところを見れば、レネスは両親よりもスカリナに似ているらしいことが判明した。

「えーと、その、その襟巻の色いいわね。ジンにぴったりじゃない良かったわね優しい娘がいて幸せね、ジン」

「伯母さん、もういいから……」

あくまでも一生懸命言い繕おうとしてるスカリナがなんとなく不憫になってレネスは止めたのだった。

「話を戻すわね。それでレネス、そんな難にまみれた生活をするくらいなら、私と一緒に暮らさない？」

言い訳地獄から立ち直ったスカリナのいきなりすぎる言葉にレネスは驚いた。

「え？」

「相が悪いつてあたし言っただわよね」

難に巻き込まれやすいという話で何故スカリナと一緒に暮らすことになるのだろう。ここにいれば難事があってもすべてぶち壊してくれそうなジンがいるし、悪知恵ばかり働く若様もいるのだが。

「うん……でも、それと一緒に暮らすのがどう繋がるの？」

「あんたとこの街の相性が悪いのよ。ここにいればいるほど色々なことに巻き込まれていくわ」

この街と相性が悪いなんて今まで思いもよらなかった。だが、先だつてのあの事件の前は別になんの問題もなかったが……スカリナの登場といい、この言葉といい突然すぎやしないだろうかとレネスは思った。

「え、でも、店があるし」

「そんなの、ジン一人でも十分間に合うわよ。とにかく、ここにいちや駄目。ここはセイレーンであるあんたにとってよくない場所よ」

「え、だつて母さんもここにずっと……」

「マリンは別の問題があつたけど、あんたは違う。今ならまだ間に合うから一緒に行きましょう。二人でひっそり生きましょうよ。ジンなら一人で大丈夫。心配ないわ。」

レネスが断ろうとするのを遮るように、スカリナは矢つぎ早に話を進める。

「いや、待つてよ伯母さんっ」

「ねえ、レネス、私にとつての家族はもう、あんたしかないのよ。だから何かあつて欲しくないのよ……」

いきなり哀しそうな顔でそう言われたレネスは戸惑った。何故スカリナはこんな顔をするのだろう。ただ難の多い人生になるだけだと言つたのに。

「伯母さん？」

「マリンが逝つてしまった時だつて、本当はあんたは私が連れていくはずだった。だけど……」

「え、あたし伯母さんに引き取られる予定だったの？」

（なんで伯母さんが？まさか父さんあたしを育てるのが嫌だった？）

愕然とそう思った瞬間、またしてもレネスの体が宙に浮いた。目の前のスカリナの顔が遠のく。

「ええええええ？またあたし荷物扱い？」

慌ててそう言い、ジンへと顔を向けた時だった、レネスを担いでるジンがよろめいた。

「え、ちよつと、父さん！ぎゃ！」

ズシンという音と共にジンが前に倒れると、同時にレネスもジンに抱えられたまま膝をついた。勢いが良かった分膝を打ち付けてしまつて痛い。

「いたたたたた。何が起こつたの？父さん、大丈夫？父さん！」

助けを求めるようにスカリナを見れば、口元から細い棒の様な物を離れたところだった。

「伯母さん、何したの？」

倒れたジンをゆすりつつ、先程までの悲壮感をかなぐり捨て不敵な表情をしているスカリナに問えば――

「ふふ、スカリナ特製、熊でもぶつ倒れる麻酔薬を入れた吹き矢を一発」

「なんでそんな物持つてるのよ！」

「ジンの行動なんてお見通しよ。ふふん」

つまり、ジンがスカリナにレネスを託すのを嫌がつて暴れることを想定していたということだろうか。

まさしく想定通りの行動をし、あっけなく吹き矢に倒れたジンを見てレネスはため息をつくのだった。

（熊でも倒れる麻酔つて、父さんは伯母さんにとって熊と同等なわけね……）

二度のジンの逃亡劇は、口べたゆえ、スカリナを倦厭しての行動だったといえよう。一難去つてまた一難。今度の難はむしろスカリナそのものなのではないかと思うレネスだった。

「ふうん、伯母上と一緒に暮らそうと言ってるんだね」

今年初の開店と同時にやってきた若様は、二杯目のエール酒を飲みながらそう言った。すでに一杯目はレネスとの乾杯で飲み干している。

昼にはまだ少し早いこの時間、ついでにいうならば世の中が新しい年に浮かれてる最中、店は閑散としている。今いるのは若様ともう一人、見たことのない男性だ。旅行者か何かだろうか大きな旅行鞆を横に置いている。新しいお得意さんが出来るのはいいことだとレネスは若様の相手をしながらも粗相のないよう動向をうかがっていたりもする。

「そうなんですよ。でもあたしとしては――」

「マスターが心配でここを離れられないと」

レネスの言いたいことを若様は引き取って言った。

さすが若様、言わずとも大概の事を理解してくれている。

数日とはいえここに住んだこともあるだけに、この家の事情もよく理解していると思う。なにせレネスがセイレーンと知っている数少ない人間でもあるし。

「そうなんですよねえ、でもそれを言っても伯母さん納得してくれなくて」

昨日は倒れたジンをベッドに寝せるだけで大騒ぎだった。女二人でジンを担ぐのは容易ではなく……ひきずってはぶつけ、ひきずってはぶつけの繰り返し――。

「ところで、マスターのあの顔じゅうの青痣はなんだい？まるで病気にかかったかのように痣だらけだけど」

「は、ははははは」

レネスとしては笑うしかなかった。自分がやりましたと人に言う勇氣はさすがにない。だが、それがこの若様に通じるはずもなく……

…。

「レネスが運ぶには……マスターの体重すぎて無理だったんじゃないかい」

「げっバレバレ？」

「全く、仮にも女の子が『げっ』なんて言うもんじゃないよ」

そう言いながら若様は今日の日替わり定食である牡蠣の揚げ物を切り分け口に入れた。

「うん、生でも美味しいし調理しても美味しいね。レネスをからかえるネタがないのだけが残念だけど」

「それは良かったですね……」

レネスは呆れたようにそう言った。この人はどこまで人をおちよくれば気が済むのだろう。

「でも若様新年早々こんなところで暢気に食事していいんですか？」

「ん？何か問題あったかな？」

「だって、ほらお貴族様といえば、何かあるたびにパーティとか言ってるじゃないですか」

昨年最後の日は朝から着飾った紳士や婦人が乗った馬車は何台も通り過ぎていった。多分その中には若様の姿もあったのだろうけど、忙しさから確認する気はさらさらなかった。

（そもそも貴族が何しようが関係ないし）

「ああ、それなら昨年から今年までみっちり、夜も寝ずに行つたよ。なんで夜通し行わなきゃならないのかさっぱりわからないけどね。僕としては夜は寝る物なんだけど」

「ですよねえ。だから貴族はなまっ白い顔してるんですかね、人が起きてる時に寝て、人が寝るときに起きてるから」

レネスの中の貴族像としては、ヒキガエルみたいな輩が、青白い顔をしてる輩のどちらかしかない。ただでさえ青白いくせに白粉はたいて何が楽しいのだろうか。不健康にも程があると常々思っていたりする。

「つまり僕もなまっ白いと」

「うーん、若様の場合なんでしょうね。たんに温室育ちってやつですかね」

「レネス、どうも最近僕に辛口じゃないかい？お坊ちゃま育ちといってみたり、今度は温室育ちと言ってみたり」

青白くもなく見た目は普通なので敬意をこめてそう言っただけだったのだが、若様には不評だったようだ。

「褒めたつもりだったんですけど。間違いました？」

「君はちゃんと言葉というものを勉強した方がよさそうだね。僕が貸した本はちゃんと読んでるかい？」

そう言われてレネスはハツとした。伯母の登場やらなんやらですっかり本の存在を忘れていた。確か「ワイトの冒険」とかいう冒険活劇だったはずだが。

レネスとしてはどうせなら泣ける恋愛話でも貸して欲しかったのだが、若様にそれを言っても仕方ないだろうと諦めた。

「えーと、近々読みます。ええ、きつと」

「ものすごい棒読みなのが気になるけど、ちゃんと読むんだよ。主人公みたいな人間が現れても慌てないように――」

「へ？主人公ってなんでしたっけ」

若様の言葉にふつうに反応すると「本気で一行たりとも読んでないのかい？」と怒られたのでこれ以上この話をするのは分が悪そうだ。

「は、ははは伯爵様はお元気ですか？」

とつさに話を切り替えてみた。

ヒキガエル事件が解決した後一度訪れてもらって以来会っていないからだ。といっても、それが当り前であって別段不思議でもないでもない……。

ひたすら若様の怒りの矛先を逃れようと言ってみただけだ。だったのだが、伯爵という言葉に若様は咳きこんだ。また何かあったのだろうか――。

「レネス、最近ツツコミが的確すぎないかい？」

「は？なんのことですか？」

「年越しのパーティにね、シエル珍しくも女装してきたんだよ」

「女装って女性なんだから女装とは言わないんじゃない……」

「まあ、そうなんだけど。無理矢理家の者たちに着せられたらしくてね、本人は仏頂面もいいところだったんだけどね——」

「まさかと思いますけど、ドリアン姫登場しました？」

話を聞いていたレネスが、かのドリアン姫を思い出してそう言えば、若様は噴き出した。どうやら当りのようだ。

「レネス、最近勘が鋭くない？」

「そんなのいいですから、それでどうなったんですか」

「ずいぶん食らいつくね。もしかレネス姫様氣にいつてる？」

「そうですね、そうですねから早く続き教えてくださいよ」

「えー、そう言われるとなんだかもつたいなく感じてきた」

「なんですか、それ！早く教えてくださいってば！」

レネスは食事中とはいえ若様を揺さぶりたい心境になってきた。

あまりに勿体ぶられて苛々することこの上ない。

「すみません、エール酒おかわりしたいんですけど」

そんな声を発したのは本日もう一人のお客様だった。こうなつては若様を揺さぶることはかなわない。

諦めてレネスは立ち上がった。でも客へは当然ながら笑顔で返事をしなければ。

「ちよつとお待ちくださいねー」

「やれやれ。レネス、ついでにこの野菜の酢漬けもう少しおくれ」

「はい」

秋からこつちなんだか益々若様がレネスに対して偉そうになったような氣がするのは氣のせいだろうかとレネスは思いつつ、自分の飲み干した杯を持って厨房へ向かった。

酢漬けを盛り付けるべく厨房へ戻ると、ジンは何をするでもなしに呆けていた。レネスが来たことにも気づいていないようだ。包丁を持ったまま呆けているのは危険極まりない。

（昨日ぶつけすぎた？）

やはり頭は重いからと足から引きずったのがまずかっただろうか
とレネスは焦った。

「父さん、大丈夫？具合悪いなら店閉める？」

ジンはレネスの存在に初めて気がついたかのように驚いてレネスを見つめた。

「父さん？」

次の瞬間、ぶわつと涙を浮かべたジンはレネスを抱きしめた。

「ええええ？父さんどうしたの？大丈夫？」

（やっぱりぶつけ過ぎて情緒不安定？）

いつもとは逆にトントンとジンの背中を叩く。ジンはレネスを締め付けたままおいおいと泣いていた。こんなに泣いているジンを見たのはマリリンが亡くなった時以来だろうか。

（そんなに痛かったか……）

それはそうだろう、鼻の頭にも頬骨にも額にも、青痣がいっぱいだ。若様のいう病気の様もあながち間違っではない。

「父さんごめんー、そんなにぶつけるつもりはなかったんだけど、ドアにぶつけたら今度はドアがぶつかったところから物が落ちてきて、どうにもこうにも……」

レネスを抱きしめたまま、ジンは頭を振った。つまりはそれは関係ないということだろうか。一体何について泣いているのかを確認しようとした時だった。

「あいっかわらず、めそめそめそめそと、女子供でもあるまいし！
そう言いながら住居へと繋がるドアを開け佇んでいるのは、スカリナだった。

「あ、伯母さんおはよう」

「おはよう………」

地を這うように低い低い声を出すスカリナ。はつきりいつて顔は青白く、目の下には隅くつきり、頭はぼっさばさ、折角の美人が台無しもいいとろだ。

「伯母さん、具合悪いならもう少し寝てれば？」

「寝たいけど、店の物音うるさくて寝てられないわよ！二日酔いの女の睡眠邪魔するとはいい度胸してるじゃないのよ！あたたた」

自分の声が頭に響いたのか、スカリナは言うことを言い終えるとまた姿を消した。女の二日酔いは酷いらしいとここでレネスは知った。店の物音に文句を言われたところで商売だからどうにもならないし。

「父さんも心配だけど、伯母さんも心配——」

抱きつかれたままそう言えば、ジンの泣き声は益々大きくなり、二日酔いでもないのに頭が痛い。

「ああ、もう、一体なんだって言うのよー」

酒も飲んでないのに泣き上戸の父と、酒を飲みすぎて具合の悪い伯母に挟まれたレネスは叫ぶしかなかった。

「叫んでるところ悪いけど、レネス」

「それ言うなら取り込んでるところですよ、若様」

「うん、じゃあそれでいいけど、客がきたよ」

「あ、はい、今行きます」

「僕の酢漬け忘れてないよね」

「ああ、はいはい、今それも一緒に持っていきますよ」

ベリッという音が聞こえそうなほどの勢いでジンを剥がしたレネスは野菜の酢漬けを盛り付け、エール酒を注ぎ客席へと急いだ。

若様の来店の翌日、鶏の鳴き声に目を覚ましたレネスは薄暗い中
急いで着替えを始めた。

冬のこの時期、虫がいないのは何より嬉しいが、この朝の辛さだ
けが問題だ。ベッドから起き上がった瞬間部屋の寒さが身にしみる。
「今日も、かなり冷え込んでるわね……ぶるる……」

もっとベッドの中で暖まっていたいという欲求と、今日も仕事だ
という義務で体が引き裂かれそうだといつも思う。

着替えが終わると、今度は今まで寝ていたベッドを直す。寒さで
縮こまって寝ていたせいかあまり乱れはないのですぐ終わる。

枕の位置を整えた時だった、かざりと枕の下から音が聞こえた。

（ん？何この音？）

不思議に思い何度か枕を叩いてみる。

何度叩いても力サカサと音がする。紙のような音だ。時期が時期
だけに虫ということは無いだろうと思いながらレネスは枕を持ち上
げた。

「え、何この紙は。なんか書いてある……って昨日寝る時こんな
なかったわよね」

何が書いてあるのかを確認しようかと思ったが、あいにく蠟燭は
昨夜のうちに燃えきってしまった。外もまだ薄暗いこの時間、日の
光に照らすことも出来ず、とりあえずその紙を手にしたまま部屋を
でた。

部屋を出ると向いの部屋から大きな鼾が聞こえてきた。スカリナ
だ。昨日と一緒に今日も豪快な鼾をかいている。

（昨夜もかなり飲んでたしね……）

この豪快な眠りぶりなら少々音を立てても気づかないだろうと、
特に足音を気にするでもなく軽い足取りで居間へと向かった。

居間の中はジンが火を入れてくれた暖炉のおかげでぬくぬくと暖

かい。寒さで縮こまっていた体が伸びるような気がした。

ジンの姿はない。すでに食材調達に向かったようだ。

「さてと、とりあえずこの紙に何が書いてあるのかを確認してから朝食の準備をしようかな」

いつものごとくのでっかい独り言だ。

暖炉の前にきたレネスは先ほど見つけた紙を広げてみた。中にはたった数行が書かれていただけなのだが、内容を確認したレネスは瞠目した。

中に書いてあったのは――

『伯母上撃退法

その一、料理に辛子を大量に混ぜてみる

その二、早朝に冷水をぶっかけてみる

その三、酒を全部隠してみる』

「な、なにこれ？」

朝の驚きから数時間後、レネスは近くの酒屋へと足を運んでいた。店にあつた蒸留酒の在庫が予定より早く無くなりそうなので、注文に来たのだ。

予定より早く無くなりそうな理由は、もちろんスカリナである。昨日の昼ぐらいまで二日酔いでぐったりしていたはずなのに、夜には復活し、またしても浴びるように酒を飲んでいた。

案の定今日もまたスカリナは二日酔いと称してぐったりしている。二日酔いどころか三日酔いじゃないのかとレネスが呆れて言ってみただが――

「そんなこと言ったら、三日酔いどころか何百日酔いか何千日酔いだわよ」

と頭に雪を入れた革袋を乗せたままスカリナはそう言った。

つまり、毎日があんな状態だということだろうか。一体どうやって生活をしているのか聞きたいような聞きたくないような微妙な気が

持ちにかられるレネスだった。

（それより何より、毎日あんなに飲まれちゃ我が家赤字だし）

今朝の手紙らしき物に書いてあった「酒を全部隠してみる」を実行してみようかと考えてはブルブルと頭を振る。それをやったらスカリナがいなくなる前に客が来なくなる。

レネスはスカリナと一緒に行く気はこれっぽっちもないのだから、早急に諦めて家に帰ってくれないかと切実に思う。だからといって料理に辛子を混ぜる気も、冷水をぶっかけてみる気も更々ないが。

ジンはレネスがスカリナを気遣うたびに悲壮感を漂わせるし、スカリナはスカリナでそんなジンをレネスが構うたびに甘やかすなど怒るし、精神的に疲れることこの上ない。

二日酔いでもないのに頭が痛いと思いながら、酒屋のドアを開けた。

「はあい、いらっしやあい」

気だるげな声でそう言った女性を見たレネスは驚いた。

「ミレイ！なんでいるの！」

ゆるやかに背中まで波打つ赤毛と、目もとの泣きぼくろが印象的な、色香ただよう女性。レネスの幼馴染だ。

「なんでいるのって、いちや悪いのお？」

店のカウンター越しに座るミレイはツヤツヤと光る口紅を乗せた唇を尖らせた。

生粋の美形である若様や伯爵や姫様と違い、際立つて整った容貌をしているわけではないのだが、その雰囲気だけで男を虜にする。

年は一つミレイの方が上ではあるが、ここまで色気があるとしても十代には見えない。

「だって、去年お嫁に行った後全然里帰りしなかったじゃないの」
ミレイは昨年の初めに隣町の酒造所の息子のところに嫁入りし、町を離れていたのではば一年ぶりの再会だった。

嫁に行ったことにより更に色香が増したような気がする。

「そうよう。だから今里帰りしてるんでしようがぁ」

「なんで、急に里帰り？」

「うふん、実はぁ……」

そう言つて立ち上がったミレイの腹部はやけに膨れて……。

「ええっ赤ちゃん出来たの？」

「うん。それであちらは男手しかないからぁ、実家に帰つて産んでくるといいって言われてえ」

ミレイは幸せそうに腹部をなでている。

「いつ、産まれるの？」

ミレイに近づいたレネスは恐る恐るそのお腹に触れてみた。張りのある暖かいお腹だ。そう思った瞬間何かがレネスの手に触れるかのようにうごめいた。

「うわっ、動いたよ、動いたよミレイ！」

「いやぁねえ、生きてるんだから当たり前でしょお。産まれるのはねえ来月の頭くらいかなぁ」

「もうすぐじゃないの！」

「そうよう、だからこちらに帰つて来たんじゃないのお。ここなら母さんもいるしい、兄貴の奥さんもいるしい安心でしょお」

ふふふと笑いながらミレイはそう言つた。確かに嫁に行った先は姑さんも早くに亡くなったとかでおらず、舅と旦那と、あとは働いているのも男性ばかりだと聞いた。それなら心配してこちらに里帰りさせたのも納得がいく。

「でも、ミレイ、もうすぐ産まれるのに店番なんかしてて大丈夫なの？」

「うん、ちよつとの間みんな手がふさがっちゃってね。店番だけだから大丈夫よう」

「そう？それならいいんだけど」

「それでえ、レネスは今日はどうしたのお？ここまで来たということとは追加注文？新年早々商売繁盛ねえ」

羨ましい限りだと暢気にミレイは言う。

「違うのよ、商売繁盛じゃなくて、むしろあがったりというか……」
レネスの言葉にミレイは首をひねった。

「なあるほどねえ。マリンさんのお姉さんが来たのねえ」

商売じゃないところで酒が減って困るとの話から始まり、スカリナについての事情を話したレネスは台にうつ伏した。

「どーすりゃいいのよ、この状態」

「ううーん。行きたくないってばかり言えばあ？」

「言ったわよ、言っただけど、父さんに気を使ってそう言ってるって思っらしくて全然聞く耳持たず！」

先日ジンを麻醉で昏倒させた時などは本気でそのままレネスを連れて行こうと荷造りまで開始された。こんな状態のジンを置いてなんてどこにも行けないと騒いでなんとか止めたが、またいつそうやってジンを眠らせるかなんてわかったものじゃない。

「なかなか、凄い伯母さんねえ。マリンさんも豪快だったけど、その上をいくわあ」

ミレイは座った状態でお腹をさすりつつ暢気にそんなことを言っ
た。

「そんな豪快競争はどうでもいいのよ、問題はあたしはここから離れたくないってことなのよ」

「ちなみにい、レネスはなんでここから離れたくないのお？」

「え、だって父さんいるし。店心配だし」

「それだけ？」

急にミレイは真面目な顔でレネスを覗き込んできた。

「え？」

「だってさあ、その伯母さんじゃないけど、ジンさんは一人でも大丈夫そうな人だし、店だってレネスがいなくなったら誰か雇えばいいだけじゃなあい」

「ま、まあね。でも——」

「そんな穴だらけの理由言うから悪いのよう。もっという理由言い

なさいよお」

「いい理由って何よ」

憮然とレネスがそう言えば、ミレイはやけに楽しそうに笑った。

「いい理由と言ったらこれしかないわあ。『好きな人がこの町にいるから離れたくないわ』これよ、これえ」

「へ？」

「うーん、ミレイの案も確かにありよね。一回試すだけ試してみようかなあ」

酒屋から出たレネスはドアを背に一人ぶつぶつと呟いた。

スカリナがなかなか諦めてくれない以上、思いつく限りのことを試してみるのも悪くない。

「あーでも、それってどこのどいつとか言われそー」

短い付き合いではあるものの、なんとなしにスカリナの言いそうなことは想像がつく。レネスは片手で顔を覆った。

「おい」

「そうなった場合誰って言えばいいのよ……」

「おいってば」

「あたし知ってる人なんて客くらいしか……まさかザックさんってわけにもいかないし……」

「おい、レネスってばよ!」

「レネスねえ……レネスってわけにも……ってそれあたしじゃないのよ」

いくらなんでも自分が好きっては理由にならないだろう、そう思っ
て顔から手を外してみると、目の前に一人の青年が立っていた。

レネスより少しだけ背が高く、黒に近い茶色の髪に同じ色の瞳。

よく見なれたその青年は――

「ロジェ!」

「よ、よう……久し振り……」

ミレイと同じく幼馴染のロジェはほんの少し照れくさそうに頬を
掻きながら言った。

「ひ、久し……振り……」

レネスは自分の顔が引きつるのを抑えようと必死だった。折角普通に挨拶をして
くれているのに、あからさまに嫌な顔をするわけに

もいらない。ついでに言うならばいつか客としてくる可能性だってあるのだから、酷い対応はできない。

レネスの顔が引き攣ったことに気づいたのか、ロジエは慌てて言った。

「きよ、今日は何も持ってないってば」

「ほ、本当でしょうね」

「本当だってば」

「そ、そうよね時期が時期でいるわけもないしね」

よく考えれば今は冬だ。いるわけがないから持つてゐるわけもない。レネスはほっとして表情を弛めたものの次のロジエの言葉にまた顔を引き攣らせた。

「地面掘り返せばなんぼでもいるけどな」

その言葉にレネスはビクリと後ずさった——つもりだったが、酒屋のドアにあえなく逃げ場はなくなつた。

「じよ、冗談だってばよ。もうお前の嫌がることしないってば」

「あんた、そう言いながら何度ミミス持つて追いかけてきたっけ」

「ははははははは、そんなこともあつたっけ？」

そうレネスがロジエを嫌がる理由、それはもちろん虫が絡んでいたのである。

子供の頃はよくミレイとロジエとレネス三人で仲良く遊んでいたのだが、ミレイとレネスが店の手伝いをするようになった途端何故かロジエは激しく嫌がらせをするようになった。

それもレネス限定で。単に遊ぶ相手がいなくなつて寂しいからなんだろうと安易に考えていたのだが、その嫌がらせの度合いは上昇の一途を辿つた。

ある時は袋に大量のゴキブリ入れてきてみたり。

「あれはカブトムシだと思つたんだよ」

「どー見てもあれはゴキブリでしょうがー！」

「で、でもちゃんと本物のカブトムシ持つていったこともあつたじ

やないかよ。それなのにお前俺の顔に投げつけやがって」

「当り前でしようが！あたにしとつちやゴキブリもカブトムシも大嫌いな虫に変わりないわよ！」

またある時は大量の芋虫を持ってきてみたり。

「お前の店で虫料理作るって聞いたから、足しになればいいと思っただよ」

「あたしがその料理喜んでるわけないでしょー！」

「しょっちゅう出るっていうから虫嫌い治ったのかと思ったんだよ」
「そんなの治るわけないわよ！」

更にある時は花をくれたので和解の印かと思ったら、アブラムシがいっぱいついた花だったり。

「花についたアブラムシまで確認してるわけないだろ」

「絶対嘘よ、絶対いっぱいついてるの確認してから持ってきたはずよ！」

「偶然だよ、偶然」

「あんた偶然でミミズ持つて追っかけて来たとしても言うの！」
「ぐ、偶然地面掘っただけだ」

そんな具合に何度も虫を使った嫌がらせを受けたレネスは、すっかりロジエが苦手になっていた。顔を合わせれば何かされると警戒するのが基本だ。

「で、今日は何の用よ……」

いつでも逃げ出せるようにレネスは少しずつ横へと体をずらして行っている。ロジエとドアに挟まれたこの状態では逃げ場は横だけだ。

「いや、かなり久し振りだと思って声かけただけで……なんでかわかんねーけど、半年くらい顔見てないだろ？気になってさ」

それはそうだろうとレネスは思った。ここ半年程の間、レネスは

ロジエを見かける度見つからないように逃げていたのだ。ロジエの話は続いていた。

「何軒も離れてないところに住んでるはずなのに半年も会わないのって不思議だよな。お互い仕事も持つてる忙しい身だからかな。はははは」

「あははははははは」

ロジエの笑い声に合わせてレネスも乾きに乾いた笑い声をあげた。「暇を見つけてさ、お前のところの店まで行ってみようと思ったこともあったんだけどさ、そんな時に限ってなんか配達の仕事が大量に入ったりしてさ」

「へ、へー」

それは初耳だとレネスは思った。どこの誰だか知らないがロジエの邪魔をしてくれてありがとうと心から思う。

「お前、秋になんか事件に巻き込まれたんだろ？大丈夫だったのか？」

「へ？何で知って？」

「夜に突然お前のところの小父さんが来て、ロビイ貸してくれって言っからさ。何があったのかと思って後で調べたら、あの日お前の店に兵士が来たりして大変だったらしいじゃないか。貴族に無理やり拉致されたとか何とかって」

そつえばロビイはロジエのところのロバだったと思いだした。

製粉業をしているロジエの家では荷物を運んだり、製粉するための臼をひかせるためにロバを使っている。

「とりあえずは何ともなかったわよ。拉致されたわけでもなくて豪華な馬車にも乗れたし」

「豪華な馬車？公爵のか？」

とたんにロジエの顔が険しくなった。若様が白砂亭に来てることは近所ではよく知られていることなので、ロジエも勿論知っているだろう。それなのに今さら険しい顔をするとは意味がわからないとレネスは思った。

（もしかして、あたしの知らないところでロジエも玩具にされてる？）

「うん、それにも乗ったし。伯爵様の馬車にも乗せてもらったし」

「どこの伯爵だよ」

「え、カロッツ様よ。すごく素敵な伯爵様なの。物語に出てくる王子様みたいで！」

レネスは伯爵を思い出した。あれで女性なのが本当にもったいない。ドリアン姫が惚れるのもわかる。

（まだドリアン攻撃は続いているのかなあ）

そこでレネスは若様との昨日の会話を思い出した。

「ああ、ドリアン姫が何したのか結局聞きそびれたままだった！」

「な、なんだよ、突然。でもってそのドリアン姫ってなんだよ。なんかの物語かよ」

「いや、姫様。王様のところにいる姫様。あーもう今度こそちゃんと言ひ聞かなくや！若様今日もくるといいなあ」

若様は毎日くるわけではない。一応仕事もあるはずだし、時々は領地に行ったりもしているらしい。来ない時はひと月くらい音沙汰がなくなったりするのだが。

（新年早々領地までは行っていないわよねえ）

今日こないにしろ、近いうちには必ず来て欲しいものだ。この中途半端なもやもやを是非解消して欲しい。

「お前、貴族なんてやめとけよ。弄ばれて捨てられるのがオチだぞ」
目の前で険しい顔をしたままのロジエが言った。

「は？弄ばれる？捨てられる？」

誰に弄ばれて捨てられるのだろう。そもそもなんでそんな話になつてののだろうか。レネスは思った。

「そうだ。身分が違うんだからよ。仲良くなるのも大概にしとけつーことだ」

「はあ、仲良くなるのも大概。え、でもそしたら売上減るし」

「お前は、また売上の心配か。お前が仲良くしなくたって、みんな

小父さんの料理を目当てに行ってるだけなんだから、売り上げには関係ないだろ」

「そ、そうなの？」

なんかスカリナとミレイに続きロジエからも店はジン一人で間に合うと言われているような気がしてレネスは意気消沈した。

（あたしって、そんなに店にいる意味なかったんだ）

がつくりと頂垂れる。ジン一人で大丈夫を皆に言われるとは思わなかった。まるで自分が必要とはされてないと言われているようで

「そっか。あたしいてもいなくても関係ないんだ、売り上げに……」
ぽつりとレネスがそう呟けは、ロジエは慰めるようにレネスの肩をつかみ、爆弾発言をかましてくれた。

「そうだ、だから安心してうちに嫁にこい！」

レネスは一瞬何を言われたのかわからなかった。

よめ？よめとはなんのことだったろうか。安心してうちによめにこい。安心してうちに嫁にこい。

「はぁーーーーーーー？」

白砂亭へと戻ったレネスは、ジンへの挨拶もそこそこに、勢いよくとある場所へ向かった。

しばらくそこを見つめた後、中から一つの瓶を掴んだ。そして、おもむろに傍の棚から杯を取り出し瓶の中身をなみなみと注いだ。
「レシー？」

レネスの尋常ではない様子にジンが近づいてきたのが背中越しにわかる。だがかまってなどいられる状態ではなかった。

次から次と起こる厄介事にレネスの神経はすり減っていた。

スカリナの登場に悩み、今度はロジエの戯言ときたものだ。

（みんな揃って店は父さんだけで間に合うって）

（あたしなんか白砂亭には必要ないって）

（お客さんだって別にあたしがいてもいなくてもいいって）

（挙句に挙句に……）

「だから安心して嫁に來いってなによー！どこをとっても安心できないわよ！」

レネスはそう叫んだ後なみなみと杯に注いだ蒸留酒を一気に飲み干した。

「お、おい」

さすがのジンも慌てているようだ。

「嫁？なんのことだ？」

慌てたジンは珍しくレネスに対して質問をしてくる。だがレネスはそれに答える余裕などなかった。

レネスはエール酒か葡萄酒しか飲んだことがない。

度の強い酒を一気に飲んだことから、顔と胃が一気に熱くなる。ズドンと肩も重くなったような気がする。

エール酒など水みたいなものだが、さすがに蒸留酒ともなれば一気に飲んでいいものではない。だが、レネスはそんなことにもかま

わず、また杯へとなみなみ注ぐ。

「こうなったら、ヤケ酒だ！」

「レシー、やめなさい」

「やめない！」

レネスを止めようとジンが伸ばしてきた手をかわし、もう一度蒸留酒を飲み干した。

二度目の衝撃に体が悲鳴を上げる。一気に目が回ったのだ。

「落ち着け。それで嫁って誰から？」

嫁という言葉がものすごい気になっているらしいジンが酒瓶に手を伸ばしながら何度も聞いてくる。こんなにしゃべってるジンは本当に珍しい。答えるそぶりもないレネスに「誰だ？」「どこのどいつだ？」と追及してくる。

ついに瓶を奪われたのだが、レネスは気にせず新しい瓶を取って栓を開けた。

「こうなったら二日酔いでも千日酔いでもしてやるー！」

レネスは杯に注ぐことすら面倒になり、杯を放ると瓶ごと口に入る。ゴクゴクと飲んでは「ぷはぁ」と息をつき、袖で口からこぼれた酒をぬぐう。

何度もジンの手が伸びてくるがこんなに自分の反射神経は良かっただろうかと思わせるほどうまくかわせる。

グルグルと景色が回る。

「あははははは、まわるまわるー。なんか楽しくなってきた」

「なんの騒ぎ？」

騒ぎを聞きつけたスカリナが二階から下りて来たようだ。

「あははははは、伯母さんも一緒にどーう？そろそろ何千日酔いから回復したでしょー」

「やだ、なにこの子酔っぱらってるの？」

「うん、もう飲まなきゃやってられないというかー」

「どうしたのよ？」

「どうもこうも。いつもこいつも勝手なことばかり言って……」

あたしなんて……あたしなんて……いてもいなくても関係ないんだ
ー。うわぁーん」

話しているうちになんだか感極まって泣けてきた。体が熱い。目も熱い。

「いったい何があったの？」

スカリナはレネスから視線をそらしジンを見て聞いた。ジンもわけがわからず頭を振っている。

それはそうだろう、わかってるのはレネスだけだ。もう頭の中はぐちゃぐちゃで……。

街から離れたくないし、

白砂亭からも離れたくないし、

ましてやロジェの所に嫁に行くのも嫌だし、

スカリナの酒代は心配だし、

好きな人がいるって嘘つかなきゃならないし、

虫持って追いかけてくるロジェは嫌だし、

でもミレイは結婚して幸せそうだし、

貴族からは弄ばれて捨てられるらしいし、

スカリナには早く諦めて帰って欲しいし、

ドリアン姫が何やったか気になるし。

段々自分でも何が何だかわからなくなってきたレネスは、涙と鼻水をたらだら垂らしながら蒸留酒を飲み続けた。

途中でつい「ヒキガエル」のヘレンより必要とされてないなんて」などと口にしてしまっている。

蒸留酒の瓶を抱えたまま床で眠ってしまったレネスから、ジンは瓶を取り上げ、涙と鼻水で濡れた顔を布でぬぐう。

「どうしちゃったのかしら……」

その様子を覗き込みながらスカリナは言った。

「この子が泣くところ初めて見たわ。まあ数えるくらいしか会って

ないからだけど」

ジンは何も語らず作業を続けている。

「何があつたのかはわからないけど、情緒不安定なようだから、尚更ここを早く離してやる方がよさそうね」

「……………」

「マリンより……あなたに似てると思ったけど、寝顔はやっぱ親子ねマリンに似てるわ。あの子もよく大泣きしては眠っちゃって……」

顔をぬぐっていた布を置くと、ジンは顔に張り付いている髪の毛をそつと払ってやっている。

「さすがにマリンはこんな荒れ方はしたことないけど……ヒキガエルとかヘレンとかなんの話なのかしら……」

ジンはレネスを抱き上げるとスカリナをじつと見つめた。抱きあげられたレネスは身動きすることもなくぐったりしている。すつかり泥酔して意識がないようだ。とはいえ規則正しい寝息が聞こえるところを見ると身体的には問題がなさそうだが。

ジンの無言の圧力にスカリナは腕を組み片方の眉を上げた。

「何よ、なんか言いたいならちゃんとハッキリ言いなさいよ」

しばらく睨み合っていたのだが、ついにジンは口を開いた。

「……………この子の情緒不安定の最たる原因はスカリナ、お前だ」

ジンは重々しくスカリナに向けてそう言った。

「なんですって？あたしが原因ですって？」

こくりとジンは頷く。

「——お前が本人の意思も構わず無理に連れて行くこととするから、不安になってるんだ」

「な、なによ、まるでなんでもわかってる顔して。でも、なんとかわれようと譲らないわよ。この子を本当の意味で理解できるのは私だけよ」

ジンは首を振った。

「そうじゃないって言うわけ？でもね、このままこの街に置いてお

くのは危険なのよ、セイレーンの存在が明るみに出た今、国内外の権力者からこの子は狙われる。そんなの放っておけるわけじゃないじゃない！」

「——お前のところに行っても危険がなくなるわけじゃない」

「あたしのいる場所なんて殆ど知ってる人いないわよ。身を隠すには最適だわ」

「——権力者たちが見つからないからとあっさり諦めると思っているのか？」

「いいえ、そうは思わないわ。でも私なら守ってあげられるかもしれないし——」

ジンはもう一度首をゆっくり振った。

「先見の力しか持たない者にセイレーンは守れない」

「知ったようなこと言うじゃないのよ」

スカリナは憎々しげに言った。

「——それにこの子は守られるだけの子じゃない。自分のことはちゃんと自分でやる」

「そりゃ、セイレーンの力を持つんだから出来るでしょうよ。でも

——」

カランコロンと客の来店を告げる鈴の音が聞こえた。誰かがやってきたようだ。

「——だったら、ここで味方を増やす方が得策だ。お前のところにやる気は一切ない」

「おい、レネちゃん、いないのかー？」

客の声が聞こえる。「今行く」とジンは返事をし、レネスを持ったまま二階へと続くドアへと向かった。

「ついでに言うなら、いい加減この家にいられると商売の邪魔だ。早く帰ってくれ」

捨て科白のようなジン言葉にスカリナはきつく唇を噛んだ。

「なんだー？今日はジンしかいないのかー？レネちゃんはおつかいかー？」

厨房の重苦しい雰囲気とは反対に、店先は常連客のザツクの暢気な声が響いていた。

レネスが目を覚ますと、辺りは深い闇に覆われていた。

（あれ……まだ夜中？）

なんでこんな夜中に目が覚めてしまったのだろうか。

（ああ、カーテン閉めてなかったのね）

珍しく降雪から開放された空には月が高く上っている。月のやわらかな光が降り注いでいる。

いつもなら夜ベッドに入れば、鳥の鳴き声が聞こえる明け方までぐっすりなのだが。

（ん？あたし昨夜いつ寝たっけ？）

そこでレネスは何かがおかしいと気がついた。頭が何かにひっばられてるかのように引きつっているのだ。そのせいか首が痛いような気がする。ついでに言うならば着ているものもいつもの夜着よりごわごわしていて心地が悪い。

暗闇の中、レネスはむくりとベッドの上で起き上がり、自分の頭に手をやった。ひきつると思ったのも当たり前で、仕事をする時同様に後ろで括ったままだ。いつもは寝る時には一度髪をとかすので、このまま寝ることは普段のレネスならばありえない。

ひきつれるような痛みにとりあえずレネスは紐を解くことにした。

ばさりと肩から背中に髪が広がる。その後はまだ痛む頭を両手で揉み解してみる。だがなかなか痛みは治まってはくれない。

「うー、なんで髪くくったまま寝ちゃったんだろう、あたし」

そのまま頭を揉んでいるうちに段々目が暗闇に慣れてきた。自分の着ているものが目に入った。

「なんで？エプロンつけたまま？あれ？服も着替えてないし？あたし何やったっけ？」

ここにきて、レネスはやっと何がおかしいかを全て把握した。

起きるにはありえない時間帯、括ったままの髪、エプロンをつけ

たままの仕事着。

つまり、自分は仕事をしてる途中で寝てしまったということだ。

「なんで寝ちゃったんだっけ……」

そこでレネスは自分の記憶を朝から辿ってみた。相変わらず頭を揉みながらも一つ一つ辿って行く。

「確か、伯母さんの放置した空き瓶片付けた後、酒屋に行って、ミレイに会って……ロジエに会って……」

ロジエという名前あたりから自分の声が小さくなっていく。レネスは全部を思い出した。ロジエの求婚に驚いて、ロジエを突き飛ばして逃げて、帰ってきてから蒸留酒を一気飲みして――。

「ああああああ、父さん怒ってるかな。馬鹿なことしちゃって、拳句に高いお酒までダメにしちゃって……」

痛みを抑えるとは別の意味でレネスは頭を抱えた。冷静になると自分のしたことがとても恥ずかしい。

「仕事までサボっちゃったし……父さん一人で大丈夫だったかな……」

その言葉に次々と別の人間の声が重なった。

「ジン一人だってなんとかなるわよ」

「店なんて別の人間雇ったっていいんだし」

「みんな小父さんの料理目的なんだし」

（……………父さん一人で……………大丈夫か）

レネスはため息をつくとき、もう一度ぱたりとベッドに体を倒した。なんだか全てがどうでも良くなった気がする。

このままもう一度何も考えずに寝てしまおうと眠りやすい体勢を求めて寝返りをうった。と同時に力サリと枕の下から音が聞こえた。
「え？」

（枕の下に何かある？）

「なんか……、朝もこんなことあったような……」

そう口にしてしまいながら、レネスは枕の下を探ってみた。やはり紙がある。

「何なのまた？」

レネスはその紙を取り出すと、また起き上がった。月明かりに照らしてみるとやはり何かが書いてあるのがわかる。

確か掃除の時、この部屋の蝋燭を足したはずだったと思い、レネスは立ち上がると燭台に火をつけた。ヒギガエルの屋敷にあったような絢爛豪華な燭台とは違い、実用一点張りで、たった一本立てるだけの簡素な燭台だ。

小さくともやわらかな明かりの下、レネスは紙に書いてある文字へと視線を這わせた。

「うつとおしい求婚者の撃退法

その一、男性特有の急所に蹴りを入れてみる

その二、街を歩く時は変装してみる

その三、絶対手に入らないものを持つてきたら結婚すると言ってみる」

読み終えたレネスはしばらくその文面を見たまま固まっていた。

「……………一体誰なんだろ、これ書いてるの……………父さん？
じゃないわよね、字が違うし……………って、なんでいつも枕元？」

朝にも増して謎が深まる。寝ている間に誰か来たのだろうか。ジンでないとすれば、なんで求婚の話まで知ってるのであるうか。

（よくわからないけど、参考になりそうなら参考に見てみようかな）

もう一度文面をよく読み検証してみることにした。

「その一はまあよくある手だけど、その二の変装って……………若様やヒギガエルでもあるまいし、変装用のカツラも何も持ってないわよ。

……………それよりこの、その三って何よ、手に入らない物？なんだそれ、手に入らない物なら存在自体知ってるわけじゃないのあたしが」
スカリナ撃退法の時と同じく役に立つようで全く役に立たない代物だとレネスはがっかりした。と同時にあまりの役に立たなさ具合がなんだかおかしくなってきた。誰が考えたにしろ、ただ想像するだけならスカリナ撃退法にしろ、ロジエ撃退法にしろ面白い。沈んでいた気持ちもなんだか浮上してきた。

（そういえば、なんかお腹空いた……）
気分が浮上したとたん鳴り出すお腹。自分の単純さがまた可笑しい。

「ふふ、なんか残り物でも漁ってこようつと」

今が一体何時かすらわからないのだから、ジンが起きている可能性も低い。つまりは残り物で我慢するしかないかと、レネスは立ち上がると燭台を手に部屋を後にした。

やはりどこもかしこも真っ暗だった。暖炉の火も殆ど消えかけていた。小さな小さな火が燦っているのだけが見える。

ふと、店へと繋がるドアの隙間から光が漏れているのに気がついた。どうやら下に誰かいるらしい。ジンなのかスカリナなのか。

醜態を晒したことにより、気まずさで誰かに会つのを一瞬躊躇したが、レネスは諦めたようにドアを開けた。いずれにしろ誰にも会わずにすませることなんて出来ないのだから。

「あら、レネス目が覚めたのね」

そこにいたのはスカリナだった。厨房の調理台には数本の蒸留酒と葡萄酒の空き瓶が転がっている。

「お、伯母さんこれ全部一人で飲んだの？」

「うん？あんたが飲んだのよりほんの少し多いただけじゃない」

レネスの言葉にスカリナは目の前の空き瓶を「いち、に、さん、しい——」と数えた。

「いや、記憶あんまりないけど、それより遙かに多いと思うわよ」

呆れたようにレネスは言った。自分は確か二本目までしか手をつけてないはずだ。——たぶん。

「でも一人で飲んだわけじゃないわよ」

「え？」

「そこに転がってる人も半分は飲んだわよ」

スカリナの指さす方向を見れば、床に転がるジンの姿があった。

「とととと、父さん！」

レネスは驚いた。ジンが酔いつぶれたところなど初めて見たからだ。

「父さんお酒弱くなった？」

確かいつもどんなに飲んでも起きていたはずなのに、今日は小さくいびきをかきながら寝ている。完璧に熟睡しているようだ。

「ふふ、ちょーつとお酒に薬まぜちゃった」

「え、薬！また麻醉薬？」

「ううん、今度はただの睡眠薬」

一体スカリナは何者なのだろう、次々と薬を使ってはジンをあつさり倒れさせている。

（また熊にも効くってやつなのかな）

とりあえず、こんな状態を見せられるとスカリナだけは敵に回したくないと心底思った。とはいえ、前回はともかく今回は何故ジンは倒されたのだろうか。レネスは恐る恐るスカリナに問いかけた。

「こ、今度はなんで？」

レネスに問われたスカリナはまるで「なんでそんなこと聞くの？」とでもいいだけに首を傾けた後こう言った。

「え、ム力ついたから」

「え、ム力ついたってなんで……父さん何かした？」

「別に……ちよつとあたしより年上だからって偉そうなと言われただけよ」

不満そうにそう言ったスカリナはまた酒を口にした。

（父さんが偉そうなことを？そんな偉そうと判断できるほど喋るなんて珍しいし）

「レネス、なんかおつまみ作ってよ」

「へ？」

「お酒だけじゃ口寂しいのよ。なんでもいいから」

「う、うん」

そつえば自分もお腹が空いてここまで来たんだっと思ったと思い、レ

ネスは食材と残っている料理を確認した。ジャガイモと玉葱とハムがあつたので、それを細切りにして炒めることにした。塩と香草を入れれば十分おつまみになるだろう。冬とはいえ前に試しに育ててみた鉢植えの香草の一つが室内で程々に茂っている。自分の分は残った野菜スープとパンを食べることにした。少し乾燥して硬くはなっているが、スープに浸して食べれば大丈夫だろう。

「はい、伯母さんお待ちせ。簡単な物で悪いけど」

「ありがと。うん、美味しそうじゃない。さすが食堂の娘だけあつて手際いいわね」

スカリナは早速口に入れてみては「うん、美味しい」と言っている。

「そお？時々だけどね、あたしが作ったものも出してるのよ」

レネスは手際がいいと言われたのが嬉しくて顔を緩めた。嬉しくて、自分も食事をとりながら、前に作った料理のことや店の客のことなどを次々とスカリナに話して聞かせた。スカリナも楽しそうに聞いてくれ、女二人による夜は楽しく更けていくのだった。

「なんか、来るのも突然なら、帰るのも突然で、びっくりしちゃった」

酒屋のカウンターに頬杖をつき、編み物をしているミレイに向かって言った。

「あらあ、希望通りにことが進んだんだから良かったじゃないの」
レネスへと返答を返しつつもミレイは手元から目を離さない。

レネスが前回この酒屋に訪れた日から三日が経っていた。この間注文したばかりなので取り急ぎ必要な酒などなかったのだが、突然自宅へと戻ったスカリナに驚き、誰かと話をしたくて仕方がなくなつたレネスはミレイの元へと遊びに来たのだ。何せジンと話をしたところで、自分一人で延々喋っているだけなのでつまらないのだ。

（まさか客に言つたつて仕方ないしね……）

「でもさあ、本当に突然だったのよ。昼近くに起きてきたと思つたら、そのまま『じゃ、そろそろ帰るわ』って言つていなくなつちやつた。こつちも丁度忙しい時期だから挨拶もろくすっぽ出来ないし頬杖をついたまま片手で小さな袋をもて遊ぶ。ミレイがその袋へと一瞥をくれた。

「なんなのお？それ。さつきからずうつと弄つてるけどお」

「……わかんない。けど帰り際にこれだけをあたしのポケットに突っ込んで行つたのよ、伯母さん」

「ふうん、何にも言わなかったの？」

「うん、何にも」

レネスは頬杖を外してその袋を両手で持った。触つてみた感じでは何か小さな物がいくつも入っていそうなのだが。ごろごろした感触がする。

「なんだと思う？」

「さあねえ。開けてみればいいんじゃないの？」

「な、なんか怖くない？」

「ええ〜？なんでえ？伯母さんが変なものの渡すと思うの？」

「い、いや、そういうわけじゃないけど。じゃ、開けてみるわよ」

一人勝手に気合を入れたレネスは縛つてある紐へと手をかけた。

「――― 飴？」

レネスの言葉にミレイまでもが手を止めて袋の中を覗き込んだ。

「あらあ、良かったわねえ。あんた甘い物大好きでしょう？食べてみたら？」

「う、うん」

レネスははつきり言つて拍子抜けしていた。ほんの数日しか一緒に暮らしていないとはいえ、あの伯母のことだから麻酔薬とか睡眠薬とかの類の怪しいものを入れているかと思つたのだ。そうじゃなかったことに安心しつつ、袋の中から飴を一粒取り出した。

「でもさ、飴つてこんなに毒々しい色してるっけ？」

その飴らしき物は泥水に葉っぱでも混ぜたようなわけのわからない色合いをしている。

「さあ？珍味か何かじゃないの？」

「ち、珍味？」

珍味という名の物には激しく抵抗があるとレネスは思った。ジンの作る虫を使った料理を珍味と指す人もいるし、何より一番の衝撃の珍味はやはりアレ……ドリアンだった。

「な、なんか嫌な予感するから食べるのやめとくわ」

慌てたようにレネスは取り出した一粒を袋に戻した。絶対食べてはいけない禁断の飴の気がする。

「意気地なしねえ」

ミレイは暢気にそんなことを言いながらまたしても編み物を再開した。飴を食べるのを躊躇したくらいで「意気地なし」というのはあんまりの気がする」とレネスは思った。

（結局ミレイだって怪しい物体だって思ってたってことじゃないのよ）

スカリナの置き土産の正体もはつきりしたところで、レネスはミレイの手元を覗き込んだ。

「ねえ、それって赤ちゃんのこと？」

「ふふ、そうよう」

ミレイが編んでるのは小さな小さな靴下だった。小さな物にも係わらず、ほんの少し模様を入れてみたりとミレイの芸は細かい。

「よくそんな小さな物作れるわよね。器用で羨ましいわ」

数々の自分の失敗作を思い浮かべつつレネスは言った。この小さな靴下とレネスの失敗作では天と地程の差がある。

「そおねえ、別に特別器用ってわけじゃないんだけど。あんたよりは器用だわねえ」

「はいはい、正しくその通りですよ」

「だってえ、レネスの場合いつも途中で厭きて早く仕上げようとするから、ああなるんじゃないの？」

「ぐっ」

そう、ようするにレネスの失敗の大きな原因。それは厭きやすい上にせっかちな性分が災いしている。さすが幼馴染だけに、そんなレネスの気性をわかりすぎるほどわかっているミレイは的確に問題点を指摘してくる。

「いーい？編み物って言うのはねえ、一編み一編み心を込めてやるものなのよお」

そう言いながら微笑を浮かべ、変わらず手を動かすミレイは同性でも見とれるほど綺麗だとレネスは思った。

（満ち足りた顔しちゃって）

見ているこちらまで満ち足りそうな気持ちになってくるのが不思議だ。

「ミレイ幸せそうね。いい人と結婚して子供も出来て……」

レネスのその言葉にミレイはもう一度手を止めると顔を上げにやりと笑った。

「ふふ、そうねえ。レネスも早く結婚しなさいよお」

「あのねえ、結婚するには相手がいるでしょうが」

「あらあ、いるじゃないのよあ」

「どこに」

「やあねえ、とぼけちゃってえ。ついこの間この店の前で熱烈な求婚されてじゃないのお」

「は？」

「熱烈な求婚？誰が？誰に？とレネスはボカンと口を開けたまま考えた。

「誰か別の人と勘違いしてない？」

「やだあ、レネスったら本気で忘れてるじゃないのお、その顔は」

「え、忘れてる？」

「ロジエよ、ロジエ」

ロジエという名前を聞いた瞬間、数日前の出来事が一気に頭に浮かんできた。「安心して嫁に來い」と言ったのは——紛れもなくもう一人の幼馴染であるロジエ。

「ぎゃー、すっかり忘れてたー！」

あまりのことに、レネスは両手を顔に当て絶叫した。

「あんた、いくらなんでも存在どころか求婚したのまで忘れられたら、ロジエが可哀そうよ……」

いつものんびりまったり言葉を放つミレイの、やけにしっかりした真顔での言葉に、さすがにレネスも縮こまるのだった。

ミレイの小言が終わり、ほうほうの体にて逃げ出してきたレネスは白砂亭へと続く道を歩きながらため息をついた。道に残った雪がサクリサクリを音を立てている。

（伯母さんがいなくなっても、まだ問題が残っていたとは……………）
「問題ってどんな？」

背後から突然聞こえた声にレネスは飛び上った。

（こ、この声は）

「若様！」

「うん」

振り向けば確かにそこには煌びやかないかにも貴族な若様の姿があった。いつぞやの死体もどきの姿とは違い今日も貴公子らしい姿だ。

「な、なんでこんなところに」

驚きどもりつつレネスがそう言えば――。

「店に向かつてる途中で、レネスが独り言を言ってるのが見えたら馬車から降りただけだよ」

「え、あたし独り言なんて言っていました？」

「うん、言ってたよ。こんなことなら顔見た瞬間逃げるんだったとかなんとか。誰から逃げるの？」

「え、あたし口に出してました？」

引きつった顔でそう言ってみれば、若様はいつものごとくの呆れた顔で――。

「だから、いつでも、普通に、考えがただ漏れだから」とのたまった。

頭の中で話しているつもりがなんで口に出してしまうのだろうかと非常に不思議でならないレネスだ。

「あは、あははは」

とりあえずここは笑つとけ笑つとけとばかり乾いた笑いを洩らした――その時だった

「危ない！」

若様の突然の声に体が浮き、視界が一転した。

べしゃっ！という音を立てながらレネスは道の脇に積み上げられた雪の山に頭から突っ込んだ。町の人たちが雪かきをした後、通りの邪魔にならない所に集めた雪の山だ。

雪とはいえ、積み上げられた状態では結構硬く、拳句ところどころ泥や砂も混じっていた。

そんなところに頭から突っ込んだレネスは――起き上がるなり怒りをあらわにした。

「いきなり何するんですか！ぺっぺっぺっ――口の中まで雪やら砂やらが、入っちゃったじゃないですか！ぺっぺっ」

体についた雪を払いながら、口に入った雪と砂を吐き出した。

「レネス――君ね、一応は女の子なんだから、もう少しなんとかならないのかい、その行動。どこの世界に『ぺっぺっ、ぺっぺっ』口から物を吐き出す女の子がいるというんだい？」

雪にも泥にもまみれることなく、会った時の状態そのままの若様は呆れを通り越してうんざりしたように言った。

呆れられようがうんざりされようが仕方ないではないかとレネスは思った。自分が突き飛ばしたくせにその後の行動までケチをつけられても堪ったものじゃない。

「そんなこと言ったって、口の中じゃりじゃりして気持ち悪いんですもん」

「そういう時はだね、そつと布に出すとかしたらいいじゃないか」

「はいはい、わかりましたよ」

レネスは布を取り出すと仕方なく口元を拭いた。全く最近は何んだか小姑のように若様は小言ばかりを言う。レネスは布で口元を隠しながらこっそり舌を出した。

「おや？そういう態度をとるとは、いけない子だねえ。命の恩人に対して」

レネスが何をしてたかを完璧にわかってるような顔をした若様は偉そうに腕を組んだ。やっぱりバレてたかと思いつつも若様の言った「命の恩人」という言葉にレネスは驚いた。

「え、命の恩人？」

人を雪山に突き飛ばしておいて命の恩人とはどういうことだろうか。レネスの問いに若様は鷹揚に頷いた。言われてみれば突き飛ばされる前に若様の「危ない！」という言葉聞いたかもしれない。

「何かあつたんですか？」

周りを見れば特に通りを歩く人も変わつた様子はないし、店先にいる人達も別に変つてない。少し離れた場所にはデランドール家の馬車も見えた。

「これだよ、これ」

そうして若様は先程レネスと立ち話をしていた場所に帰ると近くの建物の壁を指差した。

「こ、これってナイフ？」

壁には深々と小さなナイフが刺さっていたのだ。もしあのまま気付かずこの場所にいたら、このナイフは高さから言つてレネスの首のあたりに深々と刺さつたはずだ。

レネスはゾツとして若様を仰ぎ見た。それを考えれば確かに泥や砂混じりの雪の中に突っ込んだとしても文句は言えない。

「わ、若様、なんで？」

「わからない。いきなり通り過ぎていく馬車の中から飛んできてね。レネスをこちらへ引っ張るのがやつとだったから、犯人の顔までは見てないんだけど」

飛んできたナイフを避けるには確かにそうするしかなかっただろう。仮に若様がレネスを突き飛ばそうとすれば、身を乗り出した若様に当たっていたことだろう。

一瞬でそれを判断してやってのけた若様の判断力と瞬発力にレネスは感心した。

「ほ、本当に命の恩人だ。ありがとう若様」

レネスがそう言うと、若様は「どういたしまして」と言いながら優しく笑った。

「でも、若様が狙われるならともかく、なんであたし？」

衝撃から立ち直ると今度は疑問でいっぱいだった。子供のように「なんで？」「どうして？」という言葉ばかりが浮かぶ。

「もつともな疑問ではあるけどね、その僕ならともかくっていうのは何かな？」

「だって、若様とっても偉い貴族様だし。性格もアレだし……」

そこまで言ったレネスはバツと手で口を塞いだ。

（やばー、またやつちゃった）

「ふうん、その『アレ』については是非とも詳しく教えてもらいたいものだね」

若様から漂う冷気にレネスは縮こまった。ここは得意の話のすり替えをするしかない。

「わ、若様、このナイフこのままじゃ危ないんじゃないですか」

深々と壁に突き刺さったままのナイフを指差してレネスは言った。この建物の住人だってこんなのを見たら驚くだろう。

「うん、そうだね。とりあえず誰が君を狙ったのかの証拠にもなるだろうから、僕が預かっておくよ」

若様はそう言うとおっさり壁からナイフを引き抜き、懐から取り出した絹にそれを包んだ。

レネスはあっさりと話題のすり替えに乗ってくれた若様に安心し、ほつと息をついた。

「さて、ともかく、ここですべてしているとまた襲われる可能性が高いから、とりあえず馬車にお乗り、店まで連れて行こう」

あたりを窺うように見まわしてからレネスをデランドール家の馬車へと誘った。

確かに先程襲われたばかりだというのに暢気にいつまでもここにいたら、またその馬車が戻ってくる可能性がある。レネスは素直に若様の言葉に従うことにした。

若様に手を貸してもらいながら馬車へ乗りこもうとした時だった。
「レネス！行くな！」

何故かレネスを引きとめる声が背中にふりかかった。この声は――
「げっロジエ」

「レネス、知りあいかい？」

振り返って見てみればこちらへ向かって猛然と走ってくるロジエの姿が見えた。

「ぎゃー、若様早く行きましよう早く！」

こうなったら逃げるが勝ちとばかりにレネスは若様を急かし転がり込むように馬車へと乗った。

「いいのかい？君のこと呼びながら走ってくるけど」

「いいんです、いいんです。お願いだから早くしてくださいー！」

鬼気迫るレネスの勢いに若様は少し眉をあげると、素直に御者へと指示を出してくれた。

「白砂亭へ向かっておくれ」

指示に頷いた御者はすぐさま領き馬車を発進させた。ガラガラと音を立てながら馬車は動き出す。

「レネスー！いつちやダメだー！」

馬車にたどり着いたロジエが走り出した馬車に合わせてそのまま走り続ける。自分の名前を何度も呼びながら馬車に喰らいついてくるロジエにレネスは顔を引きつらせた。

（な、なんの茶番よ、これ）

「ねえ、レネス、彼泣きながら走ってるけど、どうしたんだい？」

「さ、さあ」

こっちが聞きたいくらいだとレネスは思った。レネスとしてはただ単に会いたくないから逃げただけなのだが、なぜ「行くな」という言葉になるのがさっぱりわからない。

ついでに言うならなんで泣いてるのかもだ。

ついに馬車の速度に追いつけなくなったらロジエの姿が馬車の窓か

ら消えた。背後から絶叫するかのようにレネスを呼んでいる声が聞こえた。

「君、彼に何かしたの？」

あまりのことに若様もレネスに胡乱な視線を送ってくる。それはそうだろう、これではまるでレネスが若様に誘拐されたかのようなロジェは一体何を考えているのだから。

明日から町を歩くのが憂鬱になったレネスだった。絶対町の人に妙な目で見られるに決まっている。

とりあえず、現在進行で妙な目で見ている人が目の前にいるので、そちらをなんとかせねばとレネスは冷や汗をかきつつ口を開いた。

「いや、むしろされたというか……」

「何を？」

「えーと、過去に遡ると数え切れないほどの嫌がらせといえますか」「ふうん？ちなみにどんな嫌がらせだい？」

「ま、まあ、若様がよくやるのと近いものが」

「僕がやること？ははあん、虫だね」

「はい、それぞれ。それであたしとしては嫌で逃げてるわけです」

これで話は終わったとばかりにレネスは汗を布でぬぐった。寒いはずなのにこんなに汗をかくとは。とても嫌な汗ではあるが。

「で、後は何をされたんだい？」

「ぐっ」

やはり若様は簡単にはごまかされてくれない。

「だって、彼、やけに必至だったよ。そうだね、まるで僕がレネスを連れ去るかのような態度だったけど」

「それがよくわからないですよー。あたしに声をかけてくる理由は想像つくんですけど、なんであんなわけのわかんないこと言ってたんだろ？」

「だからそれを知るために、君が彼にされたことを聞きたいんだけどね」

「うーん、でもそれが関係あるとはあんまり……」

レネスは首をかしげた。求婚の返事を聞きに來ただけなら話はわかるけど、なんであんなに必死に止めようとしていたのか。

そうこうしているうちに馬車は店へと到着した。

「あれ？若様も降りるんですか？まだ店の開店にはちょっと早いですよ」

レネスに続いて馬車から降りようとする若様を振り返って言った。「うん、ちよつとマスターに話すことが出来たからね。あと、さっきの茶番劇のことも詳しく聞きたいしね」

にやりと人の悪い笑みを浮かべた若様に、レネスはまたしても顔を引きつらせた。やはり茶番劇に見えていたか。顔が引きつることばかりで顔面が痙攣しそうだと思つた。

一難去つてまた一難。やつとスカリナが帰ってくれて難が一つ減つたのに、次から次と何かが起こる。

（あたしの平穩はどこにあるのー）

レネスは心の中で叫ぶのだった。

開店前の静かな店の中、若様の話を聞く為にレネスとジンは店のテーブルへと並んで着いた。

先にテーブルに着いていた向い側の若様はいつになく真面目な顔をしている。

とはいえ、レネスとしては秋にはよく三人でこのテーブルを挟んで食事をとっていたことを思い、ほんの少し前のことなのになんがか懐かしいと暢気に思っていた。

席に着くと同時に持っていたトレイからお茶の入った器をそれぞれの前に並べた。

「それで、若様、話ってなんですか？」

目の前の茶器へと手をかけながらレネスは言った。つい先程暖炉に火を入れたばかりの店の中はまだ少しひんやりしている。手にしたお茶の温かさがじんわりと体にしみ込み心地いい。

レネス同様に茶器を手にした若様はゆっくりと茶を口にし、少し逡巡した後ジンの方を見て口を開いた。

「――すまないね、開店前の忙しい時間に」

その言葉にジンは頭を軽く振った。気にするなということなのだろう。その仕草に若様は頷くとレネスとジンを交互に見ながら切り出した。

「まずは、二人に謝らなければならないんだ」

「謝る？」

レネスは咄嗟に疑問を口にした。なんのことだろうと思ったのだ。若様に謝ってもらうようなことは――確かにレネス個人としては大量にあるけれども――とりあえずは思い当たらない。横のジンを見れば、何も言わずに口をへの字に曲げ腕を組んだ。

（もしかして、父さんは謝られる覚えがある？）

レネスの心の問いに気がついたのかジンはレネスの視線にそつと

目を伏せた。つまり確実に何かがあるということなのだろう。

そんな二人に若様は話を続けた。

「――秋にレネスを巻き込んでしまった事件があったらう？」

「ああ、ヘレンを愛するあの方の事件のことですか」

「そうそれ」

「その事件がどうかしたんですか？もう片付いたんですよね？」

「うん、まあ。とりあえずは表面的にはとも言ううのかな」

「表面的？ってことは内面的とか裏面的にはまだまだなんかあるんですか」

「そういうこと。それでその内面とか裏面と言うか――また新たなと言うか――ちょっとした騒動が起こっていてね」

「はあ……………」

騒動といわれてもレネスにはいま一つピンとこない。ヒキガエルがまた何かしたのだろうか。

「あの時、火事が起こってレネスに火を消してもらっただろう？」

「ああ、水蛇の歌ですね」

「うん、かなり大がかりな魔法だったよね」

「はあ……………まあ、大がかりといえばそうですね」

そこまで話をしてレネスは一つのことを思い出した。確かあの屋敷には希少価値が高いものが沢山あったはずだが、激しい水流で壊れてまさか弁償しろというのか？と考え一気に血の気が引く。もしそうだからと言って、どんなに商売を頑張ったところで一生かかっても無理だろうと座っているにも関わらず眩暈を感じた。

「ああ、別に何かを弁償してくれとかそういう話じゃないから安心しておくれ。仮に弁償が必要だったら僕がなんとかするから大丈夫だよ」

その言葉にほっとしつつも、相変わらずの勘の良さにまた別の眩暈がする。そんなに自分はただ漏れなのだろうか。

「じゃ、何が問題なんですか？」

「うーん、それでね、あの場に残っていた大公家の者たちが、どう

も魔女がいたと吹聴したようなのだよ」

「魔女ですか？——あれ？それってもしかして……あたし？」

レネスは自分自身を指差した。若様があっさり頷くのを確認すると、黙ったままのジンを見た。娘が魔女呼ばわりされてるなんて、父親としては面白くないだろう。案の定ジンの眉間にはこれでもかと云うほどの深い皺。まるで魔除けの置物のような表情だ。

「父さんったら、その顔怖いわよ」

手を伸ばして深い皺の刻まれた眉間を突けば、ほんの少しだけ表情を和らげた。それを見届けるとレネスはまた顔を正面の若様へと向けた。

「……で、その魔女がいたことが問題なんですか？」

「うん、それがただの魔女と言われている分には大した問題じゃないんだけどね。実は貴族の一部の人間たちがその魔女はセイレーンだと言い始めてね」

そこまで言って若様はため息をついた。

「え、魔女ってたいした問題じゃないんですか？」

レネスとしては魔女もセイレーンも同じくらい危険な存在ではないかと思っていた。まあ、自分で危険と言ってしまうのも少々面白くないが。

ついでに言えば魔女という存在自体があやふやな存在であり、あまり聞いたことすらない。

「あれ？レネス知らないのかい？魔女と呼ばれる存在は結構いるのだよ。といっても、君の様に水を自在に操れるわけでも、人を魅惑することができるわけでもないけどね」

「へえ……」

「それに、この間の騒ぎの魔女は二人いたことになっていてね」

「二人？あたしの他にも魔女がいたんですか？実は」

「いただろう？君よりずっと魔女らしいのが」

自分より魔女らしい魔女？魔女らしいというのはどんな魔女だろうか。レネスの想像では、魔女といったら箒にまたがって空を飛ん

だり、黒い衣装を着て怪しげな術を――

（ん？黒い衣装？怪しげな術？どこかで見たことあるような……）

「ああつ、ドリアン姫！」

黒ずくめの小さな姿がレネスの脳裏浮かんだ。

「ご名答」

若様は頷くと、開けたままのレネスの口に飴を放り込んだ。

（正解のご褒美ですか……）

なんだか調教される犬のようだと思いつつ、口の中で飴を転がした。スカリナから貰った不気味な飴と違い、これは普通の飴のようだ。さすが若様がくれただけあって、高級な果物の風味漂うその味は、芳香もさながら程よい酸味の効いた味でとても美味しい。

「なんで若様が飴なんて持っているんですか」

「ほら、最近空気が乾燥しているだろう？それで喉が痛くなってしまつてね。のど飴として持っていたのだよ」

なるほどと納得しながらレネスは味を堪能し、話を元に戻した。隣のジンは相変わらず怖い顔で腕を組んだまま石像のように動く気配はない。

「じゃ、ドリアン姫もセイレーンと思われているんですか？」

「うーん、どうだろうね。そこはよく判らないけど、なにせ姫様はすつぱりとフードを被っていたからね、顔は見られてないと思うんだよ。夜だからあの姿は闇に紛れるし。だからかな、君のことだけが知られてしまったようなのだよ」

「貴族ならともかく、一般市民のあたし知ってる人いるはずないじゃないですか。なのにあたしが狙われるっておかしくありません？」

「それがねえ、ユーベルとの連絡係りに使われていた少年がね、君のことを見たことがあつたらしくてね」

そういえば御者をしていたユーベルへ何度か食事を持っていた時、十歳ほどの少年と話をしている様子を見たことがあったと思いだした。あの時はまさかその子供が連絡係りなどとは思っていなかった。

「え、ヒキガエルったら、あんな小さい子まで使っていたんですか？」

「ああ、でも彼はただ手紙を渡す役を仰せつかっていた使用人の子供っただけでね、詳しい内容までは知らずにいたらしいよ」

「そうなんですか」

「まあ、そんな話はともかく。問題はその一部の貴族にセイレーンというか、君の存在を知られたことなのだよ」

レネスによって逸らされたままの話を若様が強引に戻した。

（そうだった、ドリアン姫にしる子供にしる、人のこと心配してる場合じゃなかった）

「その貴族たちはどう出た？」

それまでただ眉間に皺を寄せ黙ったままだったジンがついてに口を開いた。ジンの言葉を受け若様は表情を引き締めた。

「そう、それを謝りに来たんだ……セイレーンの存在を知った貴族の一人がレネスの抹殺に動き出したようだ」

レネスの抹殺。つまりは……セイレーンの存在を否定した。もしくは排除しようとしているということになるのだろうか。

「それって……まさか……」

そこでレネスは先刻の馬車から投げられたというナイフを思い出した。レネスの首めがけて投げられたナイフ――。

「うん、あの場で説明するわけにはいかなかったから言わなかったけど。多分そういうことだと思うよ。的確に急所を狙ってナイフを投げられる程の暗殺者を雇えるのは――残念ながらそれなりに金銭を持っている人間でないと無理だからね」

「どういうことだ？」

ジンがレネスと若様の会話から何かを察したのか、益々顔を強張らせ問いかけてきた。

その問いに若様は布につつまれた物をそつとジンに差し出した。もちろんその中にあるのは――。

「これがレネスに向かって投げられたんだ。首を狙って」

ジンは咄嗟にレネスの頭を掴んで縦横にと動かした。

「とととと、父さん、し、舌か、かむ……」

ガクガクと揺さぶられる頭にクラクラする。一通り確認を終えたのか、ジンはほっと息をついた。そのままぐりぐりとレネスの頭から顔をなでまわす。

「父さん、いたいー」

いつものことではあるが、今回は相当動揺させてしまったようだ。苦しいけれど心配させてしまった身としては我慢するしかない。しばらくはそのままジンのしたいようにさせてあげた。

実際のところ、若様がいなければ、今ここにこうして座っていることはできなかっただろう。難に巻き込まれやすいとはいえ、もしかして微妙に運がいい？とレネスは思った。

「それで、伯母上の所へ行く話はどうなったんだい？」

突然話が変わったことにレネスはついていけず「へ？」などと間抜けな声を漏らした。

「へ？じゃなくて、伯母上が君をどこかへ連れて行くとか言っていたのではなかったかい？」

「ああ、その話ですか。伯母さんならとつくに……というか今朝帰りましたよ。ついに諦めてくれたみたいで」

「帰ってしまったのかい？そう……こうなると伯母上の所に身を隠した方がもしかして良策だったかもしれないんだけど」

若様は思案するように手を顎に当てた。

「今からでも伯母上の元へ行くことはできないのかい？」

「え、伯母さんの所ですか？無理ですよ、だって伯母さんどこに住んでるか詳しく知りませんもん」

森の中には住所も何もないだろう。広い森を探して歩くのは気の遠くなる作業だし遭難しかねない。なんといっても今の時期は雪に覆われていて右も左もわからない。

「でも、名前がわかるんだから近くまで行けば確認できるだろう？」
(近く？近くといっても森の入口のこと？)

「うーん、そんなところから確認も何もできないですよ。全くわかりません」

この木からこの木までが何丁目とか何通りとかあるならともかく、生憎そんなものはない。熊通りや梟の下一丁目とか書き込まれた木を想像して笑いそうになった。

さすがの若様もレネスがそんなことを考えているとは想像の範囲外だったのだろう、珍しく今回は訝しげな顔をしている。

「マスターも知らないのかい？」

さっぱり話の進まないレネスに聞くことは諦めたのか、若様はジンへと話をふった。

「……………知ってるが知らん」

意味深だ。きつとレネスと一緒におおざっぱにしか場所を知らないに違いない。このあたりでジンとの血の繋がりの深さを痛感する。

「はあ……………となると、レネス、僕の屋敷にくるか？ここと違って警備もしっかりしているから安心だし」

「え、若様のところですか？」

きらきらしい貴族屋敷。カロツツ家はもとより、ヒキガエルのもすごかった。ちょっと触ったら壊したり汚したりしそうな調度品ばかりの屋敷を思い出し――。

「無理無理無理無理無理無理」

レネスは物凄い勢いで首を横に振った。あんなに煌びやかなところになんて、とてもじゃないがいられない。お茶を飲むだけでも尻ごみするのに、生活するなんて完璧無理だと思った。

そんなレネスの反応を大方予想していたのか、若様もあつさり引き下がってくれた。

「だよね、君ならそう言うと思っていたよ。となると……………彼に姿を現わして貰う他なさそうだね」

彼？誰のことを指しているのだろうとレネスは首を傾けた。

その彼というのは誰のことかを聞こうと口を開きかけた時だった

ドンドンと激しく店のドアを叩く音が響いた。三人はそろってドアを見た。

「まだ開店時間には早いのに、もうお客さんきたのかな」

「ああ、ザックさんでも来たのではないのかい」

二人の会話の横で、ジンはさっさと立ち上がるとドアへと向かっていった。

「えー、でもザックさん早く来てもあんなドアの叩き方しないし」
ジンは門かんぬきを外しにかかっている間もドアを叩きつける音はまだやまない。

門を外し終えたジンがドアを開いたと同時に、誰かが勢いをつけて店に飛び込んできた。

「げっロジェ！」

そう、飛び込んできたのは先程馬車を泣きながら追いかけてきた幼馴染のロジェである。

が、ロジェはレネスと若様に気づいた様子もなく、ジンへとすりついた。

「小父さん！レネスがレネスが……貴族に攫われた！」

レネスと若様は顔を見合わせた。

レネスは自分を一度指差し、次に若様を指差した。それに対して若様も何も言わず頷き、今度は自分の人差し指を口元に当てた。

つまりは、面白そうだから静観していようということなのだろう。若様は何でも面白がるんだからと呆れつつも、とりあえず頷くことにした。

（ばかロジェ……）

一生懸命ジンに何があつたのかを説明しているロジェへともう一

度視線を移しつつ、レネスはため息をついた。

「——だから、俺は必死で体を張って馬車を止めようと馬車の前に躍り出ただけど……」

ロジエは必死にジンへと言いつのつっている。さつきからレネスが黙って聞いていれば、やけに自分のことを格好良く言っていないか？馬車を止めようと躍り出たわけじゃなく、涙を出しながら馬車をただ追いかけてきただけなのに。ついでに言うなら馬車の前に躍り出たら馬車に轢かれて死んでるではないか。

レネスは店の入口へと視線を向けながら頬杖をついた。はつきり言って何言っただこいつ？くらいの気分だ。

「それで、それで、デラなんとか男爵だか伯爵だかが……」

「デランドール公爵」

ついに若様が口を挟んだ。相変わらず美味しい時を狙って登場する人だとレネスは思った。

「そうそう、デランドール公爵……」

相槌を打ちながら、ロジエは若様へと視線を転じた。

「あ、あ——あんたは！ああつ！レネスも！」

ロジエは森で熊にでも遭遇したかのように青ざめた。もしくは森でゾンビに会った時の様にだろうか。

口をパクパクさせながら若様とレネスを見ている。まるで餌をねだる魚のようだ。といってもレネスは餌をねだっている時の魚を見たことはないが。

「レネス！なんでここに！」

なんでここにと聞かれても、ここは自分の家で自分の職場だ。いない方がおかしいじゃないかと思いつながら、もう一つため息をつく。「それで、それで、なんでレネスを攫ったはずの悪の貴族がこんなところにいるんだ！」

悪の貴族という言葉に吹き出しそうになって、レネスは慌てて口を押さえた。

（本日も若様の冷たい視線は冴えわたっております……こわっ）

何も言わずにいるレネスと若様に業を煮やしたのか、ロジエは勢いよく二人のいるテーブルに近づいてきた。

そばに来たのを見計らって、レネスは口を開いた。

「あんた、なんなのよ、この間からおかしいわよ行動が」

「なっ！行動がおかしいってなんだよ！おかしいのはお前の方だろう！のこのご貴族の馬車になんか乗ったりして！慰み者にされに行く気か！」

「慰み者？なにそれ、なんか悲しんでる人がいる設定？」

「ぶっ」

若様が噴き出した。何かおかしいことを言っただろうか。

「どんな設定だよ！お前絶対意味わかってないな！」

「何よ、意味わかんないからって何だって言うのよ。なんにしろ、若様はここに送ってきてくれただけよ」

ちろりと若様を見れば、やっぱり笑っている。やはりまたトンチンカンなことを言ってしまったらしい。

（なんか笑うようなところあったっけ？ま、いいけど）

若様の笑いの発作はいつものこととレネスは気にしないことにした。

「——送ってくれただけ？」

レネスの言葉をロジエは呆けたように繰り返した。

「そうだよ、別に僕はレネスを慰み者に……ぶっ……ごほっ……するために馬車に乗せたわけじゃないよ。ちょうどここに用事があったからね、送ってきたただだよ」

（なんか今話の途中で笑ってたし……）

レネスは若様を睨みつけた。まだ発作が治まってなかったらしい。レネスの睨みに動じることなく若様はまた笑いを堪えてるようだ。

「そ、そうか。なら良かった。余計な騒ぎ起して悪かったな」

ロジエは拍子抜けしたようにそう言った。

「わかれば、いいのよ、わかれば。じゃそろそろ帰って頂戴。まも

なく開店だから邪魔よ邪魔！」

レネスも話は終わったとばかりにロジエを追い出しにかかった。またわけのわからないことを言われたら困るからとつと追い出すに限る。

が、そんなレネスの思惑通りに世の中は進んでくれるはずがなかった。

「なっ！そんなに邪魔にすることないだろ！」

「邪魔なものは邪魔よ、はいとつと出た出た」

レネスは立ち上がってロジエをドアへと追い立てる。

「ま、待てよレネスまだ話は——」

「あたしは終わったわ。じゃね」

ドアを開いた瞬間だった。

「お前！婚約者にはもう少し優しくしろよ！」

あっさりとロジエはこの場を凍らす爆弾発言をかましてくれた。

ヒクリと顔を引きつらせ部屋の中を見れば、若様は最初は驚いた顔をしていたのだが、次の瞬間、ニヤリとそれはそれは人の悪い笑みを浮かべた。

（ぎゃーあの顔はまた碌でもないこと思いついたに違いないしー）
だから若様には知られたくなかったのにと後悔してももう遅い。
それもこれもすべてこの目の前にいるロジエのせいだ。

「ばかロジエ誰が婚約者よ！勝手に決めないでよ！」

爆弾発言をかましたロジエに怒りをぶつけた。そもそも求婚に対して応えた記憶など一度もないのに何故婚約者などと言われなければならないのだ？

「どうせ断る理由なんかないだろ！それならもう決まったも同然じゃないか」

ロジエは腕を組んで偉そうにそう言った。

「断る理由なんかいっぱいあるわよ！なんにしるあんななんてお断りよ！」

「俺のどこに問題があるんだよ！」

「その空気読まないわけの分かんない性格よ！」

ぎゃあぎゃああと二人で騒いでいると、ジンが……突然ロジエの襟首を掴んで持ち上げた。

「と、父さん？」

レネスの問いかけにも何も言わず、そのままロジエをぽいつと外へ放り投げた。

「嫁になんぞやらん」

ぽつりとそれだけを言っただけでドアを閉めると、さっさと門までおろした。

「彼は、確か製粉屋のご子息だよな？」

若様の言葉にジンはしかめっ面でこくりと頷いた。

「なるほどね」

若様は一人で何かを納得している。若様がそんなに町の人間に詳しいと思っていなかったレネスは意外に思った。

「若様ロジエ知ってたんですか？」

「うん、よくうちに配達に来てるからね」

「へえ、若様のところもロジエの店のお得意さんだったんですね」

「うーん、それがね、頼んだ記憶のない物が時々大量に納入されると家の者がこぼしてただけで、今のことで納得したよ」

「は？なんで今のことが関係するんですか？」

一人で納得してにやにやと笑っている若様を見ながらレネスは首をかしげた。

「となれば尚更彼には傍にいてもらった方が良さそうだ。じゃ、レネス頑張っただけを説得するんだよ。マスター開店前だけお腹が空いてしまったよ、いつものお願いしてもいいかい？」

ジンはしかめっ面のまま頷き厨房へと入っていった。

「若様、説得って——」

「あ、レネス先にエール酒貰おうかな。もちろんいつものように君の分もね」

「んもう！わかりましたよ！」

早く飲ませて早く口を割らせようとレネスもジンを追って厨房へと向かった。

深夜、レネスは一人息を潜めてベッドに潜り込んでいた。

明かりも消した部屋の中、暖炉に残った小さな火だけがぼんやりと中を照らしている。

そんな中レネスは毛布の中から目元だけを出し、部屋の中を窺っていた。

きよろきよろと部屋の隅から隅へ視線を彷徨わせ、耳を澄ませ小さな物音でも聞き逃さないようにする。

レネスがこんなことをしているのは理由があった。もちろん理由もなしにこんなことをしていたら、ただの変な人だから理由があるのは当然だが。

しばらくの間そうして五感を研ぎ澄ましていたが、だんだんと睡眠魔が忍び寄ってきていた。

本当は眠くて眠くて仕方がない時間、暖かい毛布に包まるこの至福の時間、はつきりいつて今にも瞼は閉じそうで――。

(一体――いつまでこうしてれば……)

頑張って自分の手の甲やら顔を抓りに抓って頑張ってはいるものの、時間がたつにつれ麻痺したかのように痛みが薄れていく。

ぬくぬくと暖かい毛布はそれはそれは眠気を誘う巣穴のようで……

…思考することも拒みなくなる程の優しい空間だった。

(も……ダメ……寝よう……)

明日のことは明日考えればいい。何があっても、どんなことが起こってもその時考えればいい。今はただ安らかに眠らせて欲しい……と、意識を手放そうとしたその時だった。

カタリと何かの物音が部屋の中で聞こえた――レネスはその音に気づいた瞬間眠気を吹き飛ばした。待ちに待った時がやってきた

のだ。ここで眠ってしまうわけにはいかない。くわっと目を見開いて部屋の様子を見れば、大きな黒い影を発見した。

（いた！）

いつの間にこんなに近くにきていたのか、うとうととして全く気付いていなかった。黒い影は机のあたりで何やらごそごそやっている。

レネスは飛び起き、その影に声をかけた。

「何してるんですか？」

黒い影はビクリと体を揺らした。

黒い影がゆつくりと振り向き、ベッドの上で起き上がっているレネスを確認した。

「なんで起きている？明日も早いんだからとつと寝ろ」

影がもぞりと動いた。どうやら影の形から想像するに腕を組んだらしい。随分偉そうな態度だ。

そもそもなんでこの人はこんなに淡々としているのだろう。普通なら忍び込んだ先で家の人間に会ったらもつと慌てふためくものじゃないのかとレネスは思った。

「いや、ふつー人が忍び込んでるの気づいて寝れる人はいないかと」
とりあえずレネスはそう反論してみたのだが。

「普通の人間ならばだろう。お前は普通じゃないから大丈夫だ。安心してとつと寝ろ」

取りつく島もないというのはこういうことを言うんだっだろうか。それにしても何気に失礼なことを言われていないか？普通じゃないなどと言われたら人間失格の烙印でも押されたような気がするじゃないかとレネスは不満に思った。

「あのー、あたし普通じゃないんですか？」

ほんの少し棘を滲ませた口調でそう問いかけた。同時に寒さで体がぶるりと震え、最後の方は妙な音調になってしまった。

「普通の人間なら、忍び込んだ人間を発見したら悲鳴を上げる。ほらみる、いつまでもそんな恰好で起き上がっていると風邪をひく。早く寝てしまえ」

暗がりの中でもこの人が腕を組んだまま顎をしゃくった様子がわかる。

（いや、どう考えてもこの構図はおかしいでしょ）

とは思ったものの、実際のところ寒くて仕方がないので、素直にレネスは男の声に従い毛布に包まることにした。若様あたりがこの

場にいたら「危機感がまるでないね」とでも言われそうだが、寒いものは寒い。これで風邪なんて引いた日には「そうなることがわかって準備も何もしてなかったのかい？」と呆れた顔で言う姿も想像できる自分が嫌だ。

（すっかり冷えちゃった）

ブルブルと震える体を毛布の中で縮める。脚だけでも暖かいのが救いだ。

「よし。じゃ後はしつかり寝るんだ。俺のことは気にするな」

そう言うなり男はまたレネスに背を向け作業を再開した。

「あのー、さつきから一体何してるんですか？」

「明日になればわかる。今は気にするな」

「ああ、そうですか」

何故かそれ以上質問する気になれず、レネスは黙って横になったままその様子を見ていた。少しずつ体が暖まってきた。

それから少しして、作業が終わったのか、黒い影がレネスに近づいた。

「なんだ、まだ起きていたのか」

「だって、やっぱり気になるし」

「いいから寝ろ。ここに置いておくから明日読むんだぞ」

（ああ、やっぱり、最近のあの妙な手紙の主はこの人か）

「わかりました。それより、もう帰るんですか？」

「ああ、今日の仕事は終わった」

（まさか、この手紙書いておくのが仕事ってわけじゃないわよね）
どんな仕事だそれとは一人で可笑しくなりながら、レネスは頑張っ
て起きていた大事な用事を告げることにした。このまま帰られても困るのだ。

「帰る前に……実は一つお願いあるんですけど……」

翌日、店はいつものごとく開店の時間を迎えた。

いつもならばレネスがかかる「営業中」の看板を、今日はジンが持ってドアへと向かった。さすがに昨日のことでジンも警戒しているらしい。

その様子を見送り、レネスはテーブルの準備をする。時期的に植物を飾ることは出来ないので、せめて清潔感を出そうと真っ白いテーブルクロスなどを敷いてみる。

「やあ、こんにちは」

ジンがドアを開けたと同時に若様がひょっこりと姿を現した。正確には入口を大きな体で塞いでいるジンの陰からひょっこりとだが。「あれ？若様昨日も来たのに今日も来たんですか」

「おや、僕が二日続けて来るのってそんなに珍しいことだったかい？」

ジンを避けた若様はスタスタといつも座るテーブル席へと向かう。看板を掛けたジンも店の中へと戻り、そのまま厨房へ向かった。料理の準備をするのだろう。

「いえ、なんか昨日はやけに慌てて帰っていったから、しばらくは忙しくて来ないのかと思ってましたよ」

いつもの若様なら時間をかけてゆっくりと食事をとり、しばらくレネスをからかって遊んでから帰るのだが、昨日は珍しく急ぐように食事を摂るとすぐに帰ってしまったのだ。

忙しいのに無理して送ってきてくれたようで悪いことをしたなと思っただが。

「うん、昨日はちょっとね。それで、上手く行ったかい？」

席の横にある突起に外套を掛けると優雅に椅子に腰をおろした。相変わらずただそれだけの行動も絵になるのがムカつくとレネスは思った。

「ばっちりですよ。これで用心棒は確保ですから安心してくださいね」

「ふうん。で、彼は今どこに？」

「ああ、今は厨房にいましたよ。呼びます？」

「そうだね、折角だからそうして貰おうかな。それにしてもよく彼を捕まえられたね。僕ですらなかなか捕まえられないというのに」

「それが案外簡単にいきましたよ。おーい、用心棒さーんーこっちきてくださーい」

レネスは厨房に向けて声を張り上げた。

「はい、こちらが昨日からあたしの用心棒になってくれたユーベルさん改めワイトさんです」

レネスの隣に立つ男性。つまりは昨日の夜忍び込んできた男性。それは秋にヒギガエルの事件でかわったユーベルであった。

本人のたつての希望で昨夜から「ワイト」と呼び方を変えた。きつと「ユーベル」は偽名だったのだろうとレネスはすぐに納得したのだが――どうも若様の様子がおかしい。

「ワイト……君ワイトって名乗ることにしたのかい？」

レネスの紹介を聞いた若様は何故か妙な顔をした。妙な顔というより笑いをこらえてる顔と言った方がいいだろうか。

「ああ。俺こそがワイトの名前を貰うにふさわしい」

ユーベルもといワイトはいつものごとく淡々としている。

「え、名前を貰うのがふさわしいって？それ本名じゃないんですか？」

やたらと昨夜「今後は俺をワイトと呼べ」と念を押していたからレネスとしてはそれが本名なのだろうと思っていたのだが。

「レネス、君その名前に聞き覚えはないのかい？」

なんだか若様の声が震えている。この様子は確実にになにかが笑いのツボになっているなとレネスは判断した。

（今日は何にひっかかっているんだろ、この人……）

「はあ……なんかその言葉昨日ワイトさんにも言われましたけど、さっぱり」

確かにどこかで聞いたことはあるような気がしないでもないのだ

が、客の名前を思い出しても思い出しても当てはまるひとはいなかった。

「まあ、いいじゃないですか。本人がその名前で呼べっていうならそれで。それぞれきつと理由があるんですよ」

諭すように若様そう言ってみると、若様は堪え切れないというように噴出した。更には口元を押さえて咳きこんでいる。

（まだ何も口に入れてないのに咽てるし……）

「あたしなんかまた変なこと言いました？」

レネスは隣に立つワイトを仰ぎ見て聞いてみた。いつも若様は一人でツボに入って笑いだすから何だかわからないのだ。

「いや、別におかしいことは言っていないと思うぞ」

「ですよええ。でもワイトさん、結局本名はどっちなんですか？」

「どっちもだ。自分が名乗りたいと思った瞬間からそれも本名になるのだ」

「へえ、じゃ私もしキャサリンって名前にしたいと言ったら」

「ああ、それがお前の本名になる」

「そんなもんですか」

「ぶはっ！ あっはははははははは、き、君達、僕をあんまり笑わせないでおくれ。キャ、キャサリン、くっくくくっくっお腹が痛く……」

あっははははははは！

客が店の半分を埋めても若様はずっと腹を抱えて笑い続けていた。そんな明らかに可笑しい人間がいるにも関わらず、店の客は「まーた若様なんかツボってる？」「またはまったか」などと言いながら各々席に着いていく。

（まさか若様の大笑いこの店の名物になってないわよね）

「レネちゃん、こっちに日替わり二つ」

「はい」

どんなに若様が笑っていようと、レネスにはレネスの仕事がある。いつまでも構っていられないと笑い続ける若様を放置して仕事

に専念することにした。

ユーベル改めワイトはというと、あれでいて案外真面目なのか律儀者なのか、痙攣しながら笑っている若様を放っておけず、心配げに向かい側の席に座って様子を見ている。

（そんなに心配しなくても笑うだけ笑えば収まるのに……ユ……じゃなくてワイトさん、すっかり従僕根性しみついちゃった？）

「はあ、はあ、笑いすぎた。なんか体力を消耗してしまった気がするよ」

丁度隣の席に料理を運んでいたレネスは呆れながら水を差出した。これだけ笑ったなら喉も渇くだろう。

「ああ、ありがとう。気がきくね。どうせならエール酒だともっと嬉しいんだけど」

「はいはい、今持ってきますよ。ユ……ワイトさんもどうせなら一緒に飲んだら？ ついでに食事も今持ってくるから」

「いや、俺はお前を守らねばならないから酒はいい。食事だけもらえるか」

「そう？ ここにいる限りはそんなに危険はないと思うんだけど……父さんもいるし」

「レネス、ユーベルの言うとおりにするといいよ」

「ワイトだ」

「はいはい」

そんな二人の指示にとりあえず従うことにして、レネスは厨房へと踵を返した。

すでに昨日の襲撃など遠い話に思え、レネスに緊迫感など全くなかった。いつもの通り空いている皿や杯を下げ、お客さんと一言二言話をしながら厨房を目指す。

（あ、若様にエール酒まだかってそろそろ騒がれるわね。急がなきゃ）

ほんの少し足を早め厨房へ辿りつこうという時だった。

ガシャアアアアアアアン

突然厨房の中で激しい音が響き渡ったと同時に店に煙が流れ込んできた。

「な、なにこの煙。ごほっ！と、父さんどうしたの？ 焔炉に何か落と——」

煙をかき分けながら厨房へと足を踏み入れようとしたのだが——
「だめだよ、レネス君はここに」

いつの間にか近くに来た若様に抱きこまれ行く手を阻まれた。

「ユーベル」

「ああ」

平和そのものだった店に、今正に何か起きたようだった——
|。

煙の充満する厨房へと、躊躇なく入っていくユーベル——ではなくワイトの背中をレネスは見つめた。厨房の中からは激しい音が聞こえてきている。本当のところはいても立っても居られないのだが、若様に動きを封じられた今、ただその背中を見つめることだけしか出来なかった。

「わ、若様、何があっただと思います？」

「さあ？でもあまり良いことではないことは確かだね」

良いことでないというなら、悪いことなのだろう。悪いことだというならば尚更ジンの事が気になる。

「父さん……大丈夫でしょうか……」

いくら野生動物に強いとはいえ、ジンは所詮一般市民だ。殺しの達人にかなうほどの腕など持っているはずもない。

「わからない。ともかくユーベルが来るのを待とう」

実際今のレネスには待つ以外の何もできない。それがまた悔しくいつそ「激甚の歌」でも放つてやればいいかと足を踏み出しかけたのだが――。

「こらこら、危険だから行つては駄目だよ。君の力はわかつてはいけるけど、そんなのを使って店のお客さんまで倒れさせたら騒ぎは今の比じゃなくなるこは請け合いだよ」

請け合いまで言われては我慢するしかない。だからといって……このままここに大人しくいられる程暢気な神経は持ち合わせていない。

「でもっ！あたしが行けば一気に収まるのに！」

「うーん、そうかな？下手に倒れる人続出じゃ食中毒の疑いかけられて営業停止になってしまうよ」

「うっ……それは、困ります」

「うん、だったら少しの間我慢しておくれ」

そう言われたら我慢をしないわけにはいかない。どんなに激しい物音が聞こえてもだ。こんなに激しい物音が聞こえるのに、こちらに飛び出してくる人間がいないのが不思議と言えば不思議ではあるが。

「ユーベルさん大丈夫なんですか？」

若様そつくりの優男系のユーベルが喧噪の中に入って無事にいられるのだろうか。あつという間に倒されていたら笑うに笑えない。

「ああ、器用貧乏な彼なら問題ないよ」

「それって——」

関係ないのじゃないだろうかと言いかけた途中で店内の客たちも騒ぎはじめた。

「お、おいレネちゃん何があつたんだ？」

「そつちから煙が出てるが火事なのか？」

「オヤジさんはどうした？無事なのか？」

次々と質問を浴びせてくる客に対して答える言葉が思いつかずレネは唇を噛んだ。自分も不安なのに安心させられる言葉など言えるはずがなかった。

そんなレネを見かねて落ち着いた対応をしたのは若様だった。

レネを押さえていた腕を外すと客席へと向き直った。

「大丈夫だよ。マスターが誤って火の中に何かを落としてしまったそうだよ。煙いから僕達にもしばらく入るなと言ってるから気にせず食事を続けていていいと思うよ」

いつもの余裕綽々な優雅な物腰でそう言われて、それに対して異を唱える人間などなかないない。

それぞれが納得してくれたようで店の中はいつもの賑やかさを取り戻した。

「若様ありがとうございます」

「どういたしまして。どうも先日からのやりとりばかりしてるよ
うな気がするよ」

「ふふ、そうかも」

若様の冗談にレネスもほんの少しだけ緊張を解くことが出来た。

「ユーベルさん来ないですね」

中からは相変わらずガシャン、ドカンと数人が暴れる激しい物音が聞こえてきている。

「あたしを……殺そうとしてる人が来たんですかね……」

「その可能性は高いと思うよ」

「——どうしよう、父さんに何かあったら」

「大丈夫だよ、マスターはそう簡単に殺られる人じゃないだろう？
なんといつても猪だって素手で倒すのだよ。脆弱な人間などに負けるはずがないだろう？」

「はい。ですね」

中に入ることも出来ないままレネスは両手を握りしめる。

厨房の中の物音は激しさを増しているようだ。時々悲鳴の様な声も交る。

そんな中誰かが「コケーーーーー！」とひと際大きな悲鳴を上げた。

「ん？」

レネスは人の悲鳴にしてはおかしな声に首を傾けた。「コケー——」
「などど人が声を上げるだろうか。」

「なんかこの声聞いたことあるような……」

ポンと両肩に手がかけられた。若様の手だ。

「レネス、今日の料理は生きたニワトリを使う予定だったかい？」

「生きたニワトリ料理ってなんですか。血抜きもしないニワトリなんて臭くて食べられないですよ」

「へえ……でも生きたニワトリがいるようだよね」

「まさか……この騒ぎって……」

レネスは恐る恐る足を前に進め厨房へと足を踏み入れた。もはや若様もレネスを止めたりしない。

中に入ったレネスは想像とは全く違ったその光景にあぐりと口を開けた。

そこにいたのは、ニワトリの首を掴んで立っているジンと、ニワトリに縄をかけようとしているユーベルではなくワイトと、カゴを持って尻もちをついている――ロジェだった。

「うーん、なかなか面白いことになってるね。想像の範囲を超えて」後ろから来た若様の暢気な声にはっとして口を閉じた。口を開けたままにしていたらまた何か余計なひと言を言われかねない。

ジンとユ・ワイトは驚いているレネスと若様に構うことなく、黙々とニワトリの足に縄を巻いている。ロジェは相変わらずカゴを持って座り込んだままだ。三人が三人とも頭はボサボサ、顔は煤にまみれ、至る所に擦り傷のようなものも見える。

厨房の中も凄い有様になっていた。

色々な調理器具は床に転がり、食材も同じく床に転がっている。何かが落ちた焔炉からは、それが燃えた時に出た黒い煙と煤が舞いあがっている。更に暴れたニワトリの羽もそこかしこにふわふわと浮いていて、とてもじゃないが営業を続けられる状態ではなかった。「なんでロジェがここに？」

商売を邪魔された怒りでヒクヒクと痙攣する頬を押さえながらレネスはロジェへと顔を向けた。

「まさかと思うけど、このニワトリ持ってきたのはロジェ？」

開店当初ニワトリなどいなかったのに今ここにはいて、更にいるはずもないロジェまでいるとなればそれ以外考えられない。

「う、うん」

カゴを持って座ったまま、お縄にされるニワトリを見ていたロジェだった。近づいてくるレネスの顔を見た途端に怯えたように後退りを始めた。それを追いかけるようにレネスは一步一步ロジェへ近づく。

「レ、レネス顔怖いぞ」

「そう」

もう引きつる顔を抑える気はない。自分ではわからないがロジェの顔を見る限りでは凄い顔なんだろう。

「わ、悪かったよ。まさかこんなことになるとは」

「どんなことになる予定だったの？」

「いや、その」

ぐわしつという音が聞こえそうなほどの勢いでレネスは座っているロジエの胸倉を掴んだ。

「も・ち・ろ・ん、片付けてくれるわよね」

ぐつと顔を近づけにこやかにレネスが問いかければ、ロジエは真つ青な顔でコクコクと頷いた。

結局、このままでは商売にならないとあつて、急遽店を閉めた白砂亭の面々（もちろんワイトも含む）は総出で厨房の後かたづけを始めた。

本当はロジエに全部やらせてしまいたいが、それを待っていたらいつになつても商売が出来そうにないと気がついた。普段掃除など殆どやったことのないロジエの役に立たなさといったら、坊ちゃん育ちの若様より酷い。

「君ね、一応手伝つて貰つて坊ちゃん育ちとか言うのはやめてもらえるかい」

ぶつぶつと文句を言いながら作業を続けるレネスの言葉を聞きつけた若様が箒の柄でトントンと床を叩いた。手伝うために豪華な厚い上着を脱ぎ捨てた若様は、シャツの袖をまくりあげ作業をしているので一見すると貴族には見えない。

「あ、聞こえました？すみません。一応ロジエより使えると褒めたつもりだったんですけど。さすが居候生活しただけあつて掃除もお上手ですよ」

「なんだかそれはそれで嬉しくない言葉だね」

「ああ、すみませんね、言葉を知らないもので」

「まったく、国王の甥である公爵のこの僕に掃除を手伝わせるなんて君ぐらいだよ」

「だって若様暇だって言つてたじゃないですか。暇なら気の毒な市民を助けるくらいしても罰当たりませんよ。ああっ！ロジエ床を拭いた雑巾で調理台拭くのやめてよ！」

「ご、ごめん」

「そこ終わつたなら塵まとめておいて」

「う、うん」

「やれやれ、終わつたらエール酒くらい御馳走してくれるんだろうね」

「はいはい、御馳走しますよ。あ、いつそ葡萄酒でも飲みましょうよ。ロジエの奢りで」

「え、俺の奢りって、なんで俺より金持つてる貴族に御馳走しなきゃなんな——」

「あんたに発言権はないわ。とつと仕事しなさい」

「う、はい」

「うーん、レネスを怒らせると後が怖いようだね。僕も気をつけることにしよう」

「そうしてください。はいはい、若様も手が止まっていますよ。早くやらないと夜になっちゃいますよ」

ギロリと睨みながら箒を指差してやると、若様は肩をすくめた。

「はいはい、わかったよ」

三人のやりとりを尻目にジンとワイトは黙々と作業を続けている。余計なことは一切言わず作業をするワイトはなんだかジンに似ていると思うレネスだった。

厨房の片づけが終わったのは、とつぷりと日が暮れた頃だった。日が暮れるのが早いこの時期、あたりはすっかり暗闇に覆われていた。

「はあ、やれやれ、やっと終わったね」

店の椅子に全員がどっかりと腰を下ろした。結局最後まで若様をこき使ってしまった。

「すみません、結局夜までかかっちゃいましたね。仕事の方大丈夫ですか？若様」

「ああ、今日は特に何もないから大丈夫だよ。いや、あると嘘をついて逃げた方が正解だったかな？」

今更の発言にレネスは軽く笑った。なんのかの言っても助けてくれる若様には感謝したところでし足りない。

「つ、疲れた。レネス人遣い荒すぎる」

本日の騒ぎの諸悪の根源であるロジエは座ると同時にテーブルに伸びていた。それはそうだろう、レネスがこれでもかというほどこき使ったのだから。

「む？人遣いが荒いとは、お前は悪なのか？」

ロジエの言葉にワイトが真剣な顔でレネスを見つめた。人遣いが荒い人が悪ならば、この商業区の商人たちは全員が悪になってしまっではないか。

「誰が悪ですか、悪いのはロジエなんだから当たり前です」

「む、ではこやつが悪か。ならば成敗せねば」

「もうあたしが成敗したからいいですよ。それよりワイトさんもお疲れ様でした。他の二人と違って文句も言わずに働いてくれて本当に助かりました」

「助かったのか」

「はい、とっても。ワイトさんがいてくれてよかったです」

感謝を示すかの様にレネスはにっこりと笑った。

「そうか」

レネスに合わせてワイトもにっこりと笑う。若様の胡散臭い笑みと違って、裏表のないワイトの笑みは爽やかだ。作りは同じでも育った土壌が違うからだろうか。

「レネス、また僕に対して失礼なこと考えてるね」

「いえいえ、そんなことは」

それまで伸びていたロジエが突然起き上がった。

「おい、レネスさつきからいるその男は誰なんだ？」

ロジエが指さす男とは、ワイトだった。そういえばロジエとワイトは初対面だったかもしれないと今更ながらレネスは思った。

「ああ、この人はワイトさん。今日から家に住み込みで働いてもらうの」

ワイトを見て「ねっ」と言うと、ワイトは黙って頷いた。

「なんだと！年頃の男と女が同じ屋根の下に！そんなのダメだダメだ！」

住み込みの言葉に反応したロジエが騒ぎはじめた。ダメも何ももう決めたことだし、命が惜しいからは是非ともいてもらわねば困る。

「ダメって、ロジエには関係ないじゃないのよ。それにこの前だって若様も居候してたから特に問題ないわよ」

「なんだとーーーーー！」

レネスの言葉に驚いたロジエはいきなり立ち上がると若様へと掴みかかった。

「人の婚約者に手を出すとはどういうことだ！いくら貴族様とはいえやっていいことと悪いことが！」

「レネスやっぱり婚約者だって言ってるよ」

掴みかかられている若様といえば、暢気にレネスの方へ顔を向けそんなことを言っている。

「ああ、もう婚約した覚えはありませんってば。ロジエやめなさい！言うこと聞かないと子供の頃の恥ずかしい話ここで若様に教えち

「やうわよ！」

「うっ！」

慌ててロジエは手を離れた。いささか顔色が悪いようだが、それもそうだろう。ロジエの恥ずかしい話はこれでもかと言つほど記憶しているだけに、つついて黙らせるにはうってつけた。

「ねえ、そんなに怯える相手と本気で結婚したいの君？」

「わ、悪いか」

「いや、なかなかモノ好きだなあと思つて」

「若様？何か言いました？」

「いやいや。しかし動いたからお腹が空いたね。あ、あと喉も渴いたよ。何か持つてきておくれ」

確かに昼からずつと働き通しでお腹が空いた。おあつらえ向きに掃除したばかり厨房からは何やらいい匂いが。どうやらジンが何かを作つてくれていたようだ。

「父さんが何か作つてくれてるみたいです。今持つてきますね」

レネスが動くと同時にワイトもついてくる。しっかりと用心棒の役割を果たしてくれそうだ。

「つまり、結婚の挨拶にニワトリを持参してきたというわけかい？」

すでに食事を終え、お腹を満たした五人は今回の一件をロジエに確認していた。何がどうなつてニワトリがああなつたのか。途中から見たレネスと若様にはさっぱりわかつていないからだ。

「そうだ。昨日小父さん怒つて俺のこと追いだしたろう？そこで気付いたんだ、そういえば肝心の小父さんへの報告がまだだったつて。俺としたことがちゃんと筋を通すのを忘れていたんだ」

「筋を通す前に、あたしの方はどうなるのよ」

ニワトリを持ってきたいきさつを聞いたレネスはぐったりと椅子の背にもたれかかった。なんで筋を通す挨拶に持つてくる物がニワトリなんだろう。だったら黙つて酒の一本でも……いやいや酒を持

つてこられても結婚する意志などないが。

「うちの親父に聞いたら、『嫌よ嫌よも好きのうち』と言ってたから問題ない。安心して嫁にこい」

「あんたもあんたなら、小父さんも小父さんだわね……」

無口なジンとは違い、いつも陽気で女好きのあの小父さんなら言いかねないだろう。ロジエの父親の顔を思い出してレネスはゲンナリした。目の前にいなくても「うわっはっはっはっ」と笑う日に焼けた顔が思い浮かぶ。ロジエの家では契約している農家から麦などを購入して製粉し販売している。そんな業種で特に日に焼ける要素などなさそうなのだが、小父さんはしょっちゅう契約した農家へ様子を見に行つては農家の奥様達の手伝いをしているので、いつでも日に焼けている。熱い男というよりは、いわゆる暑苦しい男だ。ロジエは母親に似ているのでそういった暑苦しさはないが、この求婚のうっとおしさを考えると、いつあなるか分らず末恐ろしい。

「つまり、こいつの親父が悪なのか？成敗しておくか？」

またしてもワイトはトンチンカンなことを言っている。心の底ではいつそ成敗して欲しいところだが、さすがにそうもいかないだろう。口を開くと余計なことを言つてしまいそうなので、首を左右に振るだけに留めた。

「あのバカの言うことは聞くな」

同じようにロジエの父親を思い浮かべたのか、ジンは顔を顰めてロジエを戒めた。人さまの家の大黒柱を「あのバカ」と言えるのは、ジンくらいだろう。なんののかんの言つてジンとロジエの父も幼馴染だからなのだが。

「で、その持ってきたニワトリがなんであんなことに？」

「それが……俺が入ってきたら、突然何かが俺の横を通り過ぎて行つてさ。びっくりしてカゴ落としたらニワトリのやつが逃げて……」

「何かつて何よ」

「わかんねーよ。なんかヒュッて勢いで顔の顔の横通り過ぎてったから、なんだったかまで見てないし。あ、何かの虫だったのかも。」

ゴキブリとか」

「はー！なんですって！ゴキブリ？いやあああ、そんな恐ろしいところあたし掃除してたの？」

レネスは恐ろしさに体を震わせた。そんな危険な物がいるとは思わず掃除していたのだ。遭遇しなくて本当に良かったと自分の運の良さを感謝した。

「た、確かにあいつならしぶといから冬でもいるかもしれないわ」

「だろー。冬だからって安心しちゃダメだってことだ」

「あんたが来なかったら入ってこないわよ！」

「俺のせいじゃないっての！」

「だいたい、父さんへの報告ってなによ！婚約もしてないのに報告も何もいらないわよ！」

「俺は筋を通す男なんだよ！」

「ちよつと待っておくれ」

またしても始まったロジエとの言い合いを止めたのは、昨日とは違い若様だった。見れば若様はやけに難しい顔をしている。

「どうしたんですか、若様」

若様はレネスの質問には答えず、ロジエへと顔を向けた。

「ロジエ君、顔の横を何かが通り過ぎていったと言ったよね」

「ああ、だからゴキブリじゃねーの」

「あんた、後でちゃんとそのゴキブリ探して駆除していつてよね」

一匹許せばあつという間に増えるという。そんなのはゴメンだ。飲食店としても不潔きわまりない店と思われるも困る。

「なんで俺が……」

ロジエはぐつたりとテーブルに突っ伏した。

「うーん、普通のゴキブリはそんな速度で飛ぶものかい？蜂などならともかく」

「ああ、そういえば前に捕まえたやつらは速いには早いけど、今日の程の速さはなかったかな。今日のは目に見えないほどの速度で……」

……」

重ねて若様からロジエに質問がなされた。うつ伏していたロジエも起き上がった。素直にそれについて考えるそぶりを見せた。

「ひいーやだー飛んでるゴキブリを想像させないでー」

「ちよつと厨房を見てくるよ」

騒いでるレネスに構うことなく、若様は厨房へと一人向かった。

ゴキブリが珍しいのだろうか。そういえば高貴な身分の人はゴキブリなどに遭遇する機会などあるはずがないかと、レネスは一人納得した。

しばらくすると若様が何かを持って戻ってきた。

「これを見てごらん？」

「ひいー嫌ですよ、そんなの外に投げ捨ててくださいよー」

手の中にいる黒い生き物を想像してレネスは半泣きで若様から後ずさった。

「落ち着いて、ゴキブリではないよ。虫ですらないのだからね」

そうして広げられた若様の掌の上にあるのは――

「なにかの金属の玉？」

「正確には鉛の玉。ロジエ君、その時、背後から何かが破裂するよ
うな音は聞こえなかったかい？」

「は？いや、どうだっただろ」

ロジエはその時のことを思い出すように首をひねった。「聞いた
ような、聞かないような、でも聞いたような」何度も首を左右に動
かしながらぶつぶつと言っている。

「で、なんなんですか、その鉛の玉って？」

「うん？レネスも知ってるだろう？銃の弾だよ」

「まさか……………」

レネスは目の前の現実には手をこまねいていた。

突然来襲した人間に手を出したくとも出ることが出来ないからだ。
「まさか！まさか、あんたに夫を奪われるなんて思っていなかったわ！」

泣き叫びつつ店内を暴れまわるお腹の大きな女性に対し、どうすることも出来ず途方にくれる。

なんだってこんなことになったのだろうか？と考えてはみてもさっぱり思いつかない。

来襲した女性はわめきつつ、テーブルにあった乾燥花をがしりと掴むとレネスへと投げつけてきた。

腕で防いだはみたものの、防ぎきれなかったのか顔や頭のところどころがチクチクする。

「ミ、ミレイ落ちていてよ！」

そう、泣き叫びながら暴れているのは、レネスの幼馴染であり、酒屋の娘のミレイだ。

ミレイは大きなお腹を抱えて突然店にやってくると、いきなりレネスへと攻撃を始めたのだ。

もちろん店は開店中で、ポツポツいた客はその様子に驚き店の隅へと避難している。助ける人の一人もいてもよさそうなものだが、なにせ相手は今にも破裂しそうな大きなお腹を抱えた妊婦、手を出すにも出せずにいるのが現状だ。

「落ち着いてなんかいられないわよ！イイ男ばかり侍らせてるくせに、なんであたしの旦那まで手を出すのよ！あんたよりあたしの方がずっとずっと女らしいのに！なんでなんで………あんたなんか、早くロジエとでもくつついちゃいなさいよ！目ざわりなのよ！」

いつもならば、のんびり間延びした喋り方をするミレイが、今日はその形を潜め、レネスを激しくののしっている。それほど怒り狂

っているということなのだろうか。

「いや、目ざわりって……ロジェとくつつけて……あんまりですよ」

あんまりな言葉に怒るというより、なんだか悲しくなる。ミレイが自分をそんなふうに使っていたとは。

それにしても身に覚えのないことをこんなに大声でわめかれたりなんかしたら――

「おいおい、レネちゃんよ、人様の旦那に手を出しちゃいかんだろ」「うんうん。やっぱりその辺りはうまくやらないとよ」

隅に避難した客からの言葉にこめかみの血流がピクリ増した。

（だからそんなことしてないっての）

人の不幸は蜜の味というが、レネスのこの意味不明の醜聞は、かなり客たちの興味を惹いたようだ。避難しながらも楽しげにレネスとミレイに掛け声をかけている。

このままでは明日にはレネスは「親友の旦那をとった女」として商業区で陰口を叩かれること間違いない。ミレイの本音に悲しい気持ちになってはいるものの、とつとこの騒ぎを収めるしかなさそうだ。

「父さん！」

頷きつつジンは暴れるミレイの背後へと移動を始めた。

「ワイトさん」

同じくワイトも軽く頷き障害物を避け始めた。

何やらこの数日ですっかり「あ・うん」の呼吸が取れていた。多くを語らずとも、ジンと同様にワイトもレネスの意向を汲んで動いてくれる。

二ワトリ騒ぎからすでに数日が経過していた。その間にすっかりワイトもこの店に馴染んでいた。

だが、あの時の銃弾については、はっきりいって謎なままだった。結局、若様ですら明確な説明が出来なかったのだ。ということは、単なる偶然か何かだろうとレネス本人は思うことにした。

たまたま猟銃の手入れをしていた人の銃が誤って発砲されたのだ
ろうと思うことにした。でなければ全く意味がわからないし、そう
思った方が気が楽なのもある。

レネスを狙うわけでもなく、店内の人全員を標的にするわけでも
なく、ただの一発、店にたまたま入って来たロジエの横を撃つただ
け。殺し屋にして稚拙な行為にしか見えない。

勝手にレネス一人でそう結論づけただけなのだが。

それから数日、銃弾のことはすっぱり遠くに追いやり、少しは落
ち着いたかと思えば今度はこのミレイの襲撃だった。

（どこまでも平穏には程遠いし。よくもまあ、次から次と事件が…
…）

なんでこんなにミレイが怒っているのか皆目見当もつかず途方に
くれている状態だった。

「だから、それって何の話よ！あたしミレイの旦那さんなんか結婚
式以来見たことないってば！」

確かに身に覚えのないことで、何故にここまで罵られなければな
らないのだろうとレネスは思った。目ざわりまで言われると正直へ
こむ。

「この期に及んで嘘つく気！ちゃんと知ってるんだから！セナムが
ここに来たってこと！」

またしても別のテーブルの乾燥花が飛んでくる。とりあえず目に
だけ入らないように顔をそむけた。

「とりあえず、とりあえず落ち着いてよ、ミレイ。お腹の子供に障
るって！」

「なによー、それもこれも、あんたのせいじゃないのよー」

お腹の子供という言葉にミレイはほんの少し力を抜き、持ってい
た皿を落とした。カシャーンと破片が辺りに散らばる。

「父さん今よ！」

レネスの掛け声に合わせて、背後に回っていたジンが動いた。
あっという間にミレイを拘束した。

「な、なにすんのよ小父さん！変なところ触らないでよ変態！」
拘束されたミレイはまた暴れたしたが、ジンの腕はびくりとも動かない。ちよつとだけ「変態」の言葉に傷ついた顔を見せてはいるが、気にするほどでもないだろうとレネスは判断した。とりあえず、ミレイの捕獲成功に店の中の全員が安堵の吐息を吐いた。客の一部はすぐさま残念な声を漏らしてはいたが……………。

またしても臨時閉店である。

なんだか最近こんなことが多いなとレネスは目の前の窓から見える雪を見ながら深く息をついた。こんなに頻繁に臨時休業ばかりしては客足が遠のくではないかと思いつつも、興奮している身重のミレイを放っておくわけにかいかなかった。

「うつうつ、グスン、グスン」

やっと落ち着いたミレイは大きなお腹を抱きしめるようにして椅子に座っている。

「はぁ。とりあえず、これ飲んで体温めて、ミレイ」

「いらないわよう。ぐすっ」

ミレイは下を向いたままだ。

「はぁ。そんな薄着で飛び出してきた、体冷え切ってるじゃないの。お母さんになる人がそんなじゃダメでしょ。ほらっ」

明らかに突然飛び出してきたのだろう。ミレイは真冬だというのは外套も羽織らずここまで来ていた。レネスはミレイの背後へと周りに肩掛けをかけた。

「うつうつ……………だって……………あんたが悪いのよう」

落ち着いた証拠の様にミレイはいつもの間延びした話し方に戻っている。

「うんうん、なんだかわかんないけど、それでいいから。まず体を暖めて」

「うつうつ……………」

レネスが茶器を押しつけるようにすると、ミレイは諦めたかのようにならずにそれを手に取った。

今、二人がいるのはレネスの部屋だった。店はジンとワイトの二人で片付けている。本来のワイトの仕事はレネスの護衛であったはずなのだが、最近ではすっかり店の手伝いが板についていた。

とはいえ、もちろん殺し屋への対応もワイトの仕事であり、深夜にいつ襲撃に来るかわからない彼らに神経を張り巡らせ、昼にはレネスについて店の手伝いをしてくれるワイトは目に見えて疲れていた。

（ああ……店の後かたづけ父さんだけに任せて、ワイトさんには少しでも休んで貰えば良かった……）

言ったところでワイトは断るだろうが。

黙って茶を飲んでいるミレイをそつと見つめた。ミレイとは長い付き合いであるが、あんな状態を見たのは今回が初めてだった。ミレイの本音に傷つきはしたものの、あんな状態になるということはそれほど衝撃を受ける事態があったということなのだろう。

レネスは落ち着いたミレイを見計らって声をかけることにした。

「何があつたのよ、旦那さんと」

レネスの問いにミレイは一度口を引き結んだ。あまり言いたくないのが丸わかりではあるが、ここまで騒ぎを起こされたからには聞かなければならないと思った。辛抱強くミレイが口を開くのを待った。

「……レネスの方が良かったって言うのよう」

レネスに退く気がないのを感じ取ったのか、ミレイは渋々といったように口を開いた。レネスは先を促すかの様に首を傾げるだけに留めた。

「あたしと違って……レネスの方が気立てもいいし、働き者だし、酒も飲めて楽しそうだった」

その言葉を言われた時を思い出したようで、ミレイはまたグスグスと鼻をすすりながら泣きはじめた。

そういえばミレイはお酒が全然駄目だったなとぼんやりと思いだした。だが――。

「なんでミレイの旦那さんがあたしを知ってるの？結婚式で軽く挨拶しただけで、まともに話したことないわよ」

「……知らないわよう。こっちが聞きたいわよう。でも、白砂亭の看板娘って言ったもの。あんたしかいないじゃないのよう」

「まあ、確かに家にはあたししか娘はいないわねえ」

だが、ミレイと違って生まれてこのかた異性にモテた試しがないので、そんなことを言われてもいま一つピンとこない。

「どっかの美人をあたしと勘違いしただけじゃ――」

言い終わらないまま、レネスは言葉を止めざるを得なかった。

向かい合っているミレイの背後。

レネスの正面に位置する窓から、ガラスの碎け散る音と共に一人の人間が現れると、ミレイの首へとナイフを当てた。

「ひっ！」

突然のことにミレイは引き攣ったように息を吸いこんだ。

「好機到来」
チャンス

小柄で、まるで女の子のような顔をした侵入者は、しつかりした男の太い声でそう言うと、楽しげにニイッと口角を引き上げた。

「うかつだなあ。命狙われてるっていうのに護衛外しちゃダメだよ」

侵入者は片手でナイフを持ったまま、もう片方の手で波打つミレイの赤い髪の手触りを楽しんでいた。

「いいねーこの色。僕の大好きな血の色だよ。僕もこんな白っちゃけた色じゃなく、この色にしたいな」

どうやら彼は淡すぎる自分の金髪がお気に召さないようだ。「いいな、いいな」と言いながら、ミレイの髪を手でサラサラと滑べらす。

強張ってるミレイをよそに、それはそれは楽しそうに何度も髪を掬いあげては流すように下へと落とす。まるで何かの玩具を見つけた子供のようなしぐさだ。

その隙について、レネスは歌を歌うべく口を開いた。歌うのはもちろん「激甚の歌」ミレイを巻き込むことに色々な意味で問題はあるものの、躊躇している暇はない。ミレイに怖がられても嫌われても、今レネスに出来ることはそれしかなかった。

「あれー、今ここで歌っちゃうと、この赤毛のおねーさんの首にナイフがぐっさりいつちゃうかもよ」

レネスの行動を予測していたのか、侵入者はニヤニヤとしながら自分の持つナイフを指差した。ただ当てられてるだけと思われていたナイフはしっかりと先をミレイの皮膚に向けている。ほんの少しだが血が滲んでないだろうか。

うまくいかせる自信はあるものの、ほんの少しの運命のズレでそのナイフがミレイにぐっさり刺さった日には、悔やんでも悔やみきれない。レネスは開いた口をぐっと閉じるしかなかった。

レネスがぐっと口を閉じたのを確認すると、侵入者はまたしてもミレイの髪で遊び始めた。

「まあ別に歌ってくれても全然かまわないんだけどね。僕が倒れても次が来るだけだし。知ってる？君を狙ってる人数。両手の指でも足りないんだよ」

「まさか……あたし一人にそこまでの人数使わないでしょう」

両手の指でも足りない程の殺し屋なんか狙われたらいくらワイトの腕が立つても生き延びることは無理だ。

「それがねえ、そうでもないんだよ。君の用心棒と親父さんが思ったより活躍してくれちゃったりしてるもんだから、どんどん人数が増やされてきちゃってさ。まるでゴキブリか鼠みたいに増えるから、僕として邪魔で邪魔で」

心底うんざりした顔で首を左右に振っている。邪魔だということは横の繋がりはないということだろうか。

それよりも、一番気になったのはワイトとジンの話だ。

「活躍って……」

何度聞いても「昨夜は何もなかったから安心しろ」としかレネスは言われていない。活躍の場などあったとは思っていなかったのだが。

「あれ？知らないの？夜中に毎日結構な立ち回りしてるよ、彼等。休む暇もなくこき使われて可哀想にねえ。ま、そのおかげでこうして僕に好機チャンスが来たわけだけど。あれ？違うか、今回の好機チャンスはこのおねーさんに感謝か」

侵入者はそう言うなりぐつとミレイの髪をひっぱり仰け反らせる。「うーん、この白い首に赤い血はとつても映えるだろうね。髪と同じ色にしてみるのもお洒落じゃない？」

ナイフを首に這わせてはうっとりとしている。

「レ、レネス……」

首元にある冷たい感触に恐れをなしているのだろっ、ミレイは掠れた力のない声でレネスを呼ぶ。

レネスは励ますように力強くミレイへと頷いてみせた。ワイトもジンもここに居ない今、ミレイを守るのは自分しかない。歌うこ

とを封じられているとはいえ、レネスはそれを諦めるつもりは全くない。

「あなたの標的はミレイじゃなくて、あたしのはずよね」

「うん、そーだよ」

レネスの言葉に侵入者はミレイの首から視線を外すことはないものの、嬉しそうに笑った。まるでその言葉を待っていたかのようにだとレネスは思った。

「だったら、あたしがそっち行くからミレイを早く放しなさいよ」

レネスは侵入者の方へと一步を踏み出す。ミレイさえ放して貰えれば、後はどうとでも出来る。

「いいよー」

あっさりと言うなり侵入者はばいっとミレイを離れた。ミレイが座っていた椅子から放り出す形で。突然のその行動にレネスは歌える好機を逃した。

「きやつ」

どさりと鈍い音を立ててミレイは床へと転がった。身重の人間になんてことをするのだろうか。

「ミレイ！大丈夫？」

慌ててレネスはミレイを助け起こした。思ったよりも大した衝撃ではなかったようだ。

「う、うん」

「動ける？」

「うん」

ミレイの答えに安堵して、そのまま立ち上がらせようとした時だった。何かが破裂するような音が部屋中に響いた。「ひっ！」ミレイの声が上がったと同時に、二人のいる場所からほんの少しだけ離れた床から小さな煙が上がった。

「な、なに？」

驚いてミレイを支えたまま、その煙の出る場所を見れば、そこには小さな穴が空いている。

「ざーんねん、外れちゃった」

さも残念そうな声にレネスは嫌な予感を覚えつつ、侵入者のいる場所へ振り向いた。

侵入者が手にしているのは、ヒキガエルの処で一度見たことがある片手で持てる小さな小さな――銃。

「じゃ、今度こそ当てるからねー」

子供のように無邪気に笑いながら標的を狙う侵入者。銃は二つの手、それぞれに握られていたのだった。

おかしな音に気づき、ジンとワイトはレネスの部屋へと急いでいた。

その体つきからは想像も出来ない俊敏さでジンが階段を駆け上がり、その後をワイトが追う。

狭い階段では追い抜くことも並んで走ることさえ出来ないのだが、それを気にする必要もないほどの速さで階段を駆け上がった。

廊下に躍り出た二人はレネスの部屋のドアを激しく叩きながら絶叫するミレイを見つけた。

先程から階下に響いていたおかしな音はこれだったのだ。女性特有の甲高い声と、何かを激しく叩く音。まさしくミレイの今の状態を示唆する音だった。

「レネス！レネス――！――！嫌よ――！――！開けてよ――！――！――！」

壊れてしまいそうなほどの勢いで、泣きながらミレイはドアを叩いている。どうやらドアの鍵が閉められているらしい。

「鍵なんてあったのか、あの部屋」

ミレイの様子にただならぬものを感じつつ、ワイトはジンへと確認をとるかのように聞いてきた。確認を取らねばわからないほど使っていないかったのだ。

「あるには、あつた。使つたことなどないが」
「そうか」

頷くとワイトはすぐさまミレイを止めに入つた。ミレイの手はドアを叩いていたことにより赤くなっている。

「離して！レネスがレネスが殺されちゃうのよー！」

ワイトに手を止められても、ミレイはそれを振り払おうと暴れだした。

必至なだけにその力は通常の女性の力を凌駕している。押さえるワイトも必死にならざるを得なかった。

骨が軋むほどの力でミレイの腕を掴んだ。

「開けるから、こつちにどいてろ」

整つた顔ですごまれミレイも怖さに力を抜いた。と同時に更なる涙がわきあがつた。

「ひつく、ひつく、レネスが、レネスが」

眉を八の字にして頼りなく泣く様は男心をくすぐるが、今はそんなことを言っている状態ではない。

「わかつてるから、落ち着け」

相当激しく泣いたのだらう、ミレイの顔は手と同じように赤い。

「でも、でも、レネスが何にも言わなくて」

「ああ、だから今ドアを開けるから邪魔だ」

ワイトは興奮しているミレイの肩を抱きドアから遠ざけた。
振り返つてジンへと合図を送る。

ジンもそれに応えるように大きく頷くと、一瞬力を貯めるかのように体を縮こませ、次の瞬間一気にドアを蹴り倒した。

轟音と共に埃が舞い上がる。ジンはその埃をものともせず中へと走り寄つた。

「ここで、待っている」

ワイトもその言葉だけを残し部屋へと走り寄つた。

「誰もいない」

呆然とジンが呟いた。

目の前に広がるのは壊された窓から入る風にはためく窓掛けと、散らばるガラスと横たわったテーブルだけだった。特に血のような物は見当たらず、この部屋の中にいた時は命に別状はなかったことが窺われる。

「日中はあれ以来全く襲撃がなかったから抜かった」

大きくワイトが舌打ちをし、すぐさま窓から躍り出た。

「レシー、どこにいった？」

部屋に落ちていたレネスの髪紐を拾い上げたジンは、それを握りしめ、どんよりとした雲を眺める。

「マリン、マリン、俺たちの娘は――」

どこへいった？という言葉は口に出されることはなかった。ジンは髪紐を握りしめたまま、部屋を出て泣き崩れているミレイの前にしゃがみこんだ。

「ミリイ何があつたんだ？」

しばらくして、ワイトが戻ってきた。

「どこにつ連れて行かれたのか、さっぱりだ」

ワイトは短く息をしている。相当走り回ったようだ。

「そうか」

少しでも片付けたレネスのベッドの上に寝せられたミレイを見ながらジンは軽く頷いた。

「銃を持った小柄の男だったそうだ」

ジンの言葉にワイトは眉を寄せた。

「また銃か」

重苦しい空気がその場を流れた。やはり先日の銃撃事件を軽視するべきではなかった。

「公爵に力を借りに行ってくる」

ワイトは戻ってきたばかりの窓枠に手をかけた。

「……………公爵に何が出来る？」

ミレイから目を離さないままジンはポツリと言う。

「首謀者を知っているなら、そこからレネスが連れて入れた場所を特定できるだろう」

「首謀者は本当に公爵の知ってる相手か？」

「……どうということだ？」

ワイトは訝しげに眉を寄せた。

「いや。抹殺を命じたのなら何故連れ去るのかと思ったただけだ」

「ふむ、言われてみればそうだな。連れ去る必要があったということか？」

ジンはこつくりと頷いた。

「何れにせよ公爵を使うのが一番だろう。あれは貴族のくせに妙な知り合いが多い」

「そうか。頼む」

「ああ」

またしてもワイトは姿を消した。今度は公爵の元へと向かって。

二人の男達が布袋へ製粉されたばかりの粉を入れる作業を行っていた。

一人は袋を開いたまま押え、もう一人は杓子で袋へと粉を詰める。二人一組で行うその作業を慣れた手つきで黙々と行っているのはロジエだ。もう一人はロジエより少し年上の従業員で、先ほどから袋を持つのと粉を詰めるのとの作業を交互に行っていた。

袋がいつぱいになると、さつさとその口を紐で縛り、次の袋を取り出し、また詰め始める。子供のころから何度となくやらされた作業だけにロジエの手つきは無駄がない。

子どもの頃はあれほど全身を粉に塗れさせていたというのに、今は殆どそんなこともない。逆に年上であるはずの従業員の方がいつも粉に塗れている。年季の違いだとロジエは偉そうに思っていたりする。

「よし、もう五袋くらいで終わりだぞ。さつさと終わらせてしまおうぜ」

また新たな袋を出しながらロジエがそう言えば、粉詰め担当だった従業員の男は懷から布を取り出すと額の汗を拭い額いた。

「ロジエ、今日こそは行くのかよ」

汗を拭いた布を懷にしまった従業員の男はロジエから袋を受け取り口を広げ、にやりと笑った。

「どこにだよ」

粉を大きな杓子で掬っては、こぼさない様に袋に入れる。

「あの食堂だよ、お前のお気に入りの子がいるところ。えーと、レネスちゃんだっけ？」

その問いにロジエはただ頷き、山になっている粉の中に杓子をつっこんだ。

「今日こそは行って求婚受けて貰うのか？」

ロジェがレネスに求婚した話はすっかり商業区の間では広まっていた。それはそうだろう、道端で思い切りでかい声で求婚したのだ、あの辺りを歩いてた人間なら誰でも聞いたはずだ。

実のところロジェはそれを狙っていたりもした。話が広まれば広まるほど、外面のいいレネスのことだ断りにくくなると思ったのだ。「まあ、今は無理だろうな」

ある種の憐みの表情をしたレネスの顔を思い浮かべてロジェはため息をついた。

「へえ、諦めるのか？」

まるで面白いことを聞いたというような顔をしている従業員を睨みつけ「そら、交代だ」と杓子を渡しもう一度ため息をついた。

（あいつのことだから、俺が冗談言つてるとまだ思っているよな）
もしくはいつもの嫌がらせの一環だと思っっているかのどちらかだ。長年レネスに大嫌いな虫を持つていったのは勿論気を引きたいが、為だったのだが、レネスは全くそれに気づいていない。

気づいていない挙句に最近は何やら次から次とイイ男を侍らせていたり、ロジェの存在を忘れていたり、踏んだり蹴ったりだ。

うまくいかないことに業を煮やして、ミレイに相談に行けば「そもそもお、全部、自業自得でしょお」とあつさり言われ、なんだか哀しくなったロジェは「なんとかしてくれよー」とミレイに縋りついてしまった。我ながら情けないことこの上ない。

袋を押さえながらロジェはまたしても深々とため息をつくのだった。

「えーと、次はカロッツ家に五袋と」

デランドール家への配達を終えたロジェは、次の配達先が書かれた紙を見た。

なんだか最近はやけに貴族屋敷への配達が多いなと思いつつも、止めていた荷車を「よっこいしょ」とひいた。

「くそーお袋めー、製粉作業も終わってるんだからロビイ貸してくれてもいいじゃねーかよ」

ぶつぶつとロバを貸してくれなかった母への文句を言いながらロジエは荷車をひいていたりする。

「折角いるのに、なんで未だに配達は人力なんだよー」

くそーくそーと連発しながらカロツツ家へ向かう。

本当だったら今頃は白砂亭でレネスに小言言われながら楽しいメシの時間だったはずなのに。

袋詰も終わって意気揚々と出かけるはずだったのに。

「くそー、それもこれも、この仕事受けたお袋のせいだー」

半泣きになりながら荷車をひく姿は結構哀れを誘うのか、それとも面白い見世物なだけなのか、通り過ぎる馬車の中の着飾った貴族たちがやたらと窓から顔を覗かせて見て行く。

ロジエはずるりと鼻水をすすった。ともかく、早くこの仕事を終わらせて家に帰ろう。そして明日こそレネスに会いに行こうと思いつながら。

荷車をひいて使用人出入り口から「小麦粉配達にきましたー」と顔を出したロジエを、カロツツ家の使用人は怪訝な顔で見つめた。

「え、あの、誰も今日は頼んでないと言ってますけど」

多分この子は調理人の下っ端の方なのだろう、調理人特有の白い服は着ているが、やけにおどおどしてたりする。

「いや、でもちゃんと注文頂いていますよ、カロツツ伯爵本人から」

「ええ？伯爵様がですか？」

「ほら、ここにちゃんと伯爵様の署名の入った注文書が」

ロジエは持っていた斜めがけにしていた肩掛け鞆からその書類を取り出して相手に見せた。

「え、ええ？ちょ、ちょっと待っててください」

使用人は慌てて中へととって反していった。

（なんだよ、ここでも下に話が行ってないのかよ。貴族様は勝手だ

からなあ)

ここの前に行ったデランドール家でも以前にこのような対応をされたのだ。最近はそういったことはなくなったが、まるで不審者を見るような目つきで見られるのはいい気分はしない。

そうこうしているうちに先程の使用人が戻ってきた。

「あ、あの、ではあちらに置いてもらえますか」

少し離れた小屋のような場所へと案内された。食糧庫なのだろう。ロジェはさっさと五袋を置き、伝票を渡すとカロツツ家を後にした。

街へと戻る緩やかな坂を空になった荷車をひいて軽快に下っていく。

「やれやれ、とんだ余計な仕事だったぜ」

貴族屋敷の立ち並ぶあたりから間もなく出ようとする時だった。

ロジェは一人の少女に気がついた。

どこかの使用人なのだろう、地味な紺のスカート履いている。至って普通のどこにでもいる使用人の姿ではあるのだが、ロジェはその少女の姿に目を剥いた。

その少女はお使いの帰りなのか大きな荷物を担いでいた。

(つて、普通女の子があんなデカイ荷物担げるのか?)

ロジェが目を見て驚く程の大きな荷物を肩に担いだその子は、その不気味な構図を気にする様子もなく、しっかりした足取りで坂を登って来る。

(すげー)

今時の女の子はロジェが思っている以上に強いのかも知れない。呆然としながら荷車を止めて様子を眺めていると、その少女がこちらに気づいた。近くで見ると、肩まで伸びた淡い金の髪の可愛らしいどこにでもいるか弱い女の子に見える。

途端に少女は体をよるめかせた。まるで今までのっしのっしと歩いていたのが嘘のように、か弱い女性そのもののように荷物を重そうに下に降ろした。

どさりと荷物は地面に落とされた。その音からしてかなりの重さだ。粉を運び慣れてるロジエにはおおよその重さが想像出来、また驚く。

（デカイだけじゃなく重さもかなりの物なのに、今まで担いでたのかあの子）

ロジエは驚きで少女と荷物を交互に眺めた。

「そこのお兄さん」

突然、その怪力少女が口を開いた。それもロジエへと向けて。少し掠れた低めの声だった。

「な、なに？」

「荷物が重くて大変なの、ちょっと手伝ってくださいませんか？」

「は？」

「ちよつと私が運ぶには重すぎて……」

少女は辛そうに下を向いて手を口元に当てた。

（いや、のつしのつし歩いてただろうお前！）

あまりの変わりようにロジエは自分の顔が引きつるを感じた。

女は恐ろしいとここでロジエの頭に記憶される。

「い、いや、俺忙しいから」

こんな恐ろしいものと係わっては碌なことにならないと思ったロジエはさつくりと断りの言葉を述べた。

「ひどっ！女の子に対して優しくないなんて、あなた紳士じゃないわね！」

「は？」

「そんなだと女の子にモテないし、好きな子に逃げられた挙句、求婚も断られちゃうんだから！」

ぐさぐさとロジエの心に言葉が突き刺さった。好きな子に逃げられて求婚も断られる。あまりにも今のロジエにはキツイ言葉だ。

「わ、わかったよ」

あつさりと白旗を上げると、その荷物を運ぶのを手伝ったため荷車ごと傍に寄る。

「じゃ、よろしくね」

可愛らしく笑う少女に逆らうすべは今のロジエには残されていないかった。

荷車に乗せようとロジエは荷物へと手を伸ばした。

「あ、いいわ、乗せるのは私がやるわ」

つまり触つて欲しくないほど大事な物なのだろう。だがその割にはどさりと落としたりと、そんざいに扱っていたようにも見えるが、よろよると重そうなそぶりを見せながらも荷車に荷物を積むと、自分もひよいとその横に座った。ちゃっかり自分も荷車に乗っていくつもりらしい。

「さ、動いて頂戴」

「どこに向かえばいいんだよ」

「あそこよ」

少女が指さした先は、貴族屋敷の片隅にある、町一番の豪商の屋敷だった。

- 17 - (後書き)

たまにはちょっと視点を变えて
主人公にはいったん休んでもらいました

体に走る衝撃でレネスは目を覚ました。

目を覚ましてはみたものの、あたりは真っ暗で何も見えないかった。

何が起こったのかはよくわからないが、背中やら肩やら腰がやけに軋むように痛んだ。レネスは痛みをこらえるため体を縮こまらせると、更に増した痛みにも声を漏らした。

「いたたたた」

そう言っただけだったのだが、その声は辺りに響くことはなかった。

驚いたレネスは体を大きく動かそうとしてみたが、手も足も動かすことはかなわない。

動かそうとするたびに四肢に絞めつけられたような痛みが走るばかりだ。

どうやら今自分がいるのは、何かの袋か箱の中のような。少し体を動かせばざらりとした物に当たる。そして息苦しさから考えるに口も何かで塞がれているらしい。

（げっ、なに、あたし縛られた上に袋に入れられてるってこと？）
そう思った時だった、急に体が浮いたと思った次の瞬間、何かに体を叩きつけられた。

あまりの痛さに声にならない悲鳴を上げた。

（なんなの、いったい！痛いじゃないのよ！）

どうやら背中あたりに打ってしまったらしく、ただでさえ息苦しいというのに息苦しさが増した。苦しさにレネスは歯を食いしばった。

（いたたた。なんだかお腹のあたりもジンジンするし……）

背中も痛いのに今度はお腹も痛い。さすりたのにさすれないことがもどかしい。

（うー、なんかでお腹えぐられたっけ？）

えぐられるなどと恐ろしいことを考えたレネスは、ようやく自分の身に起きていることに気が付きはじめた。

（そうだ！ミレイを部屋から出した後、あたしあの男にお腹刺されて……）

ミレイを追出しドアを閉めた直後の腹部に走る激痛。ドア越しに聞こえたミレイの叫び声が脳裏に焼き付いているのだが。

（あたし生きてるわよねえ）

刺されたと思ったのは気のせいだったのだろうか。その割には確かに痛みは残ってはいる。なにやら不思議なというか不可解な現象だとレネスは思った。

（もしかして誰かが助けてくれたかなあ。それともあの男に捕まっただけ？）

淡い金髪のまるで女の子のように可愛らしい顔をした侵入者の顔を思い出した。中身は残念ながら、可愛いというには物騒極まりない人間だった。

（男の人で間違いはないと思うけど）

自分がこうして生きているということは、彼は殺し屋ではなかったのだろうか。

（まあ、なんにしろ生きてるならとりあえずはいいとするかー）

得意の「ま、いっか」精神で、命のあることに安心したレネスはとりあえず痛みも引いたし、暇だから、もう一眠りするかと力を抜いた。

またしても、体に走る衝撃でレネスは目を覚ました。

（いったーい、さっきからなんなのー？）

今度は横に落ちて肩が痛い。

（こりや体中痣だらけになってるわよね）

全身黒ずんでそれこそゾンビみたいになっただろうしょうかとレネスは本気で心配をしたくなった。

（お嫁に行けなくなる……）

どこに？と自分でツツコミを入れて、嫁に来いといった人物をふと思い出した。

（あんなミミズ持つて追いかける男なんて断固お断り）

虫を捕るなどと言わないが、それを持ったまま追いかけるとはどいうう了見なんだとレネスはロジエをさっくりと頭の中から削除した。

（ロジエじゃないとしたら……）

次にレネスの頭の中に浮かんだのは若様だった。

（いやいや、身分違いも勿論だけど、若様も虫で人をいじめる点ではロジエと変わらないし）

蜂の子料理をレネスの口に突っ込んだ時の若様の楽しそうな顔を思い出しては、猿ぐつわをされた状態のままギリギリと歯ぎしりをした。

あとは——とレネスは考えた。

（伯爵様、素敵なんだけどなあ。女性だし。もったいないなあ）

優雅な立ち振る舞いの優しい銀髪の伯爵を思い出した。美しいだけでなく、よく気がつく麗しの伯爵はレネスの中で一番の憧れだ。

（まあ、それもこれも、若様にかかわれなければだけど）

あの狭い家の中で暴れた伯爵を思い出したレネスはフルフルと頭を軽く振った。危うく家が崩壊するところだったとあの時思ったものである。

（そういえば、新年の王宮で何があったか結局聞けずじまいだった）あれからなんやかんやとバタついて、それを聞くどころじゃなかったのだったことを、ここにきて思い出した。

（あー、姫様一体なにやらかしてくれただろー気になる）

黒髪の美少女の突拍子もない行動は、どんな物語を読むより楽しくて――

（そういえば、若様から借りた本読むの忘れたままだった）

未だ表題しか見ていない本なのだが、ずっと借りたままというの

も悪いので近々読んだふりをして返すことにしよう」とレネスは決めた。

絶対厭味たらしく、「どんな内容だった？」って聞いてくるに違いないから、あとで後書きでも読んでおこう。確か本の題名は「ワイトの冒険」だったはずだ。

（ん？ワイト？）

どこかで聞いたことがある名前だ。

（ワイトってワイトさん？あれ？）

暗闇の中、手足を縛られ口をふさがれた状態のレネスは、暇すぎて次々とくだらないことを思い返してみている。そして——ワイトの名前に大きな疑問が沸いたところだった。

「——お、俺はもう行くからな！」

突然響いた大声にレネスはびっくりと体を揺らした。どうやら自分の傍には人がいたらしい。

「ありがとー。おかげで助かったわ。ちゅっ」

「なななな！なにすんだ！」

話し方の感じからすれば、男性——と女性が一人ずつの二人だろうか。随分声の低い女性だなとレネスは思った。

「いやーねー、真っ赤になっちゃって可愛いわね。お礼の気持ちよ」

「そんなお礼なんかいるかー！じゃあな！」

バターンと何かを閉める音が聞こえ地響きがしたところを見ると、随分男性の方は大慌てで帰ったようだ。

ということは今ここにいるのは妙に低い声の女性が一人ということだろうか。それとも最初からこの場にいる人間もいたりするのだろうか。

レネスは神経を張り巡らせ周りの状況を窺うことにした。

それからややあって、レネスに光が差し込んできた。

「やあ、待たせちゃったね」

そう言つて袋を開けてくれたのはどこかの屋敷の使用人の女性――ではなく、淡い金髪で可愛い顔をした――

（物騒極まりない、あの男！）

やはりレネスはあの男に捕まっていたのだつた。

何故か彼は今は貴族の使用人のような格好だ。

（それもなんで女装？）

レネスよりもむしろ似合いすぎるほど似合っていて、かなり可愛いらしい。

ついついレネスは袋から上半身だけを出されたままの恰好で、その男の姿を上から下まで眺めた。どこをどう見ても男になんて見えない。

同じように性別とは違つた格好をしてはいても、伯爵はあんなに女らしさが滲み出ていたのに、今目の前にいる男はどこからどうみても可愛い女の子にしか見えない。

（なんか、妙に納得がいけないのはどうしてかしらね）

「何、僕があんまり可愛らしくてムカついた？」

そんなことを言いながら男は本当の女性のように肩にかかる髪を優雅に振り払つた。

「それにしても、君の婚約者つたら随分純情だねー。僕がお礼つて頬に口づけしただけで、すごい真っ赤になつて飛び出して行つたよふふふ」

婚約者という言葉にレネスは首を傾けた。

「ああ、気づいてなかったんだー？ここまで君を運んでくれたのつて、あの製粉屋の息子だよ」

（え、さっきのつてロジェ？）

ということはロジェはこの男の共犯なのだろうか。そんな器用なことが出来るような人間ではないはずなのだが。

「やだなー、そんなに真剣な顔しなくても、君の大事な婚約者としてたりしないつてばー」

レネスの強張つた顔を見て勘違いしたのか、女の子のように見え

る男は楽しそうに笑った。

「僕がね、可愛い女の子の恰好で大きな荷物を運んでいたから気の毒になって運んでくれたんだ、彼。いい人じゃないの、君の、こん・や・く・しゃ」

婚約者というのをあまり連呼しないでもらいたいとレネスは本気で思った。婚約した覚えなど全くないのだから。

つまりは、女の子が気の毒で運ぶのを手伝ったロジエは、男に口づけされて真つ赤になって逃げたと。ことの次第を納得したレネスはロジエの純情さを情けなく思うより、気の毒に思うだけだった。（やっぱり、なんのかんの言っても男は可愛いものにすぐ騙されるし）

可愛らしさとは無縁の自分にはそれこそ縁のない話だとレネスは肩をすくめた。

「さて、無事に到着したことだし、その縄をほどいてあげるよ」

誘拐犯はナイフを取り出すと手を縛っている縄と、足を縛っている縄を切ってくれた。

切り終えた途端ぺロリとナイフを舐めニヤリと笑った。

可愛らしい姿と、その禍々しい姿の落差にレネスはぞくりとした。やはり自分はこのナイフで切られるのだろうか。そんなことを思うと折角自由になった手足があるというのに、口元に食い込む猿ぐつわを外せなかった。

そんな様子をみた誘拐犯は、不思議そうに首を傾けた。

「あれ？折角手が自由になったんだから、その猿ぐつわも取ればいいのに」

この目の前の男は、自分が猿ぐつわを取れば何をするかを分かっているってそんなことを言っているのだろうか。

仮にレネスがナイフで刺されることがあるにしろ、次の瞬間には自分だとして意識を失うことになるというのに。そんなことを考えながらもレネスは後頭部で縛ってある猿ぐつわへと手を這わせた。結び目はすぐにわかった。こうなったら外したと同時に劇甚の歌で逃

げるしかないと腹をくくった。

「でさー、うちのご主人様だったら人使いがすごい荒くてー。そんなに次々仕事頼まれたところで、僕の体は一つしかないしさー、時々本気でご主人様にイラつときちゃうわけー」

椅子の背もたれを抱え込むように座った可愛らしい女の子の姿をした人間は、姿に似合わないやたら野太い声でぺちゃくちやとお喋りを続けていた。

「前の仕事終わったと思つたら、今度はすぐ君のこと誘拐してこいとか言われるしさー。僕に自由な時間はないわけ？と思うわけさ。だからとつと終わらせてしばらく雲隠れしようかと思つていれば、簡単なはずの誘拐も邪魔者ばかりでなかなかうまくいかないしさ。ちよつと、聞いている？君のこと言ってるんだよ？」

苛立ちをぶつけるかのごとく、足でドンドンと床を叩いている。椅子に後ろ向きに座っていることから、脚は当然大股開きである。スカート姿でその恰好をするには無理があつたらしく、恥じらいもなくスカートは太もものあたりまで捲れあがつていて、そのお世辞にも美しいとは言えない体毛に覆われた筋肉質の脚が丸出しであった。

そんな姿をうんざりと眺めたレネスは、仕方なく相槌を打つかのようにつくつくと頷く。

「もう、人の話はちゃんと目を見て聞くようにって教わらなかったわけ？これだから今時の子は……」

お前なんぞに「今時の子」などと言われたくないとレネスは思ったが、我慢我慢と心の中で唱え俯いた。一体この我慢我慢という言葉を何度唱えたことだろう。

「うんうん、わかればいいよ。それでね――」

レネスが反省の意を示したことで納得したのか、男はすぐさま話の続きをしはじめた。面倒なので頂垂れたままにしておこうかと思

ったのだが、返答の催促をするかのように何かを叩く音が聞こえたので、仕方がなく相槌を打つ。なんて面倒な奴だろうと心から思わずにはられない。

（この愚痴はいつになったら終わるんだろう……）

先の見えないこの苦行にそつとレネスはため息を吐いた。

レネスがここに連れてこられてからすでに丸二日が経過していた。連れてこられた当初はいつ殺されるかとビクビクしていたものだが、すでにそこまでの緊迫感は薄れていた。

「あー、喋りまくったら喉乾いた。レン、お茶入れてよ」

レネスはコクリと頷くと立ち上がりお茶を淹れ始めた。はっきりいって話を聞くより用事をいいつけられる方が楽というものだとレネスは思っている。何やら勝手に名前も「レン」などと愛称をつけられてはいるが、それについて文句ももはや出すつもりはない。何せ、ただの変態殺人鬼と思われたこの男、一皮むけば近所の井戸端会議好きのオバヤンとなんら変わらない生態をしていたのだ。ついでに言えば今時の軽い男の子の雰囲気も醸し出す摩訶不思議な生き物だった。

「あ、僕のがあんまり濃く淹れないでよね、さつき上に行ったらさー、丁度使用人達が休憩してたんだけど、濃すぎるお茶は体にあんまり体に良くないと言ってたからさー。なんだっけ濃すぎると利尿作用がどうか言ってたよ。あ、だからってあんまり薄くしすぎると美味しさが半減するから程々だよ、程々。そのあたりのさじ加減間違えないでよね」

うんうんと何度もレネスは頷いた。すでに猿ぐつわは取れてはいるが、この喋りに対応して声を出すのが億劫になっていた。話を聞かないと怒られるのは勿論のこと、相槌を打たなくても怒られ、拳句に口を挟んでも怒られるのだ。つまりは頭を振るだけで全ては事足りる。いい加減頭の振りすぎでおかしくなりそうだと途方にくれた。

（なんだってこんなことに……）

あの時猿ぐつわを外したと同時に「激甚の歌」でこの男を気絶させるつもりだったのに。その目論見はほんの一瞬で儚く消えたのだ。思ったより入り組んだ結び目がやっと解けようとしていた時、この男の一言で全ては終わってしまった。

「そうそう、この部屋の外5人くらい耳栓した兵置いてるから」

そこまで用意周到にされた状況で、無意味な労力は遣いたくない。とレネスはあつさり諦め今に至る。

淹れ立てのお茶の入った器を手にし、椅子に正しく座った可愛らしい姿の男は、その姿に合った可愛らしい仕草で熱い茶に「ふうふう」と息を吹きかけている。その姿だけ見ればとても中身が鬼畜なオバちゃんだとは誰も思わないだろう。そもそもなんでこの男はこんな恰好をしているのだろうか？と今更レネスは不思議に思った。

（ま、聞いたところでまともにも答えるとも思えないか）

逃げることをとりあえず諦めた直後は、色々と質問攻めにしてみたのだが、その殆どが巧みな話術で煙に巻かれてしまいまともに聞き出せてはいかなかった。

（煙に巻かれたというより、こいつの喋りたいことだけに話を持って行かれたただけだ）

どこまでもどこまでも、人の話を碌に聞かず突っ走るその様は本物のオバちゃんですら負けるんじゃないかと思わせるほどの傍若無人振りで、よくこんな雇ったなと雇い主を尊敬せずにはいられない。

レネスはもう一度ため息をつく、自分も茶器を傾けた。

（このお茶何回飲んでもいいお茶よね。言っちゃ悪いけど、伯爵様のところのお茶より高級？）

詳しい話はしてくれないものの、ここがどういう所かということだけは薄々わかって来た。部屋の中は薄暗くてジメジメしてはいるものの、出される食事や食器類は高級品といえる物が揃っていた。つまりは貴族なり豪商なりの富に溢れた人間の屋敷だろう。そして

時々この男が言う「上に行ったら」ということから判断すると、ここは地下の部屋であることが想像できた。ならばジメジメしていて薄暗いのも納得できる。

「そーいえば、君って歌うことしか出来ないの？」

お茶で喉を潤した男が突然レネスへと質問を投げかけてきた。二日も一緒にいるのに初めてのことだ。なんの前振りもない質問にレネスは首をかしげた。歌うことしかとは出来ないと言われるのは、些か心外だ。別に歌わなくても料理だってそこそこ出来るし、掃除洗濯だって出来るし、ちょっと下手くそではあるものの編み物だって……出来ないとは言えない。

「セイレーンってさ、色々出来るんでしょ？なんか先を見通す力もあるってご主人様は言ってたけど。でも君そんな雰囲気ないよね。なんつーの、行き当たりばったり？当たって砕ける？もしくはなすがまま？」

酷い言われようだ。別に当たって砕けるつもりは毛頭ないのだが、行き当たりばったりというのと、なすがままというのは反論の余地はあまりなかったりもする。

「ほら伝説のセイレーンはさあ、先を見通す力で戦況を何度も打開したらしいじゃない。奇襲を予測して返り討ちにしたとかさ。そういうのあったら便利だよねー。君も実は見えないけどそういう力もってたりするのかなあと思っただけ……あー、その顔は君にはそういった力はないってこと？つまり歌うことさえ出来なきゃただの人間と変わらないってこと？だよねー、もしそんな力あったら僕の浸入簡単にさせるわけないしねえ。なーんだ、つまんないの。それじゃ競売かけたって買い手あんまりつかないじゃないのさ。値段どこまでつり上がるか楽しみにしてたのにーご主人様の目論見大外れー」

そうして男は手を頭の後ろで組んだ。ぺらぺらぺらといつもの通り一人話を進めていくのを半分聞きながら適当に相槌を打ってレネスだったが、後部の「競売」という言葉に思考が止まった。

「は？競売？」

「うん競売」

丁度うまい具合にお喋りの切れ目だったようで、今回は素直に返事を返してくれた。

「それって、まさか……」

「あれ？言つてなかったっけ？そう、君、競売の商品になるんだよ」「は……？あたしが商品？」

「うん。だから僕我慢して殺してないじゃん」

「いや、我慢してつてのはともかく、なんでそんな大事なことを早く言わないのよ！」

今までの無気力な気持ちが一気に吹っ飛んだ。いつか時期を見計らって逃げる算段をしようと考えていたのだが、そんな悠長なことをしていられる場合じゃなくなった。

「えー、言つたからつて何か変わった？」

「何言つてるのよ、対処の仕方が変わるでしょうが！」

「えー、気絶させる歌使つても耳栓部隊いるし、惑わしの歌使つても君の嫌いなネズミとかムカデ集まってくるよ。地下つてさあジメジメしてはいるけど、結構暖かったりもしてさあネズミの住処にはもつてこいだよね、でさあ——」

「ぎゃー！そーなの？冬なのにそんなの来ちゃうの？」

あまりの驚きについてオバちゃん——ではなく、鬼畜男の止まらない話を遮った。

「むっ、ちよつと邪魔しないで僕の話ちゃんと聞いてよ」

当然のことながら邪魔したことへの文句が来たが、次々明らかになる事態にレネスは両手を顔に当てて叫んだ。

「って、そういえば魅惑の歌の存在忘れてたー！」

それまで、目の前の女装変態誘拐犯が開けない限りは開くことがなかったドアが、突然何の前触れもなく開いた。

「ふむ、なんだか随分賑やかではないかね」

ドアから顔を覗かせた男は、なんの躊躇もなくこのジメジメした薄暗い部屋へと足を踏み入れた。

明りの届く範囲に現れたのは、年の頃は三十歳程で、仕立ての良さの窺える衣服を上品に着こなした紳士然とした男だった。髪は後ろに撫でつけられ、すっきりとした端正な顔立ちに、整えられた口髭が似合っている。

「げっ、なんであなたがここに！」

レネスの目の前にいた女装の男は驚き椅子から立ち上がった。

その様子を確認した紳士はスタスタと女装男に近づくと、いきなりその頬をがしりと摘み上げた。かなりの身長差があるのか、女装男はぶら下がるように紳士の腕にしがみついた。

「いたたたたたた！何すんだよ！」

「ナデイン君？さっき私の顔を見て『げっ』と言いませんか？」

「気のせいじゃないの？ほら、ご主人様もう三十も過ぎたから老化げんしょ……いだだだだだ！」

最初より更に摘む力が強くなったのか、ナデインと呼ばれた女装変態誘拐犯は甲高く奇声を上げている。レネスは何が起こったのかを今一把握できないまま茫然とその様子を見守っていたが、とりあえずなんとなく理解できたのは、どうやらレネスを誘拐した男は『ナデイン』という名前だということと、今しがた現れた紳士はレネスの誘拐を指示した『ご主人様』本人だということだった。

「ナデイン君？三十から老化現象が起こるのなら、若ぶつてはいるけど、君だってあとほんの数年で老化現象が起きてしまうよ」

「ぼ、僕は永遠の十代だから大丈夫……いだだだだだ！」

「うん？どの口がそんな戯言と言ってるのかな？この口かな？」

今まで掴んでいた頬とは違う方の頬も掴んだようだ。

「わかった、僕が悪かったよ。老化してないって、若いから若いから、いだだだだだ！」

「なんですか、そのとってつけたような投げやりな言い方は。ナデイン君に言い聞かせられずとも、私が若く美しいのはよくわかっていますから結構ですよ」

ナイフをチラつかせながら恐怖心を煽っていた人間とは思えないほどに、ナデインは『ご主人様』にいいように扱われている。

「はいはい、すみませんでした。なんでもいいから、もう放してよー」

「仕方ありませんね、今回はここまでにしておきましょうか」

やっと解放されたナデインは頬を押さえてしゃがみこんだ。「僕の可愛い顔がー」などと泣き言を呟いていたりする。

（この人たち自分大好き人間？）

それまで黙って様子を見ていたレネスだったが、自分を「美しい」だの「可愛い」だの形容するこの二人に顔が引きつるのを止められなかった。

「ふむ。すっかりお待たせしてしまったね、セイレーン殿。おや？ナデインからくりとレネスへ体を向けた『ご主人様』だったが、突然言葉を止めると部屋中をキョロキョロと眺め始めた。

「ナデイン君、セイレーン殿が見当たりませんが、まさかへまして逃げられましたか？」

「は？何言ってるのさ、目の前にいるじゃないか」

「君こそ何を言ってるんですか、目の前にはみすばらしい下女しかいませんよ」

ちよつと待てとレネスは思った。もしかなくてもその『みすばらしい下女』というのは自分のことだろうか。確かに立派な衣装なんかは着てはいないが、ちゃんと洗濯した綺麗な服を着ていたはずだ。それなのにそんな言われ方はあんまりではないだろうか。と思

つたのだが、よくよく考えればここに連れてこられてからというもの、風呂はおろか洗濯すらままならない状態だったことを思い出し、とりあえず袖の臭いを嗅いでみた。とりあえず今のところは特に臭くはないようだ。夏でなくて良かったと思わずにはいられない。

「だーかーらー、そのみすばらしい下女がセイレーンだってば」

臭いの確認を終えたレネスがよくよく会話を聞けば、自分を誘拐してきた男にまで『みすばらしい下女』呼ばわりされている。

「なんと！なんと、なんと、なんと！これがセイレーンと！」

芝居がかったと言いたくなるほどの大げさな身振りで『ご主人様』は驚きを表した。

「セイレーンといえば伝説に聞くには絶世の美女だったと聞くに、この下女がセイレーンだと！」

「だから、そーだよってば。絶世の美女だっのなんてこの女の何代も前のことだろう？仕方ないじゃないか」

ナデインの説明に「そうだ、そうだ」と心の中で頷いた。とはいえ何かが腑に落ちない気がするのなんだろう。

「なんてことだ、私のセイレーンがこんな下女のような娘とは……」

茫然とレネスの全身へと視線を這わせている。それほどまでに衝撃を受けるとはかなり失礼な話だ。

「『私のセイレーン』ってただの売り物だろうに」

「何を言ってるんだいナデイン君。私が売り物全てに愛を注いでいるのを知っているだろうに。それなのに、それなのに、こんなにみすばらしい下女……」

がつくりと肩を落とした『ご主人様』をナデインは白けた顔をして見つめている。まるで「アホか」とでも言わんばかりの表情だ。

それにしても、レネスはいい加減下女呼ばわりに苛立ちが増してきていた。まるで伯爵様のマグマの様に自分の中で何かがうねっているのを感じる。

「みすばらしいのは仕方がないにしても、絶世がつかないまでもせめて美女だったのなら、私の愛は計り知れないというのに……何故

にこんな……」

もう一度レネスをとつくりと眺めた『ご主人様』は、顔を両手で覆い首を振った。

美女でなくて悪かったなとレネスは憎々しげに思ったのだが、ふと、そこで一つの考えが浮かんだ。（もしかして、この様子だとあたし必要ないんじゃない？）レネスの中に一筋の光が差しこんだ。

「ああ、もしや商売の神ビジレン様は私を試しておられるのか？みすばらしい商品でも私がどこまで愛せるかを！」

『ご主人様』の一人芝居はどうやら盛り上がりを見せてきたようである。すっかり自分の世界に入り込み、身振り手振りを交えひたすら喋っている。観客はナディンとレネスだけであるが、彼には顧客すら目に入っていないようだ。ちなみに、商売の神ビジレンとは、当然ながら商人街の人間が崇拜している神の名である。つまりこの『ご主人様』も商人なのだろうが、取り扱っている商品にはかなり問題がありそうだなとレネスは判断した。きっと悪いことばかり儲けているに違いないのにビジレンを崇拜しているなんて、おこがましいもいいところだ。ビジレンだってそんなあくどい商人なんかに恩恵を与えるはずかないとレネスは思った。

（それにしても、ここは主従揃って変な人間ばかりね）

女装変態誘拐犯の親玉は自己陶醉型変態紳士だ。変態主従と言ってもいいだろう。

終わることのない一人語りを一瞥すると、白けた顔で椅子に座って残っていた茶を飲んでいるナディンへと近づいた。さすがにオバちゃん喋りもこの状態では息をひそめているらしい。

「ねえ、あの様子からすると、あたしじゃお気に召さなかったようだから、帰ってもいいわよね」

一人語りの邪魔をしないように、コソコソとナディンに問えば、ナディンもあっさりと頷いた。

「そーかも。なーんか僕とっても無駄な労力使わされたみたい」

「仕方ないわね、この人に仕えちゃったのが運の尽きよ。じゃ、案

内してよ」

「はいはい。ついでに僕も長期休暇貰っちゃおうつと」

よっころしょと立ち上がったナディンについてドアへと向かう。

「そういえば耳栓部隊うまく言いくるめてよね」

「はいはい。君もなかなか人使い荒いね」

「あんたの面倒くさいご主人様よりマシでしょ」

「あー、だよ。あれ本当面倒くさい生き物なんだよね。自分の世界に入るとなかなか帰ってこないし、そうかと思うと悪口だけはしっかり聞こえてたり――」

ナディンがいつものオバちゃん状態の終わらない話を途中までしかけた時だった。スコーンという音と共にナディンの姿が消えた。「え？」

見ればナディンは床に沈み込んでいるではないか。何が起こったのかをレネスは測りかね、慌ててあたりを見回した。

すると、一体いつの間にこんなに近づいていたのか、そこには両手でステッキを握りしめた『ご主人様』が立っていたのだった。

（あれ？なんか似たような状況ついこの間も見たような）

レネスが茫然としながらそんなことを考えていると、目の前の紳士は何事もなかったかのように胸に手を当てて優雅に一礼した。

「ご挨拶がすっかり遅くなりまして、私バレン商会三代目当主のキヤンデロと申します。以後お見知りおきを、セイレーン殿」

「バ、バレン商会ですって!？」

レネスは国一番の豪商の当主を前に驚きを露わにした。まさか自分を売り物にしようとするのがそんな大きな商家だとは予想もしていないことだった。

- 20 - (後書き)

なんかどんどん変な人ばかり出てくるような・・・

「どうぞ」

レネスは目の前の紳士にお茶を差し出した。先程までの出がらしではなく、当然新たに入れたばかりお茶だ。

差し出された紳士は、早速茶器を手に取ると、優雅に香りを嗅いだ。

「うんうん、セイレーン殿は見た目通りこういう作業はとてもお上手ですね。茶葉の香りがとても素晴らしく出ていますね」

見た目通り茶が入れるのが上手いとは、暗に下女らしいと言っているのだろつ。

（誉められるのは嫌いじゃないけど、こういう誉められ方はムカつく……）

レネスは誉め言葉に対して何も返すことなく、自分の分の茶をぞんざいにテーブルへと置くと椅子に腰かけた。

「おや、何かお気に触りましたかな？」

「いいえ」

それはもう気に触りまくりのまくりではあるが、言ったところでこういう輩はそれを正すことはないだろう。苛立ちを紛らわすようにレネスは熱いお茶を喉に流し込んだ。

「ふむ、それなら良いのですが。何せセイレーン殿は私の大事な商品ですからね、これ以上商品価値が落ちないよう、是非心穏やかに過ごしていただきませんか」

（最初から商品価値なくて悪かったわね！）

どこまでも失礼極まりのないキャンデロに、いつその熱い茶をかけたらすつきりするだろうに。そう思ったレネスではあったが、今はそんなことより今後のことだと自分に言い聞かせるしかない。

「あのー、その商品って、なんであたしが商品になるんですか？」

静かにお茶を口に流し込んでいたキャンデロだったが、レネスの

その質問に目を瞠った。

まるで何を今更とでも言いたいような表情だ。

「これはこれは、セイレーン殿はご自分の価値をご存じありませんか？」

「殺したいと思ってる人はいるみたいですけど、売り物には向かないんじゃないかと」

「本当にそう思いますか？」

何やらキャンデロは面白そうな表情をすると、両肘をテーブルにつき手を組んだ。

「殺したい人間がいるということは、その人間を激しく欲しているということではありませんか？」

「欲する？」

「ええ、つまり欲する人がいるならば、それを商品にして売るのは商人として当然のことと思いませんか？」

「でも殺したいってことは、いらないうってことでしょうか？それなのにお金払ってまで買い求めるとは思えないんですけど」

「セイレーン殿は一つ忘れていきますね。その人間はすでに殺しを生業としている人物に金品を支払っているのですよ。それは買うことと変わらない。更にそれがなかなか手の届かない物だとするならば、どんな大金を払ってでも手に入れたくなるのが人の通というものではないですか」

「じゃあ、あたしはその人に買われれば即殺されるってことですか」

ここに連れてこられて、殺されなかったことに安堵した自分がいたのだが、最終的に抹殺されることが前提とは——一難去ってまた一難どころか、数難去らずに更に一難だとレネスは思った。どこまでもどこまでも最近は一難題続きだ。

（やっぱり小母さんの処に行くべきだったかも）

きつとスカリナはこうなることを見通していたのだろう。だからあんなに必死に一緒に行こうと言ってきたのだ。今更そんなことに気付いたってもう遅い。このままでは自分が売り物になるのはほぼ

間違いないだろう。そして殺されることも――。

「まあ、招待した中にはセイレーンの力を我が物にと考えている方もいらっしやいますから、大丈夫ですよ。当たり外れがあるなんて、まるで賭け事の様で面白いじゃないですか。はははははははは」

キャンデロはそれは楽しげに声をあげて笑った。

「人の命賭け事に使わないでくださいよ！」

「おっと、これは失礼。まあ、何はともあれ、セイレーン殿が売られるのは間違いない事実ですからね。精々良い買い手が見つかる様に祈っておいてくださいね」

「良い買い手って、殺されなくても利用されるのなら全然良くないじゃないですか」

そう易々と利用されるつもりなどないが、そうならばもうジンにも会えないし白砂亭のお客さん達とも会えない。楽しかった白砂亭での日々が走馬灯の様に浮かぶ。もっと親孝行すれば良かった。もっとお客さんたちといっぱい話をすれば良かった。もっと若様の話相手にもなってやれば良かった。

思い出しては目のあたりがジワリと熱くなる。泣いたら負けだとは思っても今回は止められそうにない。泣き顔を見られないようにレネスは俯くしかなかった。

そんなレネスにキャンデロは思いもかけない言葉を投げかけた。

「何を言っているんですか、何事も命あつての物種ですよ。うまく利用しようとする人を買われたのなら、逆に利用してやればいいだけですよ」

まるでレネスを励ますかのような言葉だ。あまりにしょんぼりしたレネスを見てさすがの悪徳商人も気の毒に思ったのだろうか。

「利用ったって、そんな器用なこと出来ませんよ。なんたって誰も認める不器用者なんですから」

流れて落ちそうな鼻水をずるっとすすったレネスは、何か鼻をかむものはなかったかと自分の衣服を探った。残念ながらどこかに置いてきてしまったようだ。レネスが持っていたのはスカリナがくれ

た小袋だけだ。

すると目の前にキレイな刺繍の施され糊のきいた手巾ハンカチが差し出された。やはりキャンデロはレネスに多少は同情してくれているらしい。レネスはありがたく受け取ると思い切り鼻をかんで顔を上げた。

「ありがとうございます」

「そ、それは捨ててくれて構わないですからね」

「え、もったいないですよ」

「いや、私にはそのような物は売るほどありますから、ご心配なく。なんなら貰っていただけでも構いませんよ」

「そうですか？ じゃ、ありがたく頂きます」

後で洗って干せばまだまだ使えると、レネスは丁寧畳んでスカートのポケットへと入れた。スカリナから貰った小袋とは反対側だ。折角スカリナがくれたものを自分の鼻水で汚したくはない。

（ん？ 伯母さんがくれた小袋？）

ふと、その小袋をレネスのポケットに突っ込んだ時のスカリナの表情が思い浮かんだ。

あの時スカリナはやけに厳しい表情をしていなかっただろうか。

あの時はレネスと一緒にに行かないことに立腹しての表情だと勝手に思っていたのだが――。

（確か中身は――）

レネスはすっかりその小袋の存在を忘れていた。確か中に入っていたのは変な色の飴。あまりに不味そうなので食べることに躊躇していたのだが、あるいは――先を見通せるスカリナのこと、もしかすると見通した先に必要になる仕掛けが施してあるのかもしれない。レネスを心配したスカリナが仕掛けた飴の効能は一体何だろう。ほんの少し差し込んできた光に、レネスの頭は激しく回転し始めた。

「いたたたたた……」

背後で、うめき声を上げながら誰かが動いた気配を感じた。

「いたた、何も殴らなくてもいいじゃないのさ」

頭を擦りながらよろよろと立ちあがったのは、先ほどキャンデロに昏倒させられたナディンだ。相当痛かったのだろう、目じりには涙の粒が盛り上がっていたりする。姿だけ見れば男心をくすぐる可愛らしさだ。

「それ程強く殴ったつもりはありませんでしたが……まあ、それで少しは頭が良くなるかと思えば安いものではないですか。お金をかけなくても頭が良くなって良かったですね」

殴った方のキャンデロの方は全く悪いと思っではないようだ。

「お茶をもう一杯いただけますか」とレネスに茶器を差し出してきた。ナディンはあんまりな言い分に潤んだ瞳のままキャンデロを睨みつけている。遠まわしに馬鹿と言われているのだ、殴られたことといい面白いわけではないだろうとレネスは憐れみの目でナディンを眺めながら、新たなお湯を沸かす為に立ちあがった。お茶は沸きたてのお湯でなければ美味しくない。

「そのステッキと壁とで二度も頭をぶつけたんだよ！頭がよくなるどころか益々馬鹿になるっての！」

（あ、馬鹿ってところは否定しないんだ）

一瞬気が抜けて茶葉を落としそうになってしまった。

「それはすみませんでしたね。これ以上馬鹿になられては困りますからねえ」

「そうだよ、また仕事失敗したとしても、それはご主人様のせいだからね！」

あまりに情けない主従の会話にレネスは脱力するしかなかった。

「五十」

「五十三」

「五十五」

「六十」

「六十二」

次から次と競うように上がる声に、レネスは息をのみながら成り行きを見守っていた。一体誰が競り落とすのだろうという興味と、競り落とした人はどうする気なのだろうという恐怖がごちゃまぜになっ

「七十」

その声を境にぴたりと他の声が止まった。それ以上出す価値はないと他の人間は判断したということだろう。その場を一瞬静寂が支配した。が、静寂はすぐにやぶられた。

「七十、七十より上はありませんか？」

手に大きな鈴を持った進行人が会場へと視線を巡らせた。これ以上の高値が出ないようならば、ここで競りは終了する。身落とすことの無いよう進行人はとつくりと会場中を眺めた。誰も動く気配はないことを確認しているようだ。落札者となったのは青い覆面マスクを着けた若い紳士だ。レネスはぼんやりとその紳士を眺めた。彼は落札したあと一体どうする気にいるのだろうか。一見した感じではそこまで欲しいようにも思えないのだが。まるでどうでもいいという投げやりな雰囲気も見えるところからすると、彼はただ暇を持て余し、お遊びの一環としてこの競りに参加しているのかもしれないとレネスは勝手に思うことにした。そう思ったら思ったでなんだか妙な怒りが沸くのが不思議だ。

（折角大金出して競り落としたなら、もっと興奮した顔でもしなさいよね！）

「七十以上ありませんね」

レネスの妙な憤りを知ることのない進行人は、ついに終了を知らせるべく鈴を持った手に力を込めた――。

「七十五！」

ひととき大きな声が会場に響き渡った。会場にいるすべての人間の視線がそこに集中する。勿論その中にはレネスのものもある。

（あの人今着いたってこと？）

レネスの視線の先には、荒い息をつきながら立つ中年男性。でっぷりとした体をやたらガラガラした装飾の付いた衣装に包んでいる。（えーと、なーんか嫌な予感がするなあ）

どこかで見たことのある姿だとレネスは思った。顔は他の会場の人間と同覆面^{マスク}で隠れているものの、どうにもその輪郭には見覚えがある。だが、彼は今無期限の謹慎中のはずだ。いるはずがないとレネスは一瞬浮かんだ人物を打ち消した。

新たな人物の登場で競りはまた活気を取り戻した。人が欲しがるものは何故か欲しくなる人間の心理なのだろうか。先ほどとはまた違った勢いで次々と声が上がっていく。

「七十八」

「七十九」

「八十」

「八十五」

「九十」

またしても訪れる静寂。勿論最後の声は最後に現れた中年男性の物だ。

「九十出ました。これ以上はありませんか？」

「九十五」

まるで先ほど現れた小太りの男を邪魔するように若い男性の声が響いた。一度落札間際まで価格を出した青い覆面^{マスク}の紳士だ。会場がざわりとどよめいた。

「なんじゃと！ならば我は百じゃ百！」

会場のざわめきが更に大きくなる。

「百出ました。百以上ありますか？」

「百五十」

進行人の問いかけに、すぐさま若い紳士が反応した。

すでに他の人間はこの競りから降りたようだ。誰もがこの競りの成り行きをただ見守っている。

「な！我の邪魔をするか！二百じゃ」

「二百五十」

「二、二百八十じゃ！」

「三百五十」

両者譲らず、価格は最初の上げ幅よりも大きな幅で上昇を続ける。
「くうう！こうなったら五百じゃ！」

小太りの男の大きな声がまたしても会場に響き渡った。もうこれ以上は譲れないという気迫がその男には漲っている。覆面マスクに隠れることのない大きな鼻はこれでもかというくらいに膨らんでいる。そんな気迫が見て取れたのだろう、つい先ほどまで競っていた相手は小太りの男へと優雅に一礼をし、その競りから降りた。

「では金貨五百枚にて、虹の金糸は落札されました」

会場の隅からその様子を見ていたレネスは呆れたため息をついた。ここにいる人たちは全員どうかしてる。虹の金糸などと仰々しい名前はついてるが、あれはどう見てもただのカツラだ。落札されたそのカツラは人の頭部を模した台に乗せられたまま舞台から下がっていく。これから丁寧に包まれて手渡されるのだろう。

（あんな妙ちきりんなカツラになんで金貨五百枚……）

貴族は何故にそんなにカツラに執着するのだろうかとレネスは不思議でならなかった。それも、先ほどの赤やら黄色やら緑やらが混じった色合いのそのカツラは虹色というには毒々しすぎて、気持ち悪いだけの物で――。そんな怪しげな物によくもまあ五百枚もの金貨を投入出来るものである。まさかあんな不気味な物頭につけて自

慢する気でいるのだろうか。「あはは、うふふ」と微笑み合う紳士淑女恐ろしい光景を想像してレネスは体を震わせた。絶対そんなの見たら普通の人は笑いの発作に悶絶するはずだ。金持ちは何を考えてるかさっぱりわからない。だいたいにして、金貨五百枚とはどういった価値のお金だろうか。レネスが見たことあるのは精々銀貨までだ。それだとして若様が来るようになるまで見たことなどなかった。（そういえば、前にお客さんの誰かが、金貨一枚もあれば俺たちは半年暮らせるなーんてこと言ってたわよね）

そんなことを言った客が誰だったかは覚えてないが、なんとなくにその言葉がレネスの脳裏に浮かんた。

（一年で金貨二枚使って生活するとして、五百枚は何年だ？——やばい、あたしの人生全部使っても使い切れない）

そんなくだらないことを考えたレネスは打ち消すように首を振った。それにしても、あの落札者、一度はそんなはずはないと思ったのだが、あそこまでカツラに見せた執着を考えるとヒキガエル本人に間違いなさそうだ。確か財産も没収されていたはずなのに、よくあそこまでの金を準備出来たものだ。

（誰か協力者がいるってこと？）

レネスが考えても仕方ないのだが、明らかにおかしいだろう、領地も財産も没収され謹慎処分になっている人間が、たかだかカツラに金貨五百枚もの大枚をはたくのだ。

（やっぱヘレンへの愛のなせる技？）

そこまで考えたレネスは危うく吹き出しそうになり、口を手で塞いだ。

「何ー？一人で思い出し笑い？そんな暇はもうないよ。間もなく君の競りが始まるんだからね」

いつの間にか傍にはナディンがやってきていた。今日も女官姿が可愛い。

「ねえ、まもなくあなたともお別れだから聞くけど、なんでいつも女装してるの？」

レネスはついに今まで聞きたくとも聞けなかったことを口にした。レネスが誰かに競り落とされれば、殺されるにしろ利用されるにしろ、もうナディンと会うことはないだろう。心残りとはまではいえないが、疑問くらいは口にしても許されるだろう。

「あれ？随分今更だねー。もっと早くに聞かれるかと思ってたー」

ナディンは軽く目を瞬いた。

「なんだ、聞いても良かったの？」

「うん。別に聞かれたところで痛くも痒くもないしー。あんまり何も興味なさそうだったから、もう死ぬのを覚悟してるのかと思うっちゃった」

「まさか」

むしろ生きるために目下色々と検討中だ。

「だよー。じゃ答えるけど、ご主人様ねー、むさ苦しいもの嫌いな」

「は？」

「だから基本的には女しかここの屋敷にいないわけよ。でも僕のこととは必要だしってことで、この屋敷にいる時は目ざわりにならないよう女装しろってさ」

ナディンは可愛らしくスカートの両端を摘み上げた。姿に似合わないすね毛が顔を出した。

「は？なにそれ。つまりあんたの趣味ではないってこと？」

「うん。僕は女装趣味はないよ。たんに普通の女より可愛いから似合っちゃっただけ。可愛いって罪だよー。あ、もしかしたらご主人様僕が可愛すぎるからこの恰好させてるのかも。ああでもな……」

……

相変わらずよく喋る男である。まだまだ話は続いているが、すでにレネスの頭の中には入ってきていなかった。

（絶対趣味も入ってるって）

喋り続けているナディンの髭の痕もないつるりとした顔を見てそう思った。

「さーて、お喋りはこれくらいにして、そろそろ君の出番だよ。あつ！ちよつと折角僕が少しは見せるようにしてあげたっていうのに、早くもぐちゃぐちゃじゃないのさ、その髪！」

「へ？」

「へ？じゃないよ！もう時間ないのに！おとなしく座ってなかったね！まったくもう！」

背後に回ったナデインはどこから取り出した櫛でレネスの髪をわしわしと整え始めた。

「別にいいわよ、ぐちゃぐちゃでも。殺そうとしてる人にとってあたしの姿は関係ないんだから」

「わかんないよ、本当に純粹にセイレーンが欲しいだけの人もいるかもしれないじゃないのさ」

「よく言うわ。ナデインだって所詮殺し屋じゃないのよ」

いきなり髪の一部がぐいっとひっぱられた。

「まあね。でも僕ご主人様の命令でしか殺せないから、とりあえずは君のことは殺さないよ」

「だったら、目の前でナイフ舐めって威嚇するのやめなさいよね」

「えー、別に威嚇してるつもりないんだけど。たんにナイフ舐めてるだけで」

「なんで威嚇でもないのにナイフ舐める必要があるのよ！」

「え、美味しいから」

「いやー変態。ナイフについた血を舐めてるってこと？」

「うっん、あれについての蜂蜜。はい、出来た」

自分では鏡がないからわからないが、ナデイン的に納得できる髪型に修正出来たらしい。

「ありがと。は？蜂蜜？」

「僕甘いもの近くにないとイライラして、本当に無差別に殺したくなっちゃうんだよね。だからそれを止めるための薬だって。病気だからいつも蜂蜜舐めとけばいいらしいよ」

「それって、病気なの……」

「ご主人様は頭の悪い奴がなる病氣って言ってたけど」

なんて適当な……と思ったものの、レネスはそれについては深く追求しないことにした。蜂蜜さえ舐めておけば人畜無害ならそれに越したことはない。

「そういえば、そのご主人様の姿が全然見えないけど」

「えー、いるじゃん、さっきから目立ちっぱなしじゃないのさ」

「え？もしかして進行役の人？」

進行役も当然覆面マスクをしているだけに、確かに顔はわからないのだが――、声的にも年齢的にも違う気がする。

「違うよー、さっきから競りに参加してるじゃないのさ。ほらあの青い覆面マスクの男」

それは先ほどまで率先して競りに参加していた若い男性ではないだろうか。でもなんだかこの前会った時と雰囲気が違う。というかこの前よりも若く見えるような気がする。まあ顔半分は覆われてい

るからよく見えはしないが。
「ああ、ご主人様いつもはつけ髭つけてるんだ。でも今日はつけてないからちよつと若く見えるかもね」

「なんで……、主催者が参加してるのよ」

「えー、勿論値を釣り上げるために決まってるじゃない」

「勿論って、それってインチキじゃないの」

「そんなもんだよ、世の中なんて。何事も裏があるのさ」

ナデインは可愛い姿に似合わないやらしい笑みを浮かべた。

- 22 - (後書き)

次はいよいよ(?) セイレーンのオークションが……始まるのかなあ?

一度明りを消された舞台に、一つ一つ光が灯りはじめた。

光の数が増えるにつれ、舞台に置かれた次なる商品が参加者に晒されていく。その様子を会場中の誰もが息をのんで見つめた。

光が交わる中心にあるのは――金色の装飾が施された椅子に座る一人の少女の姿。言わずと知れた今回の目玉商品である生きたセイレーンの姿だった。神々しさを出す為だろうか、神話などで女神などが身につけていそうな白い衣を身にまとい、長い髪をゆるやかに垂らしている。瞼はぴたりと閉じられその瞳を確認することは出来ず、ぐったりと椅子の背凭れに体を預けていた。

「さて、それでは皆様大変お待たせ致しました。これより本日の一番の目玉である生きたセイレーンの競りを行いたいと思います」

全員の視線がセイレーンに集中する中、進行人が厳かに商品の説明を始めた。

「本日ご参加の方々は全てご承知とは思いますが、一応のご紹介をさせていただきます。こちらにあります商品、かの建国王につき従った伝説のセイレーンの末裔であり、人間界に生息する唯一のセイレーンでございます。大変危険なものでございますので、現在は少々眠らせておりますが、伝説のセイレーン同様、数々の怪しい術を駆使することが出来ます。落札しました折には取扱いには存分に注意をなさることをお勧めします。伝説のセイレーンの末裔とは申しまして、現在はただの市井暮らしでございますので、品位も美貌も持ち合わせておりませんので、そちらについては許容して頂ける方のみ参加して頂きたいと思います」

一通りの説明が終り、進行人は参加者へと視線を巡らせた。もし質問事項があるとすれば今この時が最後の機会だ。

一人の紳士が静かに手を挙げた。

「なにか、ご質問ですか？」

「うむ、そのセイレーンだが、目を覚ますのは何時頃だ？移動中に目を覚まされて暴れられては困る故」

「さて、その辺りつきましてはセイレーン付きの侍女に任せておりましたので、私にはわかりかねますが、近くで見た限りでは深く眠っているようですので、しばらくは大丈夫かと存じます」

「そうか。一応の処置として眠らせる薬もつけてもらえるのか」

「ええ、その程度でしたら特に問題ございません」

「わかった」

質問者が納得したのを確認すると、進行人はまたしても全体へ視線を巡らせた。これ以上の質問がないのならばいよいよ競りの開始となる。

すると、今度は一人の婦人が手袋のついた手をそつと挙げた。

「その小娘、本当に間違いなくセイレーンの末裔なんですか？どう見てもただのみすばらしい小娘としか私の目には映らないのですけれど」

「そちらについては間違いございません。わが当主直々に商品の手に配に動いた物でございます。間違いがあろうはずもございません」

「まあ、キャンデロ様が直々にですの。あの方の目利きでしたら間違いございませんわね」

ほほほと笑いながら羽根の付いた扇を上品に口元に当てた。キャンデロ直々と聞いて納得したようだ。その様子を確認した進行人がいよいよ競りの開始を宣言しようと鈴を手にした時、別の一人の紳士が手も挙げることもせず突然口を挟んできたではないか。

「だが、その娘が伝説のセイレーンの末裔だという証拠はどこにある？伝説のセイレーンは海に還ったはずだろう？建国王を見捨てて自分だけ楽な場所へと還ったと聞く、そんな恩知らずの末裔が何故まだこの国にいるというのだ？」

この紳士は今回の競りの主旨を知らずに参加したのだろうか。何よりの目玉商品であるセイレーンの存在自体を否定するとは。と誰もがそう思った時だった。

「この娘は間違いなくセイレーン様じゃ！この我が言うのだから間違いなどない。証拠がないならば我こそがその証人になるうではないか！」

先ほど虹色の金糸を落札した紳士だった。憤りも露わにダンと立ち上がった。会場の中でその人間がどこの誰かということを感じてない者はいないだろう。

「あなたが証人になると？ははは、これはおかしい。まさかその娘が本当のセイレーンであるというならば、魅惑の術でもかけられましたかな？様などとおっしゃっていましたが」

「うぬ、そうじゃ、その通りじゃ！だからこそ我は今日はセイレーン様をお助けするためにここにまかり越したのじゃ！」

「その割には、カツラに随分つき込んでいらつしゃいましたが」

「うぬっ！セイレーン様は我にとってカツラの次に大事な存在なのじゃ！」

「それはそれは、まあ良いでしょう。あなた様のそのカツラより大事という必死さに免じまして、この娘がセイレーンと信じることにしましょう。邪魔しましたな、競りを開始してください」

その言葉に会場中から失笑が漏れた。カツラの次に大事といわれたセイレーンへの憐れみと、カツラへの執着ぶりを窺わせるその必死さに笑わずにいられたものはいるだろうか。いやいえないと言っていいだろう。

「それでは、ご質問も以上のようにございますので、開始したいと思います」

進行役がカランコロンと鈴を鳴らした。

「では、大変貴重な商品でございますので、五百より開始させていただきます」

「五百五十」

「六百」

「七百」

「七百十……」

他の競りの時と同様、いやそれ以上の早さでどんどん値が上がっていく。

「千」

「千五十」

会場中の誰もが降りることはせず喰らいついてくる。そんな中、青い覆面マスクの男は時々適当に競りに混ざりながらもほくそ笑んでいた。当初の予定よりかなり金額が上がっているからだ。

（大公のおかげでたんまり儲けさせてもらえそうですね）

このまま順調に値が上がれば、ここでもいつも行われる競売の中で一番の高値の取引になることだろう。我ながらよい商品を確保できたものだとして一人頷いた。

「二千！……いや、ちょっと待ってくれ、なんだかセイレーンの様子がおかしいか？」

突然競りの最中にそんな言葉が聞こえ、「おや？」と思ったキャンデロはひじ掛けにしていた頬杖を外した。会場中が一人の紳士の言葉につられてセイレーンへと視線を移した。今までずっと進行人とその隣に出ている数字しか見ていなかったたのでセイレーンの様子など誰も全く気にしていなかったからだ。

「んまあ、あれはなんですよ！血ではございませんこと？」

「なんだ！生きているんじゃないのか？」

「どうということだ？やけに顔も青白いではないか。死んでいるのではないのか！」

「せせせせせ、セイレーン様！どうしたのですじゃ！」

突然のことに立ちあがってざわめき始める参加者たちの間を縫って、キャンデロはやっとセイレーンの姿を目にすることに成功した。キャンデロは目に入った情景に驚き言葉を失った。

目の前にいるセイレーンは、ぐったりと椅子の背に凭れかかったまま、口から次々と血を溢れさせていた。とどまることのない血は、身に着けていた白い衣どころか床までもを赤く染めて行く。それに

反して顔の色はどんどん赤みを失っていた。このままでは出血多量で死んでしまうことは間違いないと誰もがそう思った。

キャンデロは一体何が起こったのかを確認するべく陰に隠れているナデインを慌てて探した。

カーテンの隙間から顔を出したナデインをすぐさま見つけることが出来た。別段驚いた様子もなくニヤニヤと会場の騒ぎを見つめている。この会場の中であの侍女服はやけに目立つので一度見つければ見失うことはないだろう。キャンデロは周りの様子をそっと眺め回した。誰もが驚き慌てたように進行人へと食ってかかっておりキャンデロの行動に目を止めそうな者はいない。それを確認すると素早くナデインの方へと向かった。ナデインにはじっくり事のあらましを聞かなければならない。

「すごい血だねー。キレイだねー。いいねーあの血の海で泳ぎたいなー僕」

「ナデイン君、君まさか……」

「え、ちよっとー違うよ、犯人僕じゃないよー。まあ間接的には僕なのかもしれないけど」

「その間接的に一体何をやらかしてくれちゃったんですか、君は！折角の私の儲け話を不意にしてくれるなんて、どういうことなんですか」

「それには深い理由が……あるわけないんだけど。まあそのちよつとしたことがあって、で、ああなつて」

「だから、そのちよつとしたことが何かを聞いてるんですよ！」

「まあまあ、それよりご主人様、騒ぎが始まってすぐ二人の男が会場出たの気付いてる？」

「そんなことはどうでもいいですよ！」

「いいの？セイレーン死んで喜ぶ人間が帰ったんだよ。今日の競売一番の目的そいつらあぶりだすことだったでしょうに」

「そつはいつでもですね！」

「金もつけ走つたのバレたらあの人に怒られちゃうんじゃないかな

「
うっ」

ナデインのいうところの「あの人」の顔を思い浮かべたキャンデロは、現在のこの状況を考えると怒られるどころか殺されることになりそうだと身震いをした。

「レシー、レシーってば、いつまで寝てるの？起きなさい」

まどろみの中、母であるマリンの声が聞こえる。いつもの優しい声だ。朝食の準備が出来たのだろう。いつもマリンはジンと一緒に早朝から起きているのだが、レネスのことはゆっくり眠らせてくれていた。そんなマリンが起こしに来るのだ、もう十分に眠ったに違いない。でもレネスとしてはまだまだ夢の中にたゆたっていたい。もう少しもう少しと心の中で呟きながら目を開けることはしないでした。

「ちよつと、レシーってば、何がもう少しなの。そんな悠長なこと言ってる場合じゃないのよ」

悠長と言われようが何しようが、今のこの気持ちよさをあつさり手放すつもりなどない。ああ、でももし今日の朝食にレネスの大好きな発酵乳ヨーグルトを付けてくれるというならば考えなくもない。

「え？発酵乳ヨーグルトつけるって？何言ってるの、そんな物ないわよ」

それならば起きる理由はなくなつたとばかりにレネスはそのままマリンのいる方とは反対側へと寝がえりを打った。

「もうー、こんなに言っても起きないんだったらー！」

その言葉にレネスは「やばい」とは思ったものの、目が開かない。そして——「すぼっ！」という音と共にマリンの楽しげな声が聞こえてきた。

「鼻の穴に指突っ込んでやうぞ！」

「……ふがあ！」

レネスが慌てて飛び起きると、目の前には手拭いで指を拭うマリンの姿。

「母さん、せめて指入れる前に言ってほしいっていつも言ってるじゃないの」

「何言ってるのよ、先に言ったらあんた蝸牛かたつむりみたいに丸まって、あ

たしの攻撃防ぐじゃないの」

「そりや当たり前でしょう、普通襲われると判ってたら防御するよ」
「でしょー、だから先に突っ込むわけよ」

なんだかやけに得意満面なのは気のせいだろうか。そういえばマリンはこういう人だったとレネスは改めて納得した。

（あれ？こういう人だったって、なんで今更のように感じるんだろう）

マリンがいるのはいつものことのはずなのに、何故かどこか懐かしい気がする自分が不思議だ。

「ねえ、母さん、縮んだ？」

おかしいことはまだあった。お互い座っているはずなのに、何故かマリンの目線が同じ位置にあるのだ。いつもなら少し見上げていたはずの母の顔が何故こうも近いのだろう。

「んまつ失礼ね、この子は。人を年寄りみたいに！」

「だ、だって、母さんいつももつと上に顔があつたよ」

「ああ、そういうこと」

レネスの言葉に納得したらしいマリンはウンウンと頷くとレネスの手を取った。

「ほーら、レシーよく見てごらんー、手の大きさも一緒だよ」

レネスの手とマリンの掌が重なった。いつもマリンに包み込んでもらっていた手は逆にマリンを包み込めるほどで――。

「かかかかか、母さん、やっぱり縮んだ！もしくはあたしが巨大化！まさか魔物化が進んだとか！」

その言葉にマリンは深々と息を吐いた。

「はあ、大人に近くなってもあんたの天然っぷりは健在なのね。子供だからボケたこと言ってたわけじゃなかったのね」

「ええええええ、あたしもしや頭おかしくなる病氣！」

あわあわとレネスは自分の頭を抱え込んだ。ボケる病氣ってなんだったけ。ゼム爺でも治せるんだろうか。それとも若様に言っただんか薬分けてもらえばいいんだっけ？そんなことが次々と頭の中を駆

け巡った。

「ゼム爺まだ生きてたの」

マリンの質問にレネスは首を傾けた。もしかしてまた口に出していただけるか。

「出てたわよ。しつかりと。で、ゼム爺は現役なの？」

「うん、よばよばしてるけど、まだ口の悪さは健在だよ」

「ふうん、じゃ若様って誰？」

「へ？若様？あたしそんなこと言ってた？」

「言ってたわよ。薬分けてもらうってことはお金持ちの人？」

「あー、うん、なんだっけ筆頭公爵だかなんだかだからお金はそれこそ湯水のようにあると思うよ」

「へええ、レシーなんでそんな大物と知り合いなのよ」

「え、なんでって店のお客さんじゃないの」

母さんだって知ってるはずでしょと言いかけたレネスは口を閉じた。どうしてだろう、マリンと若様が話をしている光景が全く思い浮かばないのだ。若様はいつも一人かジンと話をしている……いや一人じゃない、いつも自分に向かって話をしているから一人の光景が多いのだ。笑った顔、困った顔、そして——イタズラを思いついた悪魔の顔。

「うわああああ、また何か仕組まれてる？」

何を仕組まれているのかもわからないが、なんだか嫌な予感があったレネスは慌てて辺りを見回した。どこかに隠れて笑いながらこっそり様子を窺っている若様がいそうな気がしたのだ。——

が、何度見回しても、そこにレネスの想像していた光景は無かった。そこにはただひたすら——花、——花、——花。

「え？ここって花畑？」

「そうよ……。ここには花しかないのよ。どこまで行っても花畑だけ」

微笑むマリンの後ろには白い花、右側を見れば桃色の花、レネスの目の前にあるのは黄色い花。そこは色に溢れた空間だった。春の

花、夏の花、秋の花、冬の花、全ての季節を彩る花々が辺りを彩る。

「だって、今冬じゃ……」

「そう、レネスの世界は冬なのね。でもね、母さんがいるところはどこまで行っても花しかないの」

「なんで……」

「レネスのおバカさん、もう本当は気付いているんでしょ、ここがどこかってことは」

マリンの言葉にレネスは自分の顔がくしゃりと歪むのがわかった。優しく笑う母の顔が切ない。

「だって、だって母さん」

「やだ、泣かないでよ。あんたの涙ならもう一杯貰ったわ。知ってる？ここの花、何で生きていられるかって。これはね、亡くなった人を偲ぶ人達の涙が養分になっているのよ。あんたの涙もジンの涙も、そして……姉さんの涙もね。これが枯れた時……あたしもここからいなくなる」

そう言ってマリンは辺りを見回した。枯れることなどなさそうに花達は生き生きと辺りを彩っている。

「やだ、やだよ、母さん」

一度失った人を改めてまた失う恐怖に涙が止まることなく滴り落ちる。

「ばかね、もうすでに死んだ人を思って泣くのは止めなさい。あんたがいつまでも泣いてると、あたしは新たな人生歩めないじゃないのよ。もうここの養分は十分よ。今だって何時枯れるか全く期待出来ないのに、更に伸ばしてくれても困るわよ」

笑いながらマリンはレネスの顔をぐいぐい拭う。ジンの力強い拭い方とは違う優しい手にレネスは目を閉じた。

「そ・れ・よ・り、あんたは何故ここにいるのでしょーか！」

先程までのしんみりした空気を投げ捨てて、マリンの突然の質問にレネスは目を瞬かせた。

「へ？」

「へ？じゃないわよ、ここがどこだか分かったのなら、本来ここはあんたのいる場所じゃないってこともわかるわよね」

「ああ、まあ、薄々は……」

「薄々とか暢気なこと言ってる場合じゃない！」

「はあ……」

マリンの気合の入った言葉に今一つついていけないレネスは気の抜けた相槌を続けるしかなかった。

「んもう！そんなところはすっかりジンに似てるわね。もう少しシヤキツとしなさい、シヤキツと！」

この花に囲まれた状態で緊張感を持てという方が無理ではないだろうか、とレネスは思ったものの言い返さずにおいた。そんなマリンはやはりスカリナにどこか似てると思いつながら。

「えーと、で、なんでこんなところに来る羽目に陥ったのかなー、あたし」

「それはこっちが聞きたいわよ！酒飲んで暢気に昼寝してたら、いきなりあんたが空から降ってくるんだもの！何かと思ったじゃないのよ！」

（ここつて、花だけじゃなく酒もあるんだ）

それなら是非一杯くらい飲ませて欲しいものだ。と、レネスが思った時だった、二人の目の前に突然樽とグラスが現れた。

「え、樽ごと！」

「んもう！大事な話してるっていうのに、レネスったらお酒飲みたいたか思ってたわね！まったくもう、こうなったら飲むしかないじゃないのよ！はい、グラスよこして！」

そうしてマリンは慣れた手つきで樽から直にグラスに注ぎ始めた。

「じゃ、飲みながら聞かせて頂戴」

「う、うん」

死後の世界って随分ゆるい所なのねと思いながら、レネスはグラスへと口をつけた。

「母さん、つまみはないの？」

「何贅沢言ってるの、酒は酒で味わうもんよ！うまつ！」

食べるものも何もない状態で、ガブガブという音が聞こえそうな程勢いよくグラスの酒を飲み干したマリンは、新たな酒を樽から注いでいる。さすがスカリナと姉妹だけある。いやスカリナより豪快な飲みっぷりかもしれない。

（もしかして、母さんの早死につて酒の飲みすぎで体壊した？）

自分はそうならないように気をつけよう、と今更ながら母を見つめて自戒するレネスだった。

- 24 - (後書き)

なんとなしに勝手な死後の世界を作り上げてしまいました。

ちなみに輪廻転生信じちゃってるもので、それに沿った流れになりました。

ほら、よくさ、いつまでも悲しむ人いると成仏出来ないって言うじゃないですか、だからそれをちょっと自分なりアレンジしてしまいました。

不快感を持つ方いたらごめんなさい。

勢いよく次々と酒を飲み干すマリンを見ながら、レネスはちみちみと天上の酒を味わっていた。

（つて、ここ天上でいいのよね？）

亡くなった人は天上の世界へと登ると確か昔マリンが教えてくれていたのだから、間違いはないはずだ。

「で、レシー、なんでこんなところに来る羽目になったの？まだあんたは来るべき時期じゃないはずよ」

新たな酒を注ぎながらマリンはそう言い切った。来るべき時ではないらしい。なのに来てしまっている。つまりそれはどういうことなのだろう。

「ねえ、母さん、ここつてさ亡くなった人が来る場所なのよね？」

「あたしがいるんだから、そうでしょうね」

「じゃ、あたし死んだってことだよな？」

「うーん、それなのよ。あたしも最初そう思ってたんだけど……
……なんだろう、ちょっと違うような……」

マリン自身もなにか腑に落ちないことがあるらしい。グラスを持ったまま首を傾けた。

「何が違うの？」

「うーん、うーん。あんたここ来て結構寝てたのよね。結構つていうかかなり。子供の頃と全く同じ顔してぐーぐー寝るわ寝るわ。叩いても起きないし、鼻塞いでも起きないし」

「子供の頃と同じ顔つて、同一人物なんだからそんなに寝てる顔変わるわけじゃないの」

「でもねえ、年頃なんだから、もう少ししつとりした寝顔してもいいじゃないのよ。女性の色香を感じさせる寝顔っていうの？」

「……母さん、実の娘の色香求めてどうするのよ」

「求めてるわけじゃないけど、なーんか娘がまるっきり育ってない

のを発見して嬉しいような悲しいような。やっぱり男親だけだとダメなのかしらねえ」

グラスを手にしていない手を頬に当て、ほうつと息を吐いている。「なにそれ。父さんはダメじゃないわよ。ちゃんと一生懸命あたしを育ててくれたわよ」

「それはそれ、これはこれ。ねえレネス好きな人いないの？」

「す、好きな人？」

「うん、だってあんたいくつになったの？」

「え、十八」

「じゃーそろそろ恋の一つや二つ経験した？」

「ええええ？」

突然次から次と襲い来るマリンの質問にレネスは慌てた。なんで今こんなことを聞かれているのかさっぱりわからない。なんで寝顔の話から恋の話に転換するだ？とレネスは混乱する。

「あー、その顔は確実に恋とは無縁のところになっていたわね。そうだと思っただ。全くジンったらレネスを一生嫁にやらないとか考えてるわけじゃないわよね」

「よよよ、嫁？」

なんだろう、最近やたら「恋」だの「嫁」だのと言葉を聞くが、みんな愛の女神ラヴィにでも憑かれてしまったのだろうか。

「レシー、なんで女神が憑くのよ。相変わらず妙な考えする子ねえ」

「そそそそそそ、そんなことより！話を戻そうよ母さん！あたしつまり死んだわけじゃないってことなの？」

いつものごとくのただ漏れ具合で、言葉の使い方だ恥を聞いたレネスはその恥をかき消すかのように話を強引に戻すことにした。

「えー、話戻すの？つまんなあ。せつかく数年ぶりに会えた娘と恋話出来ると思ったのに」

「いいから！母さんあたし起こす時『悠長なことしてる暇ない』って言うてたじゃないの！」

「そうだった？」

惚けた顔でマリンはぐびくびと酒を煽った。最初から勢いよく飲んでる割には全然酔ってはいないようだ。

「そうだよ。寝ぼけててもちゃんとその言葉は聞いたもん！で、どうなの？」

「それがねえ、もしかすると多少悠長にしても大丈夫そんな感じがする」

「は？なにそれ」

「あたしこっち来た時ね、最初やっぱり母さんと会ったのよ。ああ、あんたのお祖母ちゃんよ。で、久しぶりなもんで積もる話もあるじゃない。話始めた途端少し先にドアが現れたのよ。多分あたしはそのドアの向こうに行かなきゃならないんだなってことはすぐわかったんだけど。まだ全然話足りないから放置してずっと喋ってたらさ、ドアのやつ、どんどんどんどん近付いてきて果ては母さんとあたしの間に現れてさ。いやあ、ムカついたたらなかったわ。死人の間なんてたつぷりあるんだからあんまり急かさないでよってドアに蹴り入れたら、そのままドアが開いてここに到着。以後母さんとは会えないし、一人で暇だし。花は枯れないし。酒でも飲むしかないかあって思ったらまんまと酒は出るし」

「はあ……」

「なんだか、実の母がナデインに見えてきたとレネスは思った。マリンはこんなに喋る人間だっただろうか。ジンと違って喋るには喋るが、ここまでだっただろうか。」

「だあって！ずっと一人なのよ、誰とも喋ることもないし。久しぶりに人が現れたら喋りたいに決まってるじゃないの！それもこれもあの馬鹿ドアのせい……ああ、今思い出しても腹の立つ」

腹立ち紛れにマリンはまたしても酒を煽った。

「ところで、そのナデインって誰？男？」

「ああ、まあ一応男なんだろうけど、いつも女装してるから男と呼んでいいのかどうか……って母さん！話をまたすり替えないでよ！」

「ちっ、ひっかかからなかったか。つまんない」

「で、その長い話のどこに重大箇所が隠れてたの？」

「うわあ、レシーったら、天然のくせに人のことには容赦ないわねえ。長い話とか言われたら母さん傷つくわあ」

「母さんそのくらいで傷ついたの見たことないもん」

「ボケてるくせに、やけに現実的な子になっちゃったわねえ。ジンったらどんな育て方したのかしら」

「もう、母さんったら、肝心の話はどうなったのってば！」

「はいはい、わかったわよ。レシー冷たいわあ。つまりは、こういうことよ。あたしが死んだ時すぐ現れたドアが現れないのよ。つまり、あんたまだ死んでないわよ」

「ということとは？」

「仮死状態っていうの？時間がくれば元の世界に戻るわ。それで仮死状態になるような心当たりなんかある？」

「心当たりっていうか……あれなのかなあ、やっぱり」

「あれ？」

レシーはここに来る前に自分がいた場所を思い浮かべた。

マスク
覆面をした人間が集う会場の端っこで、ナディンにいよいよ次は君の番だと言われ――。

「あたしの番って、どうすればいいの？合図があつたらあそこまで歩いていけばいいわけ？」

レネスはそうして先程まで「虹の金糸」が置かれていた場所を指差した。

「まさか。それじゃ神秘性が薄れるじゃないのさ。何事にも脚色が必要だよ、脚色」

小馬鹿にしたようにナディンは笑った。なんだかこの笑いは若様に通じる嫌な笑いだ。自他共に認める馬鹿ナディンにそんな顔をされるのは非常に不愉快だ。

「じゃ、どうすればいいの？」

不機嫌さを隠すことなくレネスは腕を組んでナディンを睨みつけ

た。

「おー、こわっ。大丈夫心配することはないよ。僕がちゃんとして、連れて行ってあげるからさー」

するとナデインは背中を向けてレネスから離れた。どうやら何かを取りに行ったようだと思ったレネスはこっそりと衣装の隙間に隠していた革袋を取り出した。スカリナから貰った例の飴の入った袋だ。

袋を開けたレネスは中身を確認した。中には色とりどりの飴が入っている。緑・青・黒・赤……どれがどういう作用をもたらすかなどの説明など一切ないが、何故かレネスには大よその見当がついていた。きっと緑は歌えなくなった時の為の喉飴。青は水の力の増幅用、黒は魅了の力の増幅用、そして赤は――。

「あー、何自分だけ飴食べるつもりしてるのさ。僕にも頂戴よ」

「だ、ダメ！これはダメ！」

「うわっ、ケチ！ケチだね君。飴の一つくらいいいじゃないのさ！あ、それも僕の大好きな赤い色の飴がある、それ頂戴よ！」

甘いものがないとイラつくと言っていたナデインだけに、甘い物を見て目の色が変わったようだ。先程までの穏やかさを投げ捨てて今にもレネスにとびかかりそうな勢いだ。

「だからこれはダメだってば！」

「頂戴ってば！」

レネスが飴を袋に戻そうとした時、ナデインの手が伸びてきた。避けようと思ったその瞬間、ナデインの指先にはじかれた赤い飴は宙を舞い……驚き見上げたレネスの口に……すぽり。

（よりによって、一番危険な飴が……）

そこでレネスの思考はぱったりと途切れた。

- 25 - (後書き)

ちよつと時系列もいじってみました。うまく伝わるかなあ。下手な物書きが身の程知らずに時系列いじったので、ちよつと心配。

花々に囲まれた楽園のような場所で、久しぶりに会えた親子は向き合ってた。

再会を喜ぶでもなく、嘆くでもなく、ただ無言で向き合っている。娘はぼんやりと、母は――とても奇妙な顔をしていた。

しばらくして、母マリンが口を開いた。

「つまり、早い話が、姉さんの作った薬を飲んじやったってこと？」
マリンの言うところの「姉さん」とはスカリナのことであり、確かにレネスはスカリナの作ったものを口にはしたが「薬」は口にしていない。

「薬なんて飲んでないわよ、あれは飴だったもの」

レネスが断言すると、マリンは益々妙な顔をした。折角の美人も台無しな程の引きつったような歪んだような、なんともいえない妙な顔である。

「母さん、その顔さつきから変」

レネスのそんな突っ込みに、マリンは反抗するかのごとく益々顔を歪めた。眉と目の非対称さといい、鼻と口の歪み具合といい、まるで魔よけの人形の顔と一緒にだとレネスは思った。

「レシー、母さん言わなかったっけ？スカリナ伯母さんの薬はとっても危険だから口にしちゃいけないって」

勿論その言いつけは守っていたつもりだ。母が亡くなった後でも熱を上げたレネスに駆けつけたスカリナの手から渡された薬は全部こっそり隠しておいた。ゼム爺から貰った物だと聞いても念の為飲まずにおいたものだ。

「うん、だから薬じゃなくて飴だつてば」

「……………こんの、おバカ！薬だろうが飴だろうが、あの毒女から貰っちゃダメでしょーが！」

仮にもというかなんというか、自分の正真正銘の姉を捕まえて「

毒女」と言い切れるのはこの母だけに違いない。とレネスは引き気味に思った。

「だって、まさか食べられない物くれないでしょ」

幾分どころか大いに引きつり気味にレネスは反論を試みた。当然ながら声に張りはない。

「馬鹿レシー！姉さんはね、どんなに普通の材料使わせても毒を作る天才なのよ！なんで毒素の全くない物から毒を作るのかすんごい不思議だけど、その確率の高さと言ったら、百発百中なのよ！」

どんな普通の材料からでも毒を作れるということは、一体普段何を食べて生きてるんだろっ、あの人は。怒られながらも冷静にそんなことを考えてみた。

（何を作っても毒になるならとてもじゃないけど自炊なんて出来ないよね？）

果たしてそんな危険極まりない人間などいるのだろうか。自身の食事さえも毒になるような危険極まりない人がだ。

「甘いわ。实际いるのよ」

レネスの葛藤に返事をするようにマリンは重く頷いた。

「じゃ、伯母さん何食べて生きてるの？」

毒を食べて生きていけるはずもなく、飲まず食わずで生きていけるはずもない。そんな人間がいたら魔物としか考えようがないではないか。

「だからその毒よ。姉さん以外には致死量の毒でも、姉さんだけには何故か効かないのよ。姉さんセイレーンの歌う力は遺伝しなくても、何故か魔物体質だけは顕著に出たみたいで……………」

恐ろしい事実、レネスは自分の顔が歪むのが判った。きっと先程のマリンと同じような表情をしているに違いない。

「なんでそんな危険な飴あたしに！」

「多分姉さんは良かれと思って渡したのよ。まさかあんたが口にするなんて思ってたかっと思っのよね。敵の口の中に放り込むことを想定してたんだろっけど……………」

「だって、スカリナ伯母さん先見の達人でしょ、あたしがどう使うかなんて判り切って！」

「馬鹿ねえ、わかってたからこそ飴にしてたんじゃないの。そのナディなんとか君が甘いものに目がないことも想定して」

確かにナディンの甘い物好きは尋常ではない。飴を見たら本気で飛びかかってきた。

「じゃ、なに？あたしもしかして余計なことした？」

「黙ってその子に食べさせておけば……こんなところに来なくて済んだのに」

マリンの言葉にレネスはがくりと項垂れるしかなかった。

「でも母さん、なんであたしがそんな事になっていたかは聞かないのね」

マリンは全くと言って良いほど、レネスがスカリナから危険な飴を貰わなければいけなくなった事情も、近くにジンがいない事情も聞いてこない。もしレネスであればきつと不思議に思うはずなのだが。

「だって判ってたもの。いずれそういう運命が降りかかるのは」

改めて注ぎなおした酒を手に、マリンはきっぱりと言いつた。

「母さんも先が読めるの？」

「姉さんとは違ってあんたのことだけね」

自分のことだけが判ると言われると、そこに母の愛情を感じた気になりなんだか面映ゆい気がする。

「そっか」

「レシーったら、何にたにたしてるのよ。気持ち悪い子ね」

どうやら知らず知らずのうちに表情が緩んでいたらしい。だがそれもなんだか楽しいとレネスは思った。やはり数年ぶりに会えるはずの無い母に会えたせいだろうか。そう思うとなんだか今度は体がうずうずしてきた。長年触れていない母にどうしても触れたい。

「ねえ、母さん、抱っこしたい」

昔は毎日のように抱きついていた。当たり前のように。マリンの匂いが好きだった。どこか優しい匂い。そしてレネスを丸ごと包み込んでくれる柔らかい体。大人になろうとしている人間のすることではないかもしれない。だけど今度こそ二度と会えなくなるであろう母に抱きしめて貰うことになんの躊躇があるだろう。自分はマリンから産まれたマリンの子だ。誰よりその権利があるとレネスは思った。

「レシーったら……………おいで」

最初は驚いた表情をしたマリンだったが、次の瞬間にはグラスを置くと微笑んで手を差し出してくれた。その手に導かれるようにレネスは抱きついた。変わることはない母の匂いと優しさに体が震える。突然喪失したぬくもりにもう一度包まれるのはなんと幸せなことだろう。

「レシーったら、もうあたしより全然大きくなったのに。いつまでも赤ちゃんみたいね」

頭の上から聞こえるマリンの声がなんだかくぐもって聞こえる。顔は見えないが、きつとマリンも涙ぐんでるに違いない。レネスの背を撫でる手の震えがそれを教えてくれている気がする。

「大好きよ、レシー。あたしの大事な宝物……………」

優しく何度も聞こえてくる、昔から変わることのない言葉に、レネスは身をゆだねた。

「レシー、お迎えが着たみたいよ」

マリンに抱きついたままの状態のレネスには、その「お迎え」がどういうものなのかはよく分からない。

「それって、母さんの前に現れたっていうドア？」

それならば自分はやはり死んだということなのだろう。ジンやスカリナは心配であるものの、それならそれで仕方がないと心の中で納得している自分がある。

きつとそれが自分の運命だったのだろう。そうすればもう殺し屋に怯えることもなく、怪しげな競売にかけられることも二度とない。「違うわよ、そっちのドアじゃなくて、現実に戻るドアよ」

「現実？」

そうしたらやっぱりまた殺し屋に追いかけまわされ、怪しげな競売にかけられるということだろうか。

（面倒くさい）

「ここに母さんと一緒にいる」

「えー、それは嬉しいけど。でも多分そうはうまくいかないわよ。あたしですらどうにも出来なかったんだから」

「蹴り入れないで逃げればいいんでしょ」

「うーん、どうだろうなあ。あたしの時のドアともまた違うし蹴りを入れなくてもこの場合逃げたところで……いや逆に蹴りを入れた方がいいのか？」

マリンの受け答えはどこか曖昧だ。

「母さん訊わかんない……」

「だったら自分で見てみてよー」

そう言うなりマリンは無理矢理レネスを引き離し、そのドアのある方向へと無理矢理顔を向けた。

「——やっぱり逃げる」

とんでもないドアの姿にレネスの体は強張る。なんだってよりもよってあんなドアなのだろう。レネスとしては普通のドアを想像していた。

「でもねえ……逃げ切れないと思うけど」

「いや、あれだけは本気で死んでも逃げきる」

「でも早いわよ、あのドア。なんたって機動力あるし」

「いや、やつらの機動力なんてたかが知れて……」

「でも、いっつも集られてたわよね」

「それは子供の頃の話でしょ。今のあたしならいける」

「レシーそんなに運動神経良かったっけ？」

「良くないけど、良くないけど……ぎゃーこっちに向かってきたーーーー！」

「あらあら」

レネスはマリンの傍から一目散に逃げ出した。正確には追ってくるドアからであるが。

「ドアが蜂の塊なんて聞いてないーーーー！」

それから少しして、絶叫と共にレネスの姿はそこから消えた。

「いやぁねえ。別れの挨拶くらいしんみりとさせてくれてもいいのに。また一人で暇になっちゃった」

グラスに残っていた酒を見ると、マリンは一気に飲み干した。

- 26 - (後書き)

蜂の塊はふつーに恐い

深いまどろみの中、遠くから聞こえてくる歌声にレネスは気付いた。

柔らかで澄んだ女性の声だ。その声はまるでゆっくりお眠りなさいと言っているかのような、まるで子守唄のように更にレネスを眠りの世界へと誘う。

（なんか……………すごい気持ちいい……………）

母に抱きしめられた時を思い出す心地の良さだ。とてもじゃないが目を開けることはなかなか出来そうにない。優しく心に溶け込む歌と共に、レネスの魂も空気に溶け込んでしまいそうだと思った。

（溶け込んでしまったら……………あたしはどこに行くんだろう……………）
きつとそうしたら自分は白砂亭のまわりで漂っているだろう。自分が自分じゃなくなっても、あそこにしか自分の居場所はきつとない。

うつらうつらとそんなことを考えていても歌は止まることはない。レネスはこの歌を知っているような気がすると思った。この優しくも悲しげな歌は——前にもどこかで確かに聴いていたはずだ。でも、その時とは何かが違うような気もするのだが、それがわからない。

真綿に包まれたような心地よさの中は、何かを考えるのにはとても不向きで、そのまま何も考えずに深い眠りへと落ちてしまいたいと心のどこかで思っている。深い闇の中で眠りに落ちている自分を想像したところで、ふと一つのことが思い浮かんだ。

（闇……………？まっくら……………）

そうだ、闇色の衣装に身を包んだ人たちがたくさんいる中、その歌を誰かが歌っていた。すすり泣きの混じる中で歌われていたそれは——。

（——鎮魂歌）

母の横たわる棺の周りにいる喪服を着た祭司が歌っていた歌だ。亡くなった人に贈られるその歌が聞こえるということは――。

（あれ？あたし死んだっけ？）

いきなりレネスの頭がはつきりしてきた。何かがおかしいとどこかで警鐘を鳴らしている。

確か自分はさっきまで母と一緒にいたはずだ。そこで母はレネスは自分とは違って仮死状態だと言っていたはずだ。つまり、もしか本当に死んだと思われ、棺に納められたということだろうか。鎮魂歌が歌われるのは土に埋められる時、つまり――。

「いやー！生きてるから埋めないでー！」

先程までの心地よさをあっさり投げ捨て、レネスは叫び声と共にがばりと起き上がった。

同時にピタリと歌は止まった。死者が動いて祭司もびっくりだろうか。

だが、目の前には祭司も喪服の集団もおらず、ただ一人の女性が窓から差し込む日の光を背に、驚いた顔で立っているだけだった。

「死にかけたわりに元氣いいわね」

「お、伯母さん？」

「そうよ。他の誰に見えるって言うのよ。寝ぼけてる？」

「いや、他の誰にも見えません……」

目の前にいるのは数週間前に別れたスカリナその人で、変わらぬ美貌も口の悪さも健在すぎる程健在だった。

「何？死んで埋められる夢でも見たの？」

先程のレネスの叫びに対しての質問だろう。スカリナの顔はどこか面白げだ。

「うん。だって誰かが鎮魂歌を歌ってたから……」

「ああ、さっきの歌？あれは鎮魂歌じゃないから安心して。言葉が違ったでしょう？」

言われてみれば確かに聞こえてきた歌はちゃんとした言葉になっ
てはいなかった。それが違和感の原因かとレネスは納得した。前に

聞いた鎮魂歌は魂を鎮める為の詩が謳われていたが、先程聞いたものはなんの詩も聞き取れなかったのだ。まるでそれはセイレーンの歌のようで……………。

「もしかして伯母さんが歌ってたの？」

レネスは驚いた。スカリナは確か全く歌えなかったはずだ。セイレーンの血を引きながらもセイレーンにはならなかった人。殆どのセレンの子孫がそうであるようにスカリナもセイレーンの歌の力は持っていない。あるのは何故か先見の力だけだったはずだ。

「ええ、そうよ。でもあれだけね。あれはなんの力も持っていないから、あたしでも歌えるのよ」

「鎮魂歌じゃないなら、あれはなんの歌なの？あたし初めて聞いた」
全ての歌は誰に教わるでもなく体の内部から沸き上がって来た。とはいえ母から色々教わることもあったのだが、先程の歌だけは一度も聴いたことがなかったのだ。

「あれは——祈りの歌よ。セレン様が王の幸せを祈って作って歌った最初で最後の歌。その歌を最後に王の前から姿を消したと言われているわね。そしてその歌の旋律だけを真似て今の鎮魂歌も出来上がったらしいわ。だから似てるのよ」

言われて成程とレネスは納得した。卵が先が鶏が先かということにはならず、鎮魂歌と祈りの歌の関係がはつきりした。そしてスカリナが歌える訳もだ。あくまでも血に伝わるものではなく、新たに作られた歌なのならばなんの力も宿しているはずもない。

「あたしにも、その歌教えてくれる？」

自然にレネスはそう言っていた。鎮魂歌ではない祈りの歌。誰かの幸せを祈るなら、それはとても自分も幸せな気持ちになれるに違いない。

レネスの願いにスカリナは微笑むことで応えた。

「ところで、すごい今更ですけど」

そこでレネスは恐る恐る辺りを見回した。

「お、おばさん！ここどこ！」

歌を覚えた頃には、スカリナが背にしていた日の光もいつしか部屋には差し込まなくなっていた。いや、明るくはあるのだが光が直射しなくなったと言えればいいだろうか。見まわした部屋の中はしっかり立派な家具が佇んでいるのが見えたからだ。

「なに慌ててるのよ。何かここに問題あった？」

「問題あるわよ、ここ凄い立派な部屋じゃないの！貴族様とかが使う高級宿かなんか？」

「ああ、そうね。立派といえば立派ね」

慌てるレネスに対し、スカリナは別段気にした様子はない。

「レネス、どこで何があって死にかけたか覚えてる？」

スカリナの問いにレネスは首を傾けた。そういえば歌のことですっかり忘れていたが、自分は死にかけたのだっと思った。だからこうしてフカフカのベッドに座ったままでいるし、鎮魂歌の流れる中埋められることを恐れて置き上がったのだった。死にかける前は確か――とレネスは考え始めた。なんだか数日くらい立ったかのように記憶が途切れ途切れではあるが、少しずつ何があったかは思い出してきた。巻き戻しな記憶ではあるが。

「えーと、飴が口の中に入ったのよ。赤いやつ。ナディンがくれたって取ろうとしたはずみに。それって確かセイレーンの競売するからって時で。その前にヒキガエルが変なカツラを競り落として……あれ？そういうえば、ナディンとキャンデロさんは？あだしバレン商会の屋敷にいたのよ」

そこまで思い出したレネスはもう一度辺りを見回した。ずっと傍で監視のごとくいたはずのナディンの姿はない。

「伯母さん、あたし助けてくれたの？」

「そうね、あの貧乏くさい地下室からは助けたと言っていていいでしょうね。まったく、預かった人の姪っ子を囚人が奴隷みたく地下室におしこめてるなんて。あの馬鹿達にはしっかりお仕置きしておいたわ」

「は？あの馬鹿達？」

ナデインとキャンデロのことであろうか。預かった人の姪っ子とは自分のことだろうか。

「え？え？え？伯母さん、あの二人と知り合い？」

「まあね」

「え？ええ？伯母さんが預けた？あたしを？」

「そうよ。家にいたら危険だから少しの間、無理矢理にでも連れてきてここで預かってって言ったのよ。ついでに狙ってる人物も特定しろって」

「えー！ー！つまり全部伯母さんの差し金なのー！ー？」

レネスの叫びにスカリナは嫌な顔をした。

「ちよつと、差し金って悪さの片棒担いだみたいに人聞き悪い」

「だって、だって、ミレイ人質に言うこと聞けって言われて……」

それなのに伯母が預けたなんてことはあるだろうか。あれでは無理矢理というところの話ではない。

「人質？気絶？」

なんの話だ？とでも言わんばかりにスカリナは眉を寄せた。

「それで今度は気絶させられて袋に詰められて……」

「なんですって……？」

レネスの説明にスカリナの額にビシリと血管が浮き出た。白い肌に青い筋はとつても目立つ。

「競売の話までは聞いてたけど、そういえば連れて来た時の話は聞いてなかったわね……」

話し方はゆっくりではあるが、何気に声が低くなつてはいないだろうか。

「怪我は？」

「え、それは大丈夫。ちよつと縛られた縄の痕が残っただけで」

「そう……」

どこからか地響きのような音がしているのは気のせいだろうか。風もないのに長い髪が舞いあがって見えるのも気のせいだろうか？

まるで若様に怒りを向けた時の伯爵様を彷彿させるようで……。

「お、伯母さん？」

ベッドの脇に置かれた椅子にゆったりと座っていたスカリナであったが、体から湧き上がる湯気のような物と一緒に立ちあがった。長い絨毯の上を音もなくドアへ向かって歩いていく。

「レネス、もう少し休んでなさい。私はちよつと用事が出来たから」
低い低い声でそう言ったスカリナはドアの外へと姿を消した。

それから少しして、茫然としたままのレネスの耳に絶叫が聞こえたように思えたが、きつと鶏でも捌いているのだらう。レネスはそう思うことにしてもう一度フカフカのベッドに恐る恐るもぐりこんだ。

- 27 - (後書き)

や、久しぶり？な更新です。

なんか場面かわりすぎ？とも思いますが、とりあえずこのまま突っ走って後でまた考えることにします。

「結局のところあの飴ってなんの意味があつたんだろう？」

「そんなの僕が知るわけじゃないじゃない。伯母さんに聞きなよ、あの恐い伯母さんに」

ぼつりと呟いたレネスの言葉に答えたのは、またしてもレネスの世話係にされたナデインだった。机の上に本を広げた状態のレネスに対し、何をするわけでもなく椅子に座つたままナイフを玩んでいる。

最初の出会いはともかく、今では恐れることもなく普通に会話が出来ていたりする。ここに来てからというものの二人で話をしているのが日常で、今もそれに変わることはない。以前と違つるのは、二人のいる部屋が格段に豪華な物になったことと、ナデインの姿だった。「全く君に出会つてからというものの、僕本当に碌な目に遭つてないんじゃない？薄暗い地下室で生活する破目になるわ、濡れ衣着せられて蜂蜜は取り上げられるわ、恐ろしい罰を受けさせられるわ、拳句に！なんなの、この地味な格好！」

ダン！という音を立ててナイフを机に突き立てたナデインは、両手で自分の衣服を引っ張つた。

「地味？別に普通じゃないの。一般男性のごくごく普通の恰好だけど」

「ごくごく普通の一般男性の恰好、それはつまりいつもの可愛らしい召使の姿とは似ても似つかぬもので……………」

（ナデインの女装ともかく、最近この屋敷で伯母さん以外の女性の姿見ないなあ）

確かこの屋敷は女性しかいないと言つていたはずなのだが、最近見る召使は全員がまるで船乗りとでも言わんばかりのむさ苦しい男性ばかりで、キャンデロの好みからはかけ離れている。

（宗旨替えした？）

「その！ごくごく普通の恰好が僕には苦痛なんだよ！なに、このネズミの様な色のみすばらしい服！」

「じゃ、いつものように女装すればいいじゃないの」

「したいけど、したら怒られるんだよ！」

誰にとは聞くまでもなかった。きつとスカリナだろう。スカリナがこの屋敷に来てからというもののナデインの女装姿は見る事がなくなつた。スカリナのことだ「気持ち悪い」とでも言ったのだろう。「これじゃ、折角の僕の可愛らしさが半減だよ！」

ナデインは絶望するかのように自らの頭を抱え込んだ。

いいではないか、半減したところで充分自分以上に可愛いと、レネスは呆れながら思った。

「ただ漏れだし！君より可愛さが落ちたら僕死ぬしかないじゃないのさ！」

ただ漏れという言葉にレネスは慌てて口元を押さえた。一緒にいることが多くてすっかり気を抜いてしまっていたらしい。と、そこで何やら自分に対して非常に失礼な言葉を吐かれたことに気が付いた。

「つて、何それ！あたしより可愛くなくつたていいじゃないのよ、男なんだから可愛らしさより男らしさで勝負しなさいよ」

「なんの勝負するのさ。男らしさは秘めてこそ価値が上がるつてもだよ。わかつてないなあ、君」

そうしてナデインは両掌を上に向け肩をすくめた。

（感じ悪っ……………）

「あーあー、それにしても、君いつまでここにいるの？もう君の顔見あきたんだけど。美人ですら三日で飽きるのに、美人じゃない君じゃ一日が限界だよ。それなのに、一体何日ここにいたっけ？」

どこまでも失礼極まりない奴だ。むしろこっちとしては「変態」の顔は見飽きたと言ってやりたい。

「あのねー、あたしだって早く帰りたいわよ。あんたがあんなやり方で連れてくるから、父さん相当心配してるだろうし。ミレイだっ

て、ワイトさんだつて心配してるだろうし……………」

あんな恐ろしい思いをさせられたミレイは大丈夫だろうか、とレネスは急に心配になってきた。

「ねえ、あんたここであたしの顔見てるの飽きたなら、ちょっと出かけてきてくれない？」

「はあ？何言ってるの？」

「あんた、あたしの友達凄いい脅かしたでしょ、あの子お腹に子供もいるのに、あんな脅かし方して！」

「あー、はいはい。あんまり怯えてるから面白くてさーつついっねー」

ナデインは大した問題でもないような顔で、目の前に刺さったままになっていたナイフを抜くと、また遊び始めた。全く反省の色はないようだ。

「つついですまないわよ！あの子になんかあったら許さないからね！」

「えー、大丈夫じゃない？それに君に許されなくても別に問題ないし」

楽しそうにそう言ったナデインはナイフに映った自分の顔を見てにやにやしている。

（この馬鹿本当ムカつくし！）

こうなったら……………レネスはすうと息を深く吸い、一気に吐き出した。

「伯母さんに、またお仕置きお願いしてやる！」

そう怒鳴った時、部屋のドアが静かに開きスカリナが現れた。

「あら、ナデインまだお仕置き足りなかったの？まだまだあるわよ、あの仕事」

「い、嫌だああああああ」

ナデインの悲鳴が屋敷中に轟いたのだった。

半泣きのナデインが逃げるように部屋を去り、今度はスカリナと

二人きりになった。

「伯母さん、ナディンのお仕置きって何させるの？」

あの恐がり方を考えれば尋常じゃないお仕置きだというのは理解できるが、何をさせればあそこまで怯えるのかがさっぱりわからない。自分で出来ることなら今後の参考までに知っておきたいものであると思ったのだが「大したことじゃないわよ、ただの収穫作業よ」と、スカリナは簡単に言っただけで詳しくは教えてはくれなかった。「そんなことより、やっと終わったからもう家に帰れるわよ」

「え、終わった？犯人捕まえたの？」

「違うわ。終わったのは葬儀」

「は？葬儀？誰の？」

伯母の言葉は謎かけのようで、中々話が掴めない。

「あんたのよ」

「あ、あたしの？」

何故自分は生きているのに、葬儀が行われなければならないのだろうか。

「ちよつと、伯母さんという——」

「街のみんなが協力してくれてね、いい葬儀だったわ」

レネスが聞こうにもスカリナにその言葉を遮られる始末だ。

それにしても、葬儀にいいも悪いもあるのだろうか。いずれにしろ自分の葬儀が良かったと言われて喜べるはずもないのだが。

「マリンの時のこと思い出しちゃって、涙が止まらなくなっちゃってね」

言われてみれば確かにスカリナの目元は赤くなっている。いや、

それよりも——

「これでもう完璧だから、あんたは安心して家に帰りなさいな。どう？嬉しい？」

何が何だかわかってはいないが、帰れるのが嬉しいかと聞かれれば実際嬉しい。レネスはとりあえずこくりと頷いた。だが、それよりも——

「立派なお墓も街の人たちの好意で準備してもらえたのよ。良い人達に恵まれてるわね」

そりやそうだろう。商業区なんて言われているものの、儲けより義理や人情が大事というお人よしばかりが集まっているのだ。良い人たちばかりに決まっている。でも、それよりも――

「それでね――」

ついにレネスはスカリナ言葉を遮って叫んだ。

「伯母さん！そんなことよりも！死んだことになってるなら、あたし家になんて帰れないじゃないのよ！」

「あら、なんで？」

スカリナはさも不思議そうな顔をして、両腕を組んだ。

「なんでって、そんなに迷惑かけまくった挙句、『いやー、実は生きてましたー、あはは』なんて戻るわけないってば！」

「やーね、そんな馬鹿っぽく帰る気でいたの？みつともない」

「いや、みつともないってね、そのみつともない帰り方以前に、帰れないってことを言ってるんだけど」

誰が好き好んでそんなみつともない情けない帰り方などしたんだろうか。そういうことが言いたいわけではなく、手厚く葬ってもらった人間がこのこのあの街に戻るわけがないということと言いたいのだ。どう言えばうまく伝わるのだろうかとレネスがもどかしく思っている、スカリナが軽く息をついた。

「なんか勘違いしてる？誰もあんたが死んでるなんて思ってないわよ」

「は？思っていない？葬儀までして？」

それを先に言ってくれば良かったのだ。勘違以前に自分の言葉が全く足りてないことに、スカリナは気付いていないようだ。レネスは思った。

（伯母さん自分だけわかってて話進めちゃうんだもの）

スカリナには全てが分かっている、中途半端な情報だけでは理解できるわけがない。

「街の人達にはただ協力して貰っただけ。みんななかなかの演技派ぞろいよね」

「じゃ、葬儀の意味は？」

「だから、あんたを狙っていた貴族連中に、あんたは死んだと思わせただけよ」

「じゃ、益々帰れないじゃないのよ。というかこつそり戻ったとしても、もう店の手伝い出来ないじゃない。あの辺り貴族の馬車しよっちゅう通るのよ」

「レネスったら自意識過剰すぎよ。貴族がいちいち市民の顔覚えてるわけないでしょ」

「だって、この間の競売にも来てたのなら顔しつかり見られてるじゃないの」

「だからって貴族からすれば、似たような服きた一般人なんてどれと同じ顔に見えてるものよ。ほら、あたしたちも烏なんてどれも同じ顔に見えてるでしょ。それと一緒。一度死んだと思ったものはお忘れ去られてるから心配ないわよ。あっちとしては目標達成。お偉い貴族達が達成した目標を振り返るわけもないわ」

その言葉にレネスはなんとなくだが納得した。確かに烏は毎日見るが、昨日きた烏と今日来た烏は同じかと聞かれればよくわからないというのが現実だ。そう考えればスカリナの言うことにも一理あるとレネスは感じた。

「じゃあ、本当に戻っても大丈夫なの？」

もう殺し屋に怯えなくてもいいのだろうか。もうジンに心配をかけなくてもいいのだろうか。

「ええ、あたしが保証するわ」

先見を得意とするスカリナの言葉は力強くレネスに響いた。

「どうする？今からもう帰る？それとも——」

「勿論、今から！」

帰ろう、懐かしい我が家へ。大好きな父いて、母の思い出の残る自分の場所へ。

・ 28 ・ (後書き)

もつちよつとだよ

やっとたどり着いた我が家を前に、レネスは大きく息を吐いた。
(やっと戻ってこれた)

帰れると聞くや、すぐに屋敷を飛び出そうとしたレネスだったが、キャンデロの好意によりここまで馬車で送ってもらったのだ。スカリナと再会してから今日までの間、同じ屋敷内にいるにも関わらず姿を見ることのなかったキャンデロは、なんだか随分顔色が悪かったが、もしか病氣療養でもしていたのだろうかと今更ながら気になった。まあ、何はともあれお金持ちのことだ、高額な薬だろうが食材だろうがどうしても出来るのだから、レネスが心配するまでもないだろう。

(それよりも――)

レネスはきよきよと辺りを見回した。知り合いに会えることを期待したのだが、何故か今日に限って誰も見当たらない。とかいつだって賑わっているはずの商業区が閑散としているようにも見える。何かあったのだろうかと相変わらず辺りに目をやりながら、レネスは白砂亭のドアを開けた。

「父さん、周り静かだけど――うわっぶ！」

猪並みの猛進でレネスに誰かがぶつかってきた。同時にぎゅっと体を包み込まれた。がっしりしていて調味料の匂いがしみついた身体。

「と、父さん？」

「……………おかえり、レシー」

ずずつと鼻水をすすする音が聞こえる。完璧泣いているようだ。なんだか最近随分涙もろくなったなーと思いながら、安心させるように背中をトントンと叩いた。

「心配かけてごめんね。ただいま、父さん」

コクコクと物も言わずに頷いている振動が頭に伝わる。思った以

上に心配をかけていたようだ。

「こりゃ！ジン！いつまで隠してるんだ！いい加減レネちゃんの姿見せろよ！」

一人の男性の声がジンの背後から聞こえる。ジンの体に遮られたレネスにはその声の主を見ることは出来ないが、それが誰だかはすぐにわかった。

「あれ？ロジエのところの小父さん？」

「おうよっ、久しぶりだなレネちゃん」

「なんでここいるの？」

近所に住んでるものの、あちこちにふらふら出かけているロジエの父はめったに遭遇することのない人だ。暑苦しい人だけに夏などはむしろ会えないことがありがたかったりもするのだが。

「俺だけじゃねーぞ。ああもう、そろそろ離してみんなにレネちゃん見せろって！」

ベリっという音が聞こえそうな勢いでレネスからジンが引き離された。

一瞬にして解放されたレネスの目に、店いっぱいにいる人々姿が映し出された。

「ええ？なんで街のみんながいるの？」

よく見知った街の人が狭い白砂亭の中に集まっているのだ。当然ロジエもミレイもいる。

「なんでって、そりゃよ、今日はレネちゃんの葬式だったからに決まってるじゃないか」

傍にいたロジエの父が面白そうににやりと笑った。小麦色の肌に白い歯が映える。

「え、あ、そっか。あ、でも死んでないからね、生きてるからね、あたし」

その言葉に辺りの人間がドッと笑った。

「知ってるって、おかえりレネちゃん」

そう言ったのは馴染みのザックだ。強面顔に今日も人懐っこい笑

顔を浮かべている。

「レネス、そのごめん、どうやらレネスをあの屋敷に運んだのって俺だったみたいで。まさかお前だと思つてなくて本当ごめん」

ロジエだ。すまなそうに体を縮めて顔を俯けた。

「うわっはっはっはっ、良かったじゃねーか、レネちゃん抱っこ出来てよ、気にすんな倅よ！な、レネちゃんよ！」

レネスが許すも許さないも言わないうちに、ロジエの父は一人勝手に話を終わらせた。まあ確かにロジエは巻き込まれただけで悪くはない。レネスも大きく頷いた。すると今度は小さな体がレネスにしがみついた。

「うっうっ、レネス良かったよう。あんたに何かあったら、あたしどうしたらいいか。ごめんねえごめんねえ」

泣きながら謝ってくるのはミレイだ。どうやらミレイもお腹の赤ちゃんも問題なく無事だったらしい。レネスは安心して息を吐いた。「ミレイも悪くないって。こっちこそ巻き込んでごめんね。無事で良かった。赤ちゃんも何もなく良かったよ」

「うん、うん。それでね……」

ミレイは上目づかいにレネスを見つめた。紅潮した頬がいつもより色気を増している。

「な、なに、どうしたの？」

そんな目で見られたら、女同士とはいえなんだかドキドキしてくるではないかとレネスは思った。

「もう、我慢出来そうにないんだけど……」

「え？」

「今朝からお腹痛くて、もう、我慢の限界で……産まれそう！いたたたたた」

レネスの腕をぎゅっと掴んだミレイはそのまましゃがみ込んだ。

「ええー！」

驚いたのはレネスだけではないようで、店の中にいた人全員がその言葉に慌てた。

「だ、誰か産婆さん呼んで来て！」

と誰かが言えば。

「ばかもの！呼ばれなくてもここにおるわ！それより産湯を沸かさ
んか！」

と産婆さんが答え。

「そ、それより誰かベッドに運んでやって！と、父さん！」
とレネスも叫び、狭い店の中は上へ下への騒ぎになった。

急なことからレネスのベッドに運び込まれたミレイは横向きの体
制で横たわり、次々と襲ってくる痛みと格闘していた。

「ううううう、いたたたたた」

「ミレイしつかり」

何もわからないレネスはどうすることも出来ず、ただただミレイ
の腰をさすってやることしか出来ない。

「……レネス、う、たつて……よ……何か……う……たを……あたし
が、頑張れ……るように」

痛みから、ミレイの言葉は途切れ途切れだ。だがレネスにはミレイ
が何を言いたいのかはすぐにわかった。

「だ、ダメだよ、ミレイ。あたし歌は………」

歌えば人に何かしらの術がかかってしまう。レネスが貴族から狙
われたことは知っていても、その理由まで詳しく知るはずの無い街
の人に、自分は魔物の端くれだと言うわけにもいかない。出来るな
らばミレイの望むように歌で力をつけてやりたいが、ただそれだけ
のことをしてやれない自分が情けない。そう思い唇を噛んだレネス
に、ミレイの強い声がとんで来た。

「いいの！……知ってるから……だから、いいの！わかって、るか
ら。お願いよ……レネス」

知ってるとは何を知っているのだろうか。まさかレネスがセイレ
ーンだということを知っているということなのだろうか。

「でも……」

「早く！じゃないと、あたし頑張れないよ！うつうつ！」

「よっしゃ、産道が開いてきた！ミレイちゃん、これから勝負だ！頑張り！」

産婆の指示で体制を変えたミレイはいよいよ力を始め始めた。苦しそうにうなり続けるミレイ。合間合間に「お願い」ということが漏れている。

レネスはついに心を決めた。頑張っているミレイの為、歌おうとスカリナに教えてもらった歌を思い浮かべる。あれならば、なんの力もないはずだ。レネスは心を落ち着け、静かにその旋律を自らの体で奏で始めた。

「ちよつと、レネスちゃんそんな不吉な歌……」

ミレイの母が慌てたようにレネスを止める。鎮魂歌だと思ったのだろう、違つとレネスが説明するよりも早くミレイの声がとんだ。

「母さん！違つから！これは鎮魂歌とは違つ！レネスの邪魔しないで！」

苦しさに顔を紅潮させ、汗で髪を貼りつかせたミレイの形相に、ミレイの母も「ごめんなさい」と引いた。それを合図にレネスはもう一度歌い始める。セイレーンが建国王の幸せを願った歌。同じようにミレイの幸せを、産まれてくる赤ん坊の幸せを願つて歌う。気のせいか辺りが優しい光に包まれているように見える。優しく、人を慈しむ気持ちを含め、レネスは歌い続けた。

「ふえっふぎやあつ、ほぎやあつ」

レネスの歌に混じり小さな声が聞こえたと思った。次の瞬間その声は大きな泣き声となり、あたりに響き渡つた。

「う、産まれた」

「産まれたねえ」

ぼんやりとレネスとその場の女性陣が見守る中、その泣き声は部屋の外にも聞こえたのか、外からも大きななどよめきが響いてきた。

「よーし、よーし。元気な男の子が生まれたぞい。ミレイちゃん頑張つたな」

その言葉にミレイはほつと息を吐くと大きく笑った。疲れた容貌とは裏腹にそれはそれは輝かしい笑顔だった。

- 29 - (後書き)

いよいよ次で終わります

エピソード

レネス暗殺騒ぎもすっかり収まり、店はいつもの賑わいを見せていた。

「ふうん、じゃ全ては君の伯母上が仕組んだことだったわけだ」

今日も昼食にやってきた若様へエール酒を渡し「君の瞳に乾杯」と合い言葉を交わすと自分も一杯飲み干した。

「ぶはあ。そうなんですよ。でも、あたしもそんなの知らないし、迎えに来たやつはナイフと銃を所持した変態だし。競売かけるとかわけわからないことは言われるし」

「そういえば、その競売、あの方も行っていなかったかい？」

「あの方？みんな仮面？覆面？をつけてたから誰が誰やらわかりませんでしたけど。あたしの知ってる人ですか？」

青い覆面マスクをつけてたのは主催者のキャンデロだったはずだし、他に誰かいただろうか。

「またまた、レネスは最近とぼけ方が上手くなったねえ。それとも僕に言わせたいの？」

「とぼけるって何をですか？」

「嫌だなあ、その場に君の親衛隊の一人が行ってただろう？『ヒ』のつくあの人」

「『ヒ』のつく人？あ、そうだヒキガエルだ！」

「本気で存在忘れてたのかい？」

レネスの驚きように若様も片眉を上げた。さすがにそれはないだろうと言いたいらしい。が、あれ以上に強烈な人が次々と現われたせいで、存在が薄れていたようだ。

「はい。本気で。色々ありすぎて頭からころつと」

「あーあ、君がこうして平穏に暮らせてるのには彼の力もあったのに、報われないねえ」

「え？なんかしたんですか、ヒキガエル」

「その競売があつたと思われる日の翌日くらいだったかな？王宮にやってきて、セイレーン様を殺したのはどのどいつだったって大騒ぎ。それで君が死んだってこと納得する人間が増えたわけなんだけど」
まさか王宮でそんな恥ずかしいことをしていたとは驚きだ。すっかり術は解けてるはずなのに不思議なこともあるものだ。よりにもよって、あの誰よりも自尊心の高そうなヒキガエルが、こんな庶民の死を嘆いて暴れるとは誰が思うだろう。

「へ、へえ。意外過ぎてなんとも言いにくいんですけど」

「そうだろうねえ。それで友達とはちゃんと仲直りしたの？」

「え、友達って？」

「なんだか店の中で大ゲンカしてたって聞いたけど。その後行方不明になったって」

「ああ、ミレイですか？もうすっかり元の仲ですよ。ミレイが怒った原因も判明しましたし」

「ふうん？ちなみに原因ってなんだったんだい？」

「それがですね、そもその原因はロジエだったんですよ。あたしに冷たくされるってミレイに泣きついたらしくて。それを偶々見たミレイの旦那さんが焼餅焼いたみたいなんですよ。で、これも偶々ですけど、そのミレイの旦那さん、何日か前にここに食べに来ててあたしの存在思い出したらしいんですよ。何せお互い一度しか会ってないものだから顔もよく覚えてなかったんですけど、あつちはすぐに思い出したらしくて」

つまりはなんのこともない痴話喧嘩だったということだ。事件に巻き込んでしまった手前大きくは言えないが、犬も食わないなんとやらに巻き込むのは勘弁してほしいとレネスは思った。

「だけど、更に元を正せばロジエ君に冷たくした君に原因があるってことになるんじゃないのかい？」

「へ？」

「自業自得ってやつだね」

頬杖をついて、にやにやと笑う若様にムカついたのは言うまでも

ない。

「レシー、若様の」

話をしている間に料理が上がったらしい。慌てて料理を運ぶ。皿の中には目をやらないようにと、緊張しながら若様の席へと運んだ。

「レネス、今日の料理はなんだい？」

「シヤコ蝦蛄ですよ。海老みたいで美味しいですよ」

「その割には目が泳いでるよね。あ、もしかしてこの見た目のせい？ああ、見様によつては虫のように見えなくてもないよね。さしずめ大きな団子虫？」

「うっ、その固有名詞はいいですから。どーぞ、ご遠慮なくお食べください。じゃっ！」

見たくない物の傍にいつまでもいる気はない。かといって厨房にも戻りたくはないので洗い物に専念することにしようとその場から立ち去ろうと踵を返した。

「まあまあ、折角だから君も味見していったらどうだい？」

悪魔の囁きと共に腕を掴まれた。

「ぎゃー！」

目の前に差し出されたのは紛れもなくシヤコ蝦蛄。

「ひいっ！」

腕を掴まれたまま必死に後ずさりをしようとするが、上手くいかない。いよいよ口元にそれが押し付けられようとした時だった。横から伸びて来た手がひよいとシヤコ蝦蛄を掴みレネスの目の前から離れた。「おや、ワイトじゃないか。まだここにいたのかい？」

「嫌がる婦女子に無体な所業を働くとは、貴様はやはり悪か？」

「嫌だねえ、無体な所業なんて人聞き悪い。ちよつとした交流だよあ、それよりそれ僕が食べるから返しておくれ」

その言葉にワイトはあつさり頷き、手にしたシヤコ蝦蛄を皿に戻した。

（金持ちのくせに食い意地汚いわね）

「折角の珍味だよ、食さないと勿体ないじゃないか。仕方ない悪と言われるからレネスをからかうのは諦めて大人しく食事をするよ」

肩をすくめた若様は優雅な仕草で席へと戻ると、早速食事を始めた。

「うん、まるつきり海老だよ。レネスもやっぱり食べてみたらどうだい？」

「け、結構です」

味はともかく見た目がアレならレネスは一生口にすることはないだろう。相変わらず皿から目をそらすようにして返答を返した。

「あ、ワイトさんも折角だから若様と一緒に食べる？」

「いや、いい。店が終わった後でお前達と食べるから気にするな」

「おや？まさかあのままここに住んでるのかい？」

「そうなんです。また何かあると心配なので。念の為。父さんもそうしてくれって」

レネスがそう言うと言とワイトも頷いた。今やすっかりこの家の住人になっており、店の大事な働き手だ。

「へえ。でもよくワイトが素直に言うことをきくね。僕が用事を頼みたい時なんてなかなか掴まらないんだよ、彼」

「そうなんですか？わりといつもあっさり登場してくれますけど」

それもわけのわからない手紙付きでだ。一緒に住んでいても時々妙な手紙が部屋に置いてあったりする。何かに対する助言であったり、小言だったり、たまに食べたい物の要望などもあったりする。

「俺は正義の使者であって、貴族の間諜などではないからな」

「それはそうだけど、君の為の部屋は相変わらず用意してるし、報酬だつて定期的に支払ってるはずだけど」

「だが、貴様の家の飯は口に合わん。部屋も光が騒々しくて疲れる」

「まさか、食事につられてここにいるんじゃないだろうね」

「うむ。そのまさかだ。ここはいいぞ、飯は美味いし、適度に薄暗くて安心する」

「まあね、僕も一時期とはいえここに世話になっていたからね、住み心地の良さはわかるけどね」

若様の言葉に頷くでもなくワイトはレネスへと振り返った。

「ああ、そうだ、俺の今日の昼はまた例のやつにしてくれ」

「いいですよ。それにしてもワイトさんあれ好きですねえ。父さんの料理の方がおいしいのに」

「ねえ、その例のやつとはなんだい？」

のけものの様にされていた若様が、不満顔で問いかけて来た。ついでにえばエール酒も空なのか、下品にも杯でテーブルをドンドンと叩いている。本当にこの人は貴族なのだろうかと思うほどこの店になじんだ仕草だ。

「ああ、おかわりですか。今持つてきますね」

「それもだけど、その例のやつは？」

「なんてことのない、あたしの作った簡単なサンドイッチですよ。御者さんしてた頃の名残なのかワイトさんのお気に入りなんですよ」

「なんだいそれは、折角だから僕にもひとつくれないかい？」

レナスが答えるより早くワイトが若様の言葉を遮るかのように「断る」とのたまった。

「なんで君が答えるんだい？」

「知らん。なんでもいいが商売の邪魔だ。とっとと食って帰れ」

「だから、なんで君が仕切るんだい？」

カランコロンと扉の鈴が鳴る。新たなお客さんが来たようだ。言いたいをしているそっくりな二人は放っておいて客へと向き直った。

「いらっしやいませー！」

「よー、レネちゃんいつもの頼む」

「はい」

やっぱり平穏な毎日が一番いい。商売繁盛、今日も忙しい一日になりそうだ。

エピローグ（後書き）

えーと、ついに二部完結です

ちよろちよるとまた番外編やら更新するとは思いますが
読んでくれた方々、お気に入り登録までしてくれた方々
本当にありがとうございます

続きを書いた際には、またお付き合い頂けると嬉しいです。

小さな約束 その1（前書き）

いつもお読みくださってありがとうございます。

一応の完結を果たしたところではありますが、引き続き番外編をちょこちょこ追加していきますので、今後もお付き合いくださいませ。

小さな約束 その1

カチャカチャと食器がこすれる音が部屋に響き渡っていた。

どこの家にもある食事風景。ミレイの家も例外なく家族での朝食をとっていた。

「家畜泥棒？」

「そうなんですよ、農業区に住んでる家は軒並み被害にあってるんですって」

「おいおい、それじゃ仕事に差しさわりが出るじゃないか」

「ええ、相当お困りのようですよ」

「そつだらうなあ……」

ミレイはむぐむぐと口一杯に食事を頬張りながら、両親の会話に聞き耳を立てていた。家畜を盗んで何をするの？と聞いてみたいところではあったが、口を挟もうものなら「大人の話に聞き耳を立てるんじゃないぞ」と母から小言を貰うのは確実だ。だったら自分のいないところですればいいのに、と思いつつも、大人の話は色々ミレイの興味を惹いてくれるので、あえて何も言わず聞き耳を立てるのが日常となっていた。

「そついえば、製粉屋にも家畜いたんじゃないかったか」

「ああ、そついえばあそこもロバを飼ってましたね」

「気をつけるように言っておいた方がいいかもしれないな」

「そうですね、奥さんに会ったときにでも私から言っておきますよ」

「ああ、そうしてやってくれ。困った時はお互い様だからな、困る前に知らせておくのも大切だろう」

「ええ、ええ」

製粉屋のロバとはロビイのことだろうか。時々遊びに行っては餌やりをしているだけに、ロビイが盗まれるのはミレイにとっても哀しいことだ。仕方がないからロジエにも教えてやることにしよう。

「おつ、ミレイそれ残すのか？じゃ、俺がもらってやるよ」

ひょいと目の前からパンが一つ消えた。兄の仕業だ。両親の会話に集中していて隙が出来たらしい。小さく舌打ちをして得意の作戦に出る。くしゃりと顔をゆがめての泣き落とし作戦だ。突然のミレイの鳴き声に両親も世間話を止めミレイに視線を集中させた。

「どうした、ミレイ？」

「ミレイ？どこか痛いのか？」

「おかあさんー、お兄ちゃんがミレイのパン取ったあ」

本当はちゃんと「ミレイ」と言えるが、あえて言わないのが肝心だ。男ばかりの中にポツンと産まれたミレイに両親は甘い。それを踏まえての行動だった。

案の定、父はパンを奪った兄の頭をゴツリと殴り、母は自分のパンを差し出してくれた。

「あらあら、じゃあ母さんの一つあげるから、今度は取られないように食べちゃうのよ」

「くすん、くすん、うん、ありがとう」

作戦は成功だ。兄から奪取は出来なかったが、母から貰えればそれで良し。またしても口いっぱい頬張ってにんまり笑みを浮かべた。

「えー、レネス今日もいないのか？」

食事を終えたミレイは後片付けの手伝いをさっさと終わらせると、友達のレネスの家にやってきていた。いつから一緒に遊ぶようになったかの記憶はないが、ミレイはいつだってレネスと一緒にいた。そんなレネスがここ数日つかまらないのだ。

「ごめんね、今日もちよつとお使い頼んじやったのよ。明日は大丈夫だから、明日遊んであげてくれるかな？」

「そっか、今日もお使いなんだ……」

食堂を営んでいるレネスの家のお使いがどういふものなのかはミレイにはわからなかったが、お使いと言われてしまえばゴネるわけ

にもいかない。がつくりとしたミレイはほんの少し項垂れながらレネスの家を後にしようとした。

「あ、そうだ、ミレイちゃん、おばさん良い物あげる」

良い物と聞いていらないと答える子供はいるだろうか？いやいな。当然ながらミレイもさっきまでの落ち込んだ気持ちをどこかに追いやって、嬉々として振り返った。

「え、良い物って何？何？」

「はい、これ。果実酒に漬けてた杏の実。甘くておいしいわよ。レネスも大好きなの」

「——あ、ありがと」

よりもよって酒に漬けてた果物。嫌というほど我が家で嗅がされてる酒の匂いにミレイはがっかりした。

（こんなの喜んで食べるのってレネスだけでしょ）

期待した分なんだか更に落ち込んだミレイだったが、とりあえず礼を言ったのでそのまま帰ることにした。レネスもいないなら今日も母に物語を読んでもらうしかなさそうだ。

（そうだ、この間の名探偵リジットの続きを読んでもらおう）

ミレイは母に物語を読んで貰うのが大好きだった。最近のお気に入り「名探偵リジット」だ。貴族屋敷の召使の女性リジットが、屋敷で起こる事件を次々に解決していく物語だ。「すべての謎は見えました」という科白で行方不明になった屋敷の主の愛犬を見つけたり、子供の宝物を探してくれる名探偵なのだ。今リジットが探しているのは、屋敷の主の友人の指輪だ。きっとそれはリジットへの求婚の指輪に違いないとミレイは思っている。だからこそとても続きが気になるところだ。昨日つい途中で寝てしまって肝心のところを聞きそびれてしまったのが惜しい。

そんな物語好きなミレイが特に好きなのは勿論、建国王とセイレーンのお話だ。本当の物語は二人が別れ別れになってしまふということはミレイも当然知っているが、母が読んでくれる時は絶対に「王様とセイレーンはずっと仲良くお城で暮らしました」で終わらせ

てくれるのだ。だからこそミレイは忙しいとわかっていても、母に物語を読んでくれとせがまずにはいられない。何もすることがなくなってしまう今日も母におねだりすることにしよう。

家に近づくと、父の姿が見えた。帽子をかぶって上着を着て、いつもよりちゃんとした恰好をしている。

「お父さん、どこかに行くの？」

「ああ、ミレイか。いつも酒を造って貰っているところに行ってくるよ。ああ、そうだ、たまにはミレイも行ってみるか？おいしい果物が食べられるかもしれないぞ」

美味しい果物という言葉にミレイは反応した。レネスのおばさんに貰った酒漬けの果物より、瑞々しい果物の方が美味しいに決まっている。ミレイは喜んで父に飛びついた。

酒造所といいつつも、ミレイと父が到着したその場所は基本は果物農家だけに、周りは広陵とした畑に囲まれていた。

「お父さんは少し仕事の話をしてくるから、ミレイは近くで遊んでおいで。仕事が終わったら一緒に果物を頂こうな」

どうやら果物はまだお預けらしい。仕方がないのでミレイは頷き畑を見て回ることにした。普段は活気ある商店に囲まれているだけに、畑に囲まれたここはなんだかのんびりしていて気持ちがいい。ミレイは道端の小さな花を摘んで冠を作ろうと思いついた。一つ一つ大事に摘んでは左手に集める。そんな作業を繰り返していた時だった。

「ブモォー」

近くから聞こえた鳴き声に、ミレイはびっくりとして花を落としてしまった。

「う、うし？」

鳴き声の方に視線をやると、確かにそこには牛の姿が見える。牛が何かを目がけてズンズン歩いて行くのを農家の男らしき人物が必死に止めている。

「お、おい、こらっそつちじゃないって」

「ブモォ」

「こら、まてって」

「ブモォ」

「ぶもぶも言っでないで止まれって」

「ブモォ」

そのままどん森へと向かっていく牛と男をミレイは茫然と見つめ続けた。

「あれってなんなの？」

疑問の言葉を口にしても勿論答えてくれるものなどいるはずもない。気を取り直してもう一度花を摘もうとしゃがみ込んだ。

「あれ？なんでミレイがここにいるんだ？」

その声にふと顔を上げると先程牛が騒いでいた場所には見慣れた子供が。製粉屋の息子のロジエだ。

「ロジエこそなんでいるのよ」

よっこいしょと立ち上がったミレイは近づいてくるロジエを待ちながら、服についた土ぼこりを払った。一応は女の子だから男の子と会うときは身だしなみに注意をしないとイケない。

「俺は父ちゃんの付きそい」

「なんであんたが付き添うの？」

「母ちゃんが、父ちゃんが浮気しないように見はれって」

そう言っでロジエは肩をすくめた。

ミレイはロジエの父を思い浮かべて溜息をついた。浮気者の旦那さんを持って小母さんも大変だなあと。

「それで、見張っているはずなのになんでこんなところにいるの？こっちには小父さん来てないよ」

「それがさ、父ちゃんが女の人と小屋に向かったから浮気の邪魔しようって追いかけたんだよ」

「なんで二人で小屋に行くと浮気なの？」

「わっかんねーけど、母ちゃんが、絶対父ちゃんと女の人二人きり

にするなつて。特に二人で小屋に行ったら邪魔しろつて」

「ふうん。で邪魔したの？」

「そしたら、いきなり女の人の悲鳴が聞こえたんだよ」

「え？え？小父さん何したの？」

女の人が悲鳴を上げるようなことは一体どんなことをしたのだろつか。まさか女の人に变なことしようとした？でも变なことって一体どんなこと？ミレイはドキドキしながらロジエの続きを待った。「そしたら父ちゃんが小屋から飛び出してきてさ、牛を探せつて」

「牛？なんで？」

「わっかんねーけど、牛探せつて」

「はあ？何がなんだかさっぱりわかんないよ」

小屋で女の人が悲鳴あげて、小父さんが牛を探せ。全然話がつながっていないではないか。牛が浮気とどう関係あるのかがわからない。い。

「だから俺もわかんねんだつてば。それでさ、ミレイ牛見なかったか？」

「ああ、そういえば見たよ。さっき男の人とその辺り歩いてた――」

女の人が悲鳴をあげて、小父さんが牛を探せと言つて――。今朝聞いた家畜泥棒の話――。

カチリと何かが噛みあつた。名探偵リジットの「すべての謎は見えました」という科白がどこから聞こえる。

「そつか。じゃそれ父ちゃんに言つてくる――ぐえつ」

背を向けたロジエの襟元をミレイはぐつと握りしめた。

「ロジエ！家畜泥棒だわ！」

「げほつ、ぐえつ、なんでもいいから離して、くるしつ」

苦しがつているロジエなどがまっている場合じゃない。ミレイは益々手に力を込め断言した。

「こうなつたら、二人で家畜泥棒を探すんだから！」

小さな約束 その1（後書き）

今回はミレイとロジエの話です。
いづれレネスも出てきますので、
数話お付き合いください。

小さな約束 その2

牛とその牛を連れ去った家畜泥棒を追って、ミレイとロジエも行動を開始した。

いきなり自分がいなくなったら父が心配するかもしれないが、これは探偵ミレイの初仕事だ。そんなことを気にしている場合ではないのだ。探偵として有名になれば、お金持ちの紳士のお嫁さんになれる好機チャンスが来るに決まってる。自分の将来がかかった大事な仕事。これを逃してなるものかとミレイは張りきった。

「なあ、本当にお前が見たのって家畜泥棒だったのか？」

「そうよっ、絶対にそうだわ。だって牛がいなくなっただってロジエが言っただじゃないの。あの牛だってロジエが来た方向から来たのよ。だから絶対にそうよっ」

ミレイは鼻息荒く言い放った。持っていた花の花弁が揺れたことで自分の鼻息の荒さに気付いくと、これではどちらが牛かわからないと、慌てて鼻を押さえた。お金持ちの紳士にお嫁に行く女の子が鼻の穴を広げている場合ではなかったと自分を窘めた。

「でもさあ、人間が牛に引っ張られて行っただろ？なんで家畜泥棒が牛に引っ張られるんだよ」

もっともな意見だ。だが、自分より格下と思っているロジエにそれを指摘されると、素直に領けないのが女心というものだ。

「ロジエのくせにいいところに気が付いたわね。誉めてあげる」

ツンと澄まして偉そうにそんなことを言っただと、ロジエは両手を腰に当ててふんぞり返った。

「さっすが俺だろ？お前やレネスと違って見るところはちゃんと見てるんだよ」

馬鹿にされたことにまったく気づいていないらしい。

（相変わらず、おめでたいわね、ロジエったら）

だからいつもミレイとレネスに小間使いの様にこき使われるのだ。

やれ菓子を持つて来いだ、足が疲れたからおんぶしろだのと。ロジエ本人は自分が頼りがいのある男だからだと思っているふしがあるが、実際のところなんでも言うことを聞いてくれる小間使いとしかミレイは思っていなかったりする。

「いーい？あたしの予想だと、あの牛は変な薬の入った餌でも食べさせて操られてるのよ。だから一人でも家畜泥棒のアジトに向かっていけるのよ」

当然、この話はミレイが今しがたとつてつけた話だ。いや、とつてつけたのではなく、探偵の推理だったと心の中で訂正を入れる。

「おおつ、そんな牛を操れるような薬なんてあるのか？すげーな。そしたらその薬飲んだら俺も操られたりするかな？」

妙な想像をして楽しそうに目を煌めかせているロジエに、ミレイは呆れた。何が悲しくて自分が薬で操られなければならないのだろうか。ロジエの思いつきはどうもわけがわからない。そもそもロジエなんて操るのに薬など必要ないではないか。

「さあ、どうかしらね。そんな話はいいから、牛を追うわよ」

面倒になったミレイは話を軽く流して、黙々と歩き始めた。なんだが最初よりやる気が抜け落ちた気がするのは気のせいだろうか。

「おおつ、俺もなんだかやる気が出て来たよ。家畜泥棒、俺達で絶対つかまえてやろうな！」

ミレイとは反対にロジエは一気にやる気が沸いたようだ。眩しい笑顔が何故か勘にさわる。助手の選択を誤ったかもしれないとミレイはこっさり溜息をついた。

「なあー、どこまで行くんだよー。まだ牛見つからないのかよー」
背後から間延びしたロジエの声が聞こえてくる。ロジエのやる気の容器は異常に容量が少なかったらしい。さほど歩いたわけでもないのにすでに厭きている。

振り返ったミレイは小言を言う時の母のように、片手を腰に当て、

空いている方の手の人差し指を立てた。

「いいー？あたしが牛を見て追い始めるまでの間には少し時間があるのよ。そうそう簡単に追い付くわけじゃないじゃないの」

「えー、いつ見つかるんだよ」

ロジエはうんざりと顔をしかめている。やる気もないどころか根気もない。

「知らないわよ、でもこっちに來たのは間違いないんだから。だからしないですっかり歩いてよ」

「でもさあ、その先進むと山の中に入ってしまうぞ」

「そうね」

「そうねって、山の中まで入る気なのかよー。山に牛なんていないだろー」

「何言ってるのよ、こっちに來たんだからいるに決まってるじゃない」

「俺達だけで山の中なんて入ったら、迷うんじゃないのか。俺父ちゃんに山の中には行くなよって言われてるんだよ」

ロジエは情けない顔をしている。男のくせにだらしないとミレイは思った。

「あたしがいたら迷わないわよ」

ミレイは当然のようにそう言っと、人差し指を立ていた手も腰に当て胸を張った。

「本当かよ」

「ええ、本当よ」

だってミレイは探偵なのだ。探偵が道に迷うわけじゃないか。探偵は山の中でもどこだって謎をすぐ見つけられるのだ。道だっけすぐ見つけられるに決まってる。

「そっか。ミレイがそう言うなら大丈夫かなあ」

「勿論よ」

ミレイは益々体をのけぞらせた。自信の顯れた。

「ところでさ、ミレイ」

「何？」

「ミレイからなんか良い匂いするんだけど」

「え？」

「なんか甘いにおい」

ロジエは目を細めてくんとミレイの匂いをかいでいる。まるで犬のようだ。

その言葉にミレイは思い当たることがあった。母さんの香油をこっそり借りてつけていたのだ。甘い花の香りのするその香油はミレイを大人の女性にしてくれるような気がして、母の目を盗んでは少しだけ手巾に沁み込ませていた。

「良い匂いー」

ロジエはミレイに接近すると、益々匂いをかいでいる。

「ちよつと、やだロジエ近づきすぎっ」

ミレイにとってロジエは小間使いではあるのだが、こつも接近され匂いを嗅がれると、なんだか恥ずかしいような、くずぐつたいような気がしてくる。

（あれ？ロジエなのに、なんかドキドキしてきたかも）

そんなことをミレイが思った瞬間だった。

「あ、思い出した、この匂い、レネスのところの果実酒の匂いだ」

「は？」

「ミレイ、レネスの家行つて来たの？」

「う、うん」

「あー、じゃ、杏貰った？果実酒に漬けたやつ」

「貰ったけど……」

「その匂いだ！いいなー、俺も食べたい。いいなー、あれうまいんだよなー」

くんくんくんとロジエはまた匂いを嗅ぎ始めた。ミレイのポケットのあたりを。

「そついえば、貰ったままポケットに入れてたんだつた」

呟きながら、ミレイはその杏を取り出した。件の香油を少し沁み

込ませた手巾に包んでいたにもかかわらず、この存在に気付くとは。ロジエの嗅覚は動物並みだとミレイは思った。ついでに、そんなロジエに少しだけドキドキした自分が情けないとも――。

「あー、二個もある」

まるで一つをくれとばかりに、ロジエは二個というところを強調している。

「――欲しいの？」

「うん。欲しい」

両手を組んでミレイを見つめているロジエが本当の犬に見える。待てをさせられている犬だ。ちぎれんばかりに振られている尻尾が見えるのは目の錯覚だろうか。

「あげてもいいわよ」

「本当？」

「うん、ただし、これ食べたらもう疲れただけの厭きただのはなしよ」

「うんっうんっ！」

「じゃ、特別にあたしの分まであげるわ。二個とも食べていいわよ」

「え？本当か？やったー！」

そうして、ミレイから奪い取るがごとくの勢いで杏を手にしたロジエは大きな口を開けて頬張った。一つずつ食べるのかと思いきや、一気に二つもだ。むぐむぐとそれはそれは美味しそうに食べている。「んまいー！俺おやつの中でこれ一番好き。レネスも時々持つてきてくれるんだけど、ケチだからいつも一個しかくれないんだよ」

「だってレネスもそれ大好きなんですってもの」

自分が大好きな物を一つでも分け与えてくれるなら、有難いことではないかとミレイは思った。ロジエは子供だけにとっても欲張りだ。でもレネスも好きならロジエの前に出さなきゃいいのにも思う。ロジエの前に出したら自分の分け前が減ってしまうのだから。

そんなことを考えながら、満面の笑みで幸せそうに杏を貪り食うロジエを見ていたミレイは、杏をあげてしまつことを少し後悔する。そこまでレネスもロジエも絶賛するほどの物ならば、ポケットから

出さず以後で自分で食べれば良かったと。

（明日レネスの家に行ったら、小母さんにおねだりしてみよう）

きつと小母さんは優しいからすぐにくれるはずだ。ただし、明日は絶対にロジエは連れて行かない。満足そうに味の残る指までしゃぶっているロジエを横目にそう決めた。

「食べたなら行くわよ。これでやる気も戻ったでしょう」

「おうつ。さつさと行って家畜泥棒つかまえるぞー」

すっかり復活したロジエを追い立て、今度こそ牛を追って歩き始めたのだった。目指すはミレイの幸せな将来の為にだ。

小さな約束 その2（後書き）

子供はみんな食いしん坊（笑）

小さな約束 その3

「おっ、ダンゴ虫発見」

そう言うなり、ロジエはしゃがみこんだ。

「何よ、ダンゴ虫なんてどこにでもいるじゃない」

発見というほどの発見などではないとミレイは思う。何も今ここで喜んでしゃがみ込むほどの何ものもない。どうせ見つけるならダンゴ虫などではなく、綺麗な花とか綺麗な蝶とかならいいのに、ロジエが見つけたのはよりよもよつて、どこにだっているダンゴ虫一匹だ。

「この間さー、レネスと丸めたダンゴ虫をどこまで転がせるか競争したら、俺負けたんだよ。だからちよつと練習させてくれよ」

「何も今しなくてもいいじゃない」

「いいじゃないか、一回だけだからさ」

ロジエが軽くつつくと、小さなダンゴ虫はあっさり丸まった。すると今度は慣れた手つきで勢いをつけた中指で弾いた。丸まったダンゴ虫がコロコロと回転しながら遠のいていく。

「お、今日は結構いけたかも」

嬉しげなロジエの声にミレイは小さく舌打ちをした。ダンゴ虫を転がして何が楽しいというのだろうか。

二人は今、山の麓にある森の中にいた。ここに入ってからというもの、ロジエはダンゴ虫に限らず次々と変な生き物を見つけ、それで遊びの繰り返しで、ミレイの苛立ちは増すばかりだ。

「はあ……もう、ロジエさっきから道草ばかりじゃないの。そんなダンゴ虫の転がし競争なんてどうでもいいから、行くわよ。あたし達が探しているのはムシじゃなくて、ウシ！『シ』だけ合つても仕方ないじゃないのよ。ほらほら立って」

「なんだよ、いいじゃないかちよつとくらい」

ミレイに言われるがまま立ち上がったロジエは唇を尖らせ不満げ

だ。むしろ唇を突き出して不満顔をしたいのはこっちの方だとミレイは思った。これでは何のために杏を二つともくれてやったのかわからないではないか。少し歩く度に何かを見つけてはしゃがみ込むロジエに苛立ちを通り越してうんざりしてきた。

「お、まだいるぞダンゴ虫」

立ちあがったロジエはまたすぐダンゴ虫を見つけてしまったようだ。

「もういいから、今度ダンゴ虫で遊んだらひっぱたくから！」

「ちえー。ダンゴ虫転がし面白いのに。ミレイ絶対やらないもんね」

「あたり前よ、あんなの転がしても全然おもしろくないじゃない。」

レネスもどうかしてるわ。そんなつまらない遊びするなんて。んもうつ、それより行くわよ、こんなに道草ばかりしてたら追い付くものも追い付かないじゃない」

「わかったよ……」

ずんずんと歩き始めるミレイを追って、ロジエもやつと一步を踏み出した足音が聞こえる。ほっとしたのもつかの間、その音はすぐに止まった。

「なあ、ミレイ、見ろよあれ。ダンゴ虫の——」

「もう、ダンゴ虫はいいってば！」

そろそろミレイの堪忍袋の緒は限界だ。本当になんてやつを助手にしてしまったのだろうか。そう思いながらロジエを振り返ったミレイだったが、ついついロジエの指差す先に視線を移してしまった。

「何あれ？ダンゴ虫の行列？」

道の端をたくさんダンゴ虫が行列をなして歩いている。蟻の行列は良く見るが、ダンゴ虫の行列は初めてだ。集まっているならともかく、何故行列になっているのか、ミレイも不思議に思った。

「な、な、すげーだろ。さっきのこの行列からはぐれたやつだったんだな。どこに向かうんだろ。ちよつと追いかけてみようぜ」

「ちよつと、何言ってるの、あたし達が追いかけるのは——ちよつと、ロジエ！」

ミレイの意見も虚しく、ロジエはダンゴ虫の先頭を目指し走り出した。慌ててミレイもそれを追う。役立たずの助手とはいえ、こんな森の中で一人にされるのは御免被る。

少ししたところでロジエが立ち止まっていた。ダンゴ虫の行列の先頭を見つけたのだろうか。近づいて足元を見る。が、予想に反して行列はまだ終わっていない。

「なんだ、まだ続いてるじゃないの行列。まだまだ続くのかもね。さつ、そろそろ本当の仕事に戻ろうよ。ムシじゃなくて、ウシ探し。そうしてミレイがロジエを見ると、ロジエはどこかぼんやりしている。」

「ロジエ？何ぼけつとしてるの？行くわよ、牛探しに」

「——こつちだ」

「え？何？」

ミレイの問いに答えることなく、ロジエはまたしても一人先へ進み始めた。

「何、牛見つけたの？」

何も応えることなくロジエはずんずん先へと進む。

「ちよつと、ロジエったら——わっ」

様子のおかしいロジエの腕を掴んでみたが、乱暴なしぐさで振り払われた。

「何？なんなの一体？」

ロジエが自分に対して今の様な行動をとったのは初めてのことであった。驚きでミレイは茫然と振り払われた自分の手を見つめた。まさか格下であるロジエにあの様な扱いをされるとは。助手の分際で名探偵ミレイに対し何てことをしてくれたのだろう。杏を二つもくれてやったにも関わらず、恩を仇で返されるとは思いもしなかった。散々の道草の拳句、ミレイを振り払って先に行くとは何たることだろうか。考えれば考える程、ふつふつとミレイの中に怒りが沸いてくる。

「ロジエめ！あたしに逆らったこと後悔させてやるんだから！」

ミレイは猛然と先行くロジエを追い始めた。牛並みの鼻息の荒さで。

思ってた以上にロジエの速度は速く、なかなか追いつけない。なんだかなり森の奥深くに来てしまっている気もするが、ここまで来てまさかロジエを置いて引き返すことも出来ない。一度足を止めたミレイは荒くなった息を整えることにした。先行くロジエのことも気になるが、自分の体力の方が心配だ。普段より運動量が多いだけに、呼吸がとても苦しく感じる。

「ロジエだけ、なんであんなに元気なのかしら」

木の根などが広がる足場の悪い森を歩くのは、小さなミレイの体力をかなり消耗する。額に浮かんだ汗を、手巾で拭いた。途端にふわりと広がる甘い香りに気分が落ち着く。

（やっぱり、杏よりこっちの方がいい匂いだわ）

少しだけ、杏の匂いも沁みついていたりもするが。

（そういえば、お腹空いて来た）

同時にミレイのお腹がきゅうつと鳴った。本当だったらもう今頃父と一緒に果物を食べていたかもしれないのに、何故自分はこんなところにいるのだろう。急にミレイの中に心細さが広がって来た。名探偵ミレイのはずなのに、なにも見つけられず、果ては助手まで見失ってしまった。今日自分がしたかったのは一体何だったのだろう。ミレイは俯いて手巾を見つめた。

ふと、どこからか聞こえる声にミレイは気が付いた。流れる旋律にそれは歌声だとわかる。

（なんて歌かはわからないけど、綺麗な歌）

誰がどこでこの歌を歌っているのだろうか。ミレイは何故か無性にそれを確認したくなった。きよろきよろと辺りを見回して歌の聞こえてくる方向を探った。

「あ、ロジエが向かった方じゃない？」

知らず知らずに声が漏れた。もしかしたら、ロジエもこの歌に向

かつて行ったのかもしれない。ミレイより耳がいいとは知らなかった。何事もミレイより下だと思っただけに、意外な発見だ。そんなことを考えながら足は歌の聞こえる方向に動いていく。早く行かなければ終わってしまうかもしれない。奇妙な切迫感を感じ、足の動きは知らず知らず早まっていた。

目指す場所に着いたミレイは、その光景に息を飲んだ。

そこには、森に住む動物という動物が集まる幻想的であり、異様な光景が広がっていた。大きな熊はゆったりと寝そべり、シカやうさぎの姿も見え、小さなリスも樹の枝に集っている。リスの上の枝には小鳥が集い、その樹の傍には――。

「ロジェ！」

更にその横には、牛をつれて行った大人の男性と、ミレイの最大の目的であった牛の姿。それだけではない、他にも数頭の牛の姿が見える。

「ええっ？ さっきの牛だけじゃないの？」

毛並みの小奇麗さから言って明らかに野牛などではなく、家畜だ。ミレイを驚かせることはまだまだあった。茫然とロジェを目指して歩いていたところ、何かに足を取られ足元を見ると、それはただの木の根ではあったのだが、その傍に列をなすものに仰天した。

「こ、これさっきのダンゴ虫の行列？ まさかここを目指してたの？」

見ればあちこちに虫の行列が見える。そして――ウイステリアの花々を背に、蝶の大群が舞うように飛びまわる中心にいたのは――。

「レネス！」

小さな約束 その3（後書き）

たまには早めの更新を。

もう一話くらいでミレイとロジェの話は終わる予定です。

そろそろ、続編に向けて動き出そうかなと考慮中です。

あ、番外編は幼馴染の話が終わってもまだ別の話がポツポツ更新されますので

引き続きお付き合いくださいませー。

小さな約束 その4

ミレイはただただ、歌い続けるレネスに目を奪われていた。

色とりどりの花や蝶に囲まれ、歌い続けるレネスのその光景は幻想的で、見るものを虜にする。

物心ついた時から毎日のように見ていたレネスのはずなのに、何故か今のレネスはやけに綺麗に見える。いつもの子供らしい表情ではなく、どこか大人びたレネスがそこにいる。

そんなレネスが歌い続ける歌は、内容もそうだが言葉すらミレイにはさっぱり理解出来ない物ではあったが、何故か心惹かれる。子供特有の少し甲高い声でありながらも、抑揚のある音階は、甘く切なく、あたりの生き物たちを魅了していた。

もうミレイは気付いていた。レネスが一体何者なのかを。

（だって、あたし名探偵だもんね）

通りがかる人を惹きつけるその歌声は、物語で聞いた建国王とセイレーンの出会いの場面そのままだとミレイは思った。

（やっぱり、セイレーン様は海になんて還ってなかった）

母の語ってくれた「二人はお城で幸せに暮らしました」は本当だったのだ。でも――。

「だったら何でレネスはお姫様じゃないの？」

伝説の二人がお城で幸せに暮らしたのなら、その子孫だってお城で幸せに暮らしているはずだ。なのに、今目の前で歌う現在のセイレーンは市井も育ちもいいとこ、大衆食堂の一人娘だ。綺麗なドレスも着ていなければ、上品な仕草だって全然しない。むしろミレイと違って下品なところがあるとすら思えた。

「じゃあ、セイレーン様はお城じゃなく、どこに行ったんだろう？」

伝説の通り愛する建国王と幸せには暮らせなかったということなのだろうか。だから海に還ったと伝えられたのだろうか。お城が嫌になっていなくなってしまったのだろうか。だとしたら、今ここで

歌っているレネスは何者なのだろうか。そこまで考えてみると、やはりセイレーン様はどこにも行かずお城にいたと言う方がつじまが合う。そう考えた時、ミレイの心の中に何かもやもやする想いが生まれた。もしかしたら、自分はどこでもないところに居合わせてしまったのではないだろうか。見てはいけないものを見たのかもしれない。そんな想いに囚われた。

「もしかして……………レネスのお父さんとお母さんって、駆落ちしたとか？」

本当は王子様とかお姫様だったのかもしれない。愛の逃避行という物をして、今の生活になったというのも考えられる。そういえばレネスのところの小父さんはどこか陰りがあつたようにも見える。そして無精髭に覆われた顔をよくよく思い出せば結構洗練されたイ男だったかもしれない。となると小父さんが王子様で、そして逃亡の果てに生活に困った小父さんは食堂を始めて、今度は食材に困って家畜泥棒を……。

「ということは、まさか、レネスが牛泥棒？」

小母さんの言ってたおつかいとはこのことだったのだ。大変なことになったとミレイは慌てた。これは絶対他の人には知られてはいけないことだ。もし知られたらレネスは兵士に捕まえられて、牢屋に入れられてしまう。そして城を逃げ出した王子様の娘だとバレたら、殺されてしまうかもしれない。

「どうしたらいいの？」

途方にくれたミレイから零れた声に反応してくれるものは誰もいなかった。誰もがレネスだけに心を奪われているからだ。

レネスが牛泥棒だと気付いているのは他には誰もいないということとで安心だが、こつも無反応だと同じ女の子としては少し面白い気がする。

（まあ、いいけど。牛泥棒とはいえ伝説のセイレーン様に叶うわけないもんね）

いくら自分の方が可愛いとはいえ、相手は伝説の魔物だ。この歌

声が響く中ミレイに勝つ要素などないのだ。ミレイは自分に自信はあっても、まだまだ魅力不足なことはわかっていた。女の修行はまだ始まったばかりで、実のところ名探偵の修行より厳しく長い道のりなのもわかってる。今日のところはレネスに花を持たせてやろうと、自分の長い赤毛を肩から払った。

レネスの歌声はまだ続いている。思考の渦から抜け出したミレイは牛泥棒の話も忘れ、憧れのセイレーン様の歌声を目を閉じて堪能していた。優しく甘い歌声に、まるで自分が空に浮かんでいるような気さえしてくる。そんなはずはないよね？とミレイは少しの期待と、大きな確信を持って、確認のために目を開いた。自分の足はきっちり地面を踏みしめている。

（いくらなんでもそこまでではないか）

軽く笑ったミレイは、もう一度レネスへと意識を集中させた。

「あれ？」

視界に入る妙な光景にミレイは軽く目をこすってみた。目を閉じているうちに目がおかしくなっただろうか。何度目をこすってみても、その光景は変わることはない。何故かレネスの姿が見えないのだ。声は聞こえるのにレネスの姿がない。先程までいたはずの場所には揺れ動く黒い塊があるばかり。

「何、あの塊？あんなのあった？」

ゆらゆらと波打つように揺れ動く黒い塊。よくよく目を凝らしたミレイはその正体に驚愕した。

「黒揚羽！」

そう叫んだ直後、突然強烈な音と共に頭を殴られたかのような衝撃を感じ、ミレイの意識はそこで途切れた。

何かが自分の頬に触れている気配に、ぼんやりと目を覚ました。ふんふんと鼻息の様な物が聞こえ、焦点をそれに合わせたミレイは

仰天して、声を上げた。

「いやっ！」

ミレイの声に驚いた鹿は一目散にその場を離れて行った。危うく鹿に自慢の髪を食べられてしまうところだった。折角母に今朝も綺麗に梳いてもらったというのに、今やその自慢の髪は草や泥にまみれていた。なんだかミレイはとても悲しい気持ちになってしまった。こんなことなら、牛など追ってこんなところに来るべきではなかったのだ。それもこれもレネスが歌で牛を惹きつけるからだ。でなければ森の中まで入ろうなど思わなかったのに。

（そういえばレネスはどうしたんだろう？）

そこでふと、ミレイは辺りを見回した。辺りにはすでにレネスの姿も、森の動物たちの姿もない。レネスはミレイには気付かずに帰ってしまったようだ。見えるのは倒れた牛の姿だけだ。

（レネス、牛連れて行かなかったんだ）

「う、うーん」

近くから聞こえた声にミレイはびくりと体を揺らした。

むっくりと起きあがったのはロジェだった。ミレイと同じように頭や衣服の至る所に草やドロを付けている。

「ロジェ、良かった大丈夫だったのね」

「んー」

ロジェはまだどこかぼんやりしている。

「ロジェ？」

「んー」

あまりにぼんやりしている様子にミレイは不安になった。倒れた時にどこがおかしなところに頭をぶつけたのだろうか。

「あんだ、あたしがわかる？」

「んー、ミレイ」

自分のことがちゃんとわかっているのに安心した。

「ロジェ、あたし達がここに何しにきて、ここで何を見たか覚えてる？」

「んーと、牛とリスと熊と……あと……ああつ！レネス！」

ミレイはロジエからつらつらと出る言葉に、うんうんと頷いていたのだが、最後のレネスと叫んだロジエの表情に驚いた。この驚き方は、どうやらロジエも事の顛末に気づいてしまったらしい。

「ああ、バカだと思ってもロジエも気づいていたのね、レネスが何をしてたか。でもね、レネスはあたし達の大事な友達だから、何があつたかは秘密にしましょう。じゃないとレネスが大変なことになっちゃうから」

その言葉にロジエは勢いよく何度も首を縦に振っている。上手い具合に理解もしてくれたようだ。レネスが牛泥棒だということは何何でも隠し通して、レネスにも二度とやらないと約束させよう。そうしたら全部うまくいくはずだ。レネスが殺されることもなく、牛泥棒の被害だって収まるとミレイは安堵の吐息を洩らした。

それから程なくして、いなくなったミレイを心配して探していた酒造所の人達に無事に発見され、ミレイとロジエはお互いの父の元に戻った。

あとからミレイの両親の話を盗み聞きしたところによると、牛泥棒はレネスではなく、牛に引きずられていた男の人だったことが判明したらしい。牛たちは元気に各家に戻り、今日も農業に従事しているらしい。つまりレネスは牛泥棒ではなかったのだ。そのことに安堵したミレイはすぐさまロジエにもそのことを報告に行ったのだが、ロジエが口にした言葉に驚き呆れることになった。

「は？何ミレイ、レネスが牛泥棒だと思っていたのか？俺のレネスがそんなことするわけないだろ」

「お、俺の？ロジエ何言つて……………」

「俺、大きくなったらレネスと結婚するから」

「は？」

「そついうわけで、俺今からレネスに会いに行くから邪魔すんなよ

な。じゃあな」

「なっ！邪魔って何よ！あたしが今日はレネスと遊ぶんだから、あんなこそ邪——うっそお、あたし出し抜かれた？」

今日こそレネスといっぱい遊ぼうと思っていたのに、まさかの邪魔者の出現にミレイは茫然とした。こんなことなら牛泥棒のことなど教えに来なければよかったと後悔した。そしたら先にレネスと遊べたのに。

「あれ？ミレイちゃん？」

茫然としていたミレイだったが、自分を呼ぶ声に気づき振り向いた。目の前にいたのはミレイを森まで探しに来てくれた酒造所のお兄さんだ。確か名前はセナムだったと思う。汗だくになってミレイを探してくれた姿を見て以来気になる存在だ。思ってもみない人の出現にミレイの小さな胸はときめいた。

「これからミレイちゃんのところ行くんだけど、もし良かったら連れて行ってくれないかな。実は行くの初めてなんだ」

ちよつと恥ずかしそうにそう頼むお兄さんにミレイは勢い良く頷く。仕方がないから今日のところはレネスはロジェに譲ってやると恩着せがましいことを考え、満面の笑みで「こつち、こつち」とお兄さんの手を引く。

その後、自分で字が読めるようになったミレイが好んで読んだ本は、『名探偵リジット』ではなく『年上の彼を落とす百の方法』だったらしい。

小さな約束 その4（後書き）

小さなミレイの話はいかがだったでしょうか。
ミレイの番外編はこれで終わりです。
次は別の人の番外編を書く予定です。
ここまで読んでくれてありがとうございました。

哀愁のご主人様

コトリコトリと小さな音を立てながら、目の前に茶器が並べられていくのを、キャンデロは複雑な気持ちで見つめていた。繊細な茶器を置くには不似合いなたくましい太い腕。腕から指に至るまで体毛に覆われたその太い腕で置かれる茶請けはキャンデロの食欲を悪戯に減退させてくれる。太い腕や指のくせによくこんなに丁寧に茶器を置けるなと感心しつつも、それとこれは話が別だ。キャンデロは数週間前までの屋敷の様子に想いを馳せた。

「ご主人様、今日のお茶請けは私が焼いてみましたのよ、是非ご賞味くださいませね」

小鳥のさえずりの様に可愛らしい声が朗らかに響き、白く細い腕の先にある小さな手で茶請けの皿が置かれる。

「そうですか、そうですか。それは楽しみですね。ああ、そうだ、信じてはいますけど念の為、毒味をお願いしましょうかね」

そうして私が菓子を手にして可愛らしい召使へと差し出す。一瞬驚いた顔をした召使がな少し哀しげな顔で手を差し出すのを見て、私は小さく笑う。

「これこれ、手は必要ありませんよ、私が食べさせてあげますから」

「えっ、ご主人様がですか？」

「ええ、さあ、その可愛らしい口を開いて……………」

「そ、そんな恥ずかしいです……………」

「何を言っているんですか、これは毒味ですから大事な仕事ですよ。はい、あーん」

「は、はい。では失礼いたしました……………あーん」

ガリツという激しい音にキャンデロは目を見開いた。可愛い顔して随分思い切り齧りついてくれる——と、目の前にいたのは剃り残した髭の残るいかつい男の顔。至近距離で目を爛々と光らせバリンボリンと激しい音を立てて焼き菓子を食べている。

「問題ありません」

「そ、そうですか」

引きつりそうになる顔を必死で我慢しながら、キャンデロは鷹揚に頷いた。過去に思いを馳せている間に、いつの間にか哀しいほどの現実に舞い戻ってしまっただけらしい。いつそあのまま永遠に過去を彷徨っていたかったと、そっと涙を拭いた。

「うーん、もう少しだけ右のあたり………あー、そこそこっ。くうーきくわあ。腕上げたわねえクリオ」

その声に辛い現実の真つただ中にいるキャンデロはピクリと肩を揺らした。これもまた現実のひとコマだ。ちらりと声の出所へと視線をやった。

「そりゃ、どーも。毎日やらされてたら、そりゃ腕も上がりますよ」
長椅子にうつ伏せで寝そべる女性と、その背に乗る様にしてその女性の背中を揉んでいる男の姿が見える。キャンデロの傍に控える男と違い、体つきのいい色男なのが気に入らない。色男は自分の専売特許のはずなのに、なかなかどうして男臭さを前面に押し出したその男からは色気がぶんぶんと醸し出されている。

「いたたたたっ、あ、大丈夫だから、そのまま、そのまま、やめな
いで……つつつつ」

「ここですか？」

「うんうん、そこそこ……ああっいいわあ」

「う——うおっほん」

恍惚とした女性の声に、キャンデロはついに溜まらなくなり大きく咳払いをした。その部屋にいる人間の視線が自分へと集中したのを受け少し戸惑った。

（わ、態とらし過ぎたか？）

「ご主人様何か？」

主人の不満を感じ取ったのか、キャンデロの一番近くにいたゴツイ召使がそっと近くに寄って来た。体もゴツければ顔もゴツイ。ついでに言うなら声もゴツイ。男臭さは半端ないと言っていいたろう。

その威圧感に内心「うつ」とのけ反りながらも威厳を込めて言った。あくまでもここは自分の屋敷。自分こそが当主なのだ。

「彼女と話がありますので、みな下がって結構です」

その言葉に部屋にいた召使の全員が頷き席を外していく。たったの三人しかいなかったというのに、狭く感じていた部屋がいつもの広さへと戻って行く。まるで別の部屋にいた感覚になっていたが、彼らがいなくなったとたん、いつも慣れ親しんだ自慢の調度品が立ち並ぶ美しい部屋になった。やはり美しさは必要不可欠だとつくづく感じる。

「何よ、折角肩揉んで貰ってたつていうのに」

そう言いながら起きあがって腕を回している女性。キャンデロの最愛の人スカリナだ。

相変わらず今日も美しい、艶やかな栗色の長い髪、シミ一つない白い相貌、気の強さの窺える整った眉、力強さの窺える瞳、余分な肉のないすっきりした鼻筋、薄くも厚くもない唇。完璧だとキャンデロは思う。問題があるとすれば――。

「ちよつと、本気でお茶だけなわけ？あたし体中が凝りまくってるんだから、血行良くするお酒出してくれない？」

やはり口の悪さと酒癖の悪さだろう。

「仕方ないわね、クリオに頼もうかしら」

その言葉にキャンデロは慌てて席を立つとスナリナの元へと周りこむ。今にも立ち上がりそうなスカリナの肩を押さえその場に止めた。

「ま、待ってください。後で私が運んで来ますから、その前にちよつと話を……」

「あら、何？本当に話あったのね。てつきりクリオに嫉妬しただけなのかと思つたわ」

まさに凶星。やはりこの人にはかなわないと思つた。先手先手と商売をしてきた自分だが、彼女に対しては全てが後手後手だ。となればキャンデロに残された道は一つ。泣き落とししかない。

「そうですよ！まさに嫉妬ですよ、嫉妬！だから、もう許してくださいよ、私が悪かったのは分かってますから。本気で反省してますから」

座る彼女の膝にすがりつくかのように跪いての懇願だ。まさか自分でもここまでするとは思っていなかったのが本音だが、さすがに限界だった。

「ふうん、反省ね。その一言ですむのかしらね、私のたった一人の血縁を競売にかけといて」

キャンデロの渾身の懇願にも、スカリナは眉一つ動かさない。

「そうは言ってもですね、あなたの姪だなんて一言も言わなかったじゃないですか。白砂亭の娘を保護しろとしか聞いてないですよ、私は」

「へえ、保護するっていうのは売り物にするってことなのねえ。知らなかったわあ」

スナリナの目がすうつと細くなった。

「いや、あの、そのですね、保護すると言っても容易にはいかなくて……近辺探らせてるうちに彼女が色んな人から狙われてるのがわかってですね……」

尻すぼみにもごもご言うしかない。こうなると自分の負けは間違いない。次に言われる言葉がキャンデロには見えていた。

「理由になってないわよ。狙われてるから保護を頼んだのよ。それなのに競売にかけるっていうのはどういうことなのよ。それも下女だのなんだの罵詈雑言まで吐いてくれて」

「まさかあなたに似ても似つかないのに、姪だと思うわけじゃないじゃないですか」

「似てるわよ、あたしにそっくり」

「どこがですか？」

「不器用なところ？」

「そんなの表面的になんてわからないじゃないですか！」

「何言ってるのよ、ちゃんとあの子見てれば可愛い不器用さ加減わ

かるわよ！」

「そこまでじっくり眺めてなんかいませんよ、私がじっくり見るのは美しい者だけですよ！だからこそあなたのことは、いつでもじっくり愛でていたい……………」

ぎゅっと手を握りしめてそう言えば、スカリナは「うっ」と言葉をつまらせた。ほんの少しだが頬が赤いような気がする。たたみ掛けるなら今だと思った。

「そうなんです。僕はあなたを自分一人で愛でていたいのです。だから………… あなたの傍に他の男性が侍^{はべ}っているのは見たくない……………」

スカリナの手を握りしめたまま、情熱を込めた瞳で彼女を見上げる。これで落ちない女^{ひと}などいなかった。案の定彼女の表情には少しの動揺が窺える。

「…………… 別に侍^{はべ}つてはいないじゃないの。彼らはあくまでも屋敷の召使よ。今のところは」

「でしたら、もう終りにしていただけませんか。私だけのあなたでいて欲しいのです」

そしてむさ苦しい男たちがいなくなった暁には、以前のように可愛らしい召使だけを屋敷に置いて——。そう考えた矢先、目の前の冷たい視線にぶつかった。

「ああ、そうよね、彼らいなくなったらまたあの可愛らしい召使達に囲まれて、アハハウフフの生活が待っていたものね」

真面目に相手した自分が馬鹿だったと言わんばかりに、キャンデロの手を振り払うと立ち上がった。

「え、いや、その、それは一瞬考えただけで……………」

慌ててキャンデロも立ちあがるが、スカリナは素早くドアへと進んでいく。

「クリオ！外套を持ってきて」

その声を聞きつけたクリオという召使がすぐにドアを開けた。

「お出かけで？」

「いえ、引越しよ。外套と一緒に私の荷物もさつさと纏めて頂戴」
「へえ？了解」

一瞬驚いたような表情をしたものの、クリオは余計なことは一切聞かずに動き始めた。それを見て益々キャンデロは慌てた。

「スカリー、僕はあなたに出て行って欲しいわけではなくて……」

「ご主人様」

スカリナへ言い募ろうとするキャンデロの言葉を野太い男の声が遮った。

「な、なんですか」

「ナデイン様が本日の三回目の失神を致しましたが、いかがでしたでしょうか」

ナデインの失神。つまりはスカリナの罰であるマンドレイクの収穫を三回行ったということだ。キャンデロの温室に百本近く植えられたそれを収穫しきるには、まだ数週間はかかると思われた。

気の毒に、という思いと、よりにもよって毒を飲ませスカリナの姪の命を危険に晒した報いだという思いがキャンデロの中で交錯したが、今はそれどころではない。

「ほつといていいわ。それよりあなたは大丈夫？」

「はい。姐さん特製の耳栓『無音くん』のおかげで問題ありません」

「そう。それなら私達ここから出るから、あなたも準備なさい」

「承知」

そしてその男もまたすぐに動き始めた。キャンデロの焦りはいや増した。

「スカリー……まさか本気で出て行くのですか……」

スタスタと屋敷中を歩き周り、ここを去る準備を進むめるスカリナの後をおろおろと追うしかない。

「勿論よ。丁度良く他の仕事も入ったのよ」

「ほ、他の仕事？」

「ええ」

「姐さん準備出来ましたぜ」

「そう、じゃあ行きましょうか」

クリオに外套を着せられ、スカリナが自らの髪を外套の中から外へとはらうのを茫然と見る。

「スカリー……」

スカリナがやつと自分へと視線を合わせてくれた。きっと今自分はとても情けない表情をしているに違いない。スカリナが同情をするほどの。そう期待せずにはいられない。

「やだ、なんて顔してるのよ」

「僕はあなたに出ていって欲しくない……」

「あら、あたしがいなくなったら、あなたの生活も元に戻るわよ」

「ですが……」

突然自分の顔に衝撃が走った。スカリナの手には見たことのある付け髭。

「このつけ髭似合ってないわよ。次会うときはもっとイイ男になりなさいな」

唇のすぐ横にふわりと何かが触れるのを感じた。

物足りなさに彼女を捕まえようとした腕はあっさりとかわされた。

そして————ぞろぞろと大きな男たちを引きつれた彼女を見送ることしか出来なかったのだった。

哀愁のご主人様（後書き）

久しぶりの更新です。

すでに忘れ去られてるか心配ですが……。

この話の続きが次の物語に続いていきます。

といっても、まだまだ番外編は追加していきますので、引き続き宜しくお願いします。

毒をもって毒を制せず（前書き）

主人公が産まれるずっと前のお話です。

毒をもって毒を制せず

ひつじふとつちへく

一滴一滴、ポタリポタリと落ちて行く液体をスカリナはじつと見つめる。材料の採取から考えると実に一月もの時間をかけた手間のかかった薬がまもなく完成する。少しだけ緑がかつた透き通る液体を、うつとりと見つめる。きっと出来は完璧なはずだ。

それから程なくして、器の液体は満たされた。もう上から落ちる滴は一滴たりともない。

「ふふふ、出来たわ」

スカリナは口元が緩むのを抑えきれない。苦勞の甲斐あって、今までに無いほどの無味無臭な薬の完成だ。

これなら客も文句なく満足してくれるだろう。安堵の吐息を一つ吐き、スカリナは小さな小瓶へとその薬を移していく。客から頼まれたのはこの小瓶に入るだけの量。あとの残りはまた注文が入った時の為に残しておこうと自前の少し大きな薬瓶を取り出した。

薬瓶へと注ぎ終え、棚に瓶を戻そうとしたところでスカリナの手がふと止まった。

「やっぱり、客の信用を失わないためには、完璧な物を手渡すべきよね」

自分の中では完璧だと思っではいるものの、本当にこれは客の要望に沿ったものなのだろうかとの疑念が沸く。スカリナは手にした瓶をじいっと見つめた。そして――

「効果の程は……やっぱり試してみるしかないわよね」

そうしてニヤリと笑った様は、正に物語に登場する悪い魔女そのものの姿だ。魔女と呼ぶには少し年齢が幼すぎてはいたが。

ぐつぐつと煮えるスープをかき回す。ふんわりと優しいいい香りが部屋に充満する。じゃが芋とニンジンといった野菜が主ではあるが、先日狩人からもらった兎肉がほんの少し入ったそれは朝食には

勿体ないほどの贅沢な物だ。スカリナはくんくんとその匂いを胸一杯に吸い込む。同時に腹の虫がきゅるりと鳴った。よくよく考えれば一睡もせず薬の抽出をしていたのだ、お腹が減るのも当然だ。

程良く煮えたスープを皿に盛り付ける。今日は母さんがいないから二人分だ。そして、盛り付けた二つの皿のうちの一つに――

――液体をポトリと垂らした。

「さてと、そろそろマリンを起こしてあげなくちゃ」

まるで歌うように言つと、そのまま閉まりきつたままのドアへと向かう。

「マリナー、そろそろ起きなさい、食事が出来てるわよー」

当然ながらその声に対する返事はない。マリンは超がつくほどのねぼすけなのだ。これくらいの呼び声になど応じるはずがない。もちろんわかつてはいるものの、あえてドアの外から声をかけたのはマリンが実はスカリナの様子を窺っていないかを確認する為だ。これで仮に実は起きていてスカリナが何をしていたかを見ていたとしたら、あの小心者は声を聞いただけで驚いて絶対何かに体をぶつけるのだ。今日はなんの物音もなく静か。つまりは本気で気持ちよく寝ていることだろう。

そこでやつと、スカリナはドアを開けた。案の定マリンは毛布にくるまり、すやすやと安らかな寝息をたてている。なんの悩みもなくて羨ましいと思える程、その寝顔は安らかで、思わず嫌がらせをしたくなってしまう。気がつけばスカリナの手はマリンの鼻へと延びていた。

「――んー、んー」

鼻をふさがれたマリンはイヤイヤと顔を左右に振り、口を少し開けた。鼻から息が吸えないのなら口から吸えばいい。そう思ったことは確実だろう。呼吸を確保したマリンは何事も無かったかのように、鼻をつままれたまま、もう一度安らかな寝息を立て始めた。起きる気がないのは明白だ。となればスカリナがやることは一つ。――

――口をふさぐことだけだ。

躊躇することなく、空いていた片手で口を思い切り塞ぐ。これなら息も出来ず起きるだろうと思つてのことだ。渾身の力を鼻と口もとの手に込める。マリンの体が苦しげに悶え始めた。小さなベッドの上でスカリナの手をどけようともがいている。だがスカリナは気にすることもなく押さえ続けた。

ピタリとマリンの動きが止んだ。ついに気絶でもしただろうか？ スカリナはマリンの顔を覗き込む。勿論手を緩めることはない。

スカリナが覗きこんだと同時にマリンの目がぱちりと開いた。しばらくの間、二人の視線が絡み合う。そして――
「いったあつ！」

悲鳴を上げながらスカリナの体がベッドから逃げるように離れた。いや離されたと言つた方が正しいか。

「マリン、いきなり横腹蹴るなんて酷いじゃないのよ」

「ごほつ。酷いのはどつちよ、お姉ちゃん、マリンのこと殺す気？ 鼻も口も塞がれたら息なんて出来るわけじゃないのよ！」

「あら、でも魚は口じゃなくエラつてところで呼吸するらしいわよ。あんたもセレーンの端くれならエラくらい持つてるんじゃないの」

「そんなの持つてるわけないし、そーゆー問題じゃないからー！」
叫んだマリンはそのまま激しく咳込んだのだつた。

「まあまあ、マリン機嫌直してよ。だって、あんまり可愛らしい顔してすやすや寝てるから、あたしとしてはちよっかい出したくなっちゃうじゃないのよ」

朗らかに笑いながらスカリナは席についたマリンの前にスプーンとパンを並べた。

「可愛らしいっていうのは納得だけど。それでちよかい出したくなるっていうのはおかしいじゃないのよ」

マリンはまだふてくされた顔のままだ。あつちこつちに跳ね跳んだ髪もそのままに座っている姿は、まだあどけなさを残している。

「ごめんごめん、お姉ちゃんが悪かったわよ。それより朝食にしましょう。マリンの好きな牛の乳を入れたスープにしたから。さあ、頂きましょう」

スカリナは目の前のスープをひと匙掬って自分の口に流し込んだ。
「うん。じゃあ、いただき……………」

匙を持ったマリンの手が止まった。

「どうしたのよ、このスープ嫌いになった？」

スカリナの問いかけにマリンはふるふると首を振った。そしてスカリナの目の前に置かれた同じスープをじっと見つめる。

「お姉ちゃん」

「何？」

スカリナはもう一度自分のスープを匙で掬い、口にする。

「マリンのスープとお姉ちゃんのスープ交換してくれない」

「え？なんで？」

「なんかお姉ちゃんがマリンを可愛いとか言うときは、いつも変なことされる時だもん」

その言葉にスカリナは内心で舌打ちをした。

（勘のいい奴め）

「でもあたし、もう手を付けちゃったわよ、これ」

すでにスカリナの皿は二口ほど食べられてしまっている。

「いいの。それがいいの。お姉ちゃんが食べたやつがいいの」

「そう？じゃあいけど……………はい、じゃ交換ね」

優しい笑みを表面に乗せ、スカリナは皿を交換してあげた。

「じゃ、今度はちゃんと食べるのよ。食べないと胸が大きくならないわよ」

「はあい」

発育過程のスカリナと違い、発育前のマリンはまだ胸が膨らむ兆しは見えていない。だから今のマリンの憧れは胸の大きな母だった。いずれ放っておいても大なり小なり膨らむものを、今のマリンは必死に牛の乳を摂取している。今日もまた一瞬の勘の良さを見せたも

の、何事も無かったかのように嬉々としてスープを飲み干した。

「んー、やっぱり牛の乳の入ったスープはおいしいねえ」

「良かったわね。おかわりもあるわよ」

「うん、おかわりするする！」

そう言つて皿を差し出したマリンの目の焦点は左右に揺れていた。それを確認したスカリナはほくそ笑む。どうやら仕込んでいた薬が効き始めたようだ。一か八かの賭けではあったが、自分の皿の方に薬を仕込んでおいて正解だった。最近のマリンは妙に勘がいいというか、不穏な空気を察知するのが早い。以前ほど簡単に嵌められなくなつてしまつていただけに、今回は念の為自分の皿の端に一滴垂らしておいたのだ。スカリナが食べている間は広がらなかったその薬だが、マリンの皿と交換した際、その振動でしっかり混ざり合い、役目を全うした。とはいえ、どっちにしろ綺麗さっぱり飲み干されるならば、混ざり合おうが合わなかるうが、大した問題にはなりそうにもなかったが。

「お姉ちゃん、おかわり早くー」

「はいはい。ちよつと待つててね。それよりマリン、この前知らないつて言つてたあたしの耳飾りだけど、本当は知ってるんじゃないの、どこにあるか」

皿を受け取りながら、マリンへとそんな質問をぶつけてみる。スカリナが母から貰つて大事にしていた耳飾りが数週間前から行方不明なのだ。いくら先を読めるスカリナであっても、過去までは見えない。まさか無くなると思つていなかったので先見すらしていなかった。だが、この家に出入りするの家族以外おらず、スカリナにくれた母本人が盗むはずもなく、となれば残るはマリン一人。

「知らないよ、マリン知らないよ。綺麗だからちよつと触つてたら椅子から落つちてどつかにいつちやつたなんて、マリン知らないもん」

やはり犯人はマリンだったかとスカリナは嘆息した。つまりは部屋の中のどこかにはあるということだ。家具の隙間にでも入ってい

るのだろう。後でじっくり探すことにしよう。

しかし、自白しつつも知らないを言いとおすのは笑えるが、今回の薬は今まで以上の成果を見せたのは間違いない。完璧な自白剤の完成だ。あとは渡す日時の相談をしなければならぬ。食事が終わったら早速手紙をしたためなければ――

「それでね、それでね、マリリン、この前知らないおじさんにね、お金上げるからお姉ちゃんの服をくれって言われてね、あげたの。マリリンだから今お金持ちなのっ」

これからの計画を算段していたスカリナだったが、今のマリリンの言葉に目を剥いた。

「なんですってー!」

「えへえへ、マリリンすごい? お姉ちゃんのおんなまだら色の服がお金になるんだよ。マリリン商売の才能あるよね」

まだら色ということは、薬の調合時に使っていた服ということだろう。なににせよ自分が使っていた物を見ず知らずの他人に貰われて嬉しいわけもない。愕然とマリリンを見つめるが、マリリンの自白はまだ止まりそうにない。

「それでね、その人が今度はお姉ちゃんの下着が欲しいって言ったの」

「ししししし、下着?」

そんなの欲しいなんてまるっきり変態ではないか。恐ろしさに身震いするもマリリンはまた楽しげに一人話を続けている。

「でも、お姉ちゃんが持っているのは、擦り切れたボロの下着ばかりですよって言ったのよ」

「ボ、ボロ………擦り切れたボロ下着………」

スカリナの頬が一気に熱を持つ。確かにどうせ見られることもないと無頓着な下着をつけてはいたが、まさかそれを妹が他人に暴露するなど誰が思うだろう。

「そしたら、その人それでもいいから欲しいって、銀貨くれるからって。だからマリリン次にその人と会ったら益々お金持ちになっちゃ

うよ。お姉ちゃんのお陰だからお姉ちゃんに新しい下着買ってあげるからね」

焦点の定まっていないマリンの口から次々と暴露される恐ろしい事実、二度とこの妹に自白剤は飲ませまいと心に決め、スカリナは慌てて自室へと走った。何の為かつて？勿論ボロい下着を全部処分する為だ。

以降、下着だけは二度と同じものを身につけなくなったスカリナであった。

毒をもって毒を制せず（後書き）

公私共に何かとバタバタしてたもので
すっかり放置しておりました。

久しぶりに時間が出来たので、今年最後の更新です。

正月休み中に続編の方の更新も出来たらいいなと思っています。
皆さま、今年も大変お世話になりました。よいお年を♪

年越しは波乱含みで……その1

王宮の奥まった場所にあるとある部屋。エルメリクは目の前の尊いお方の回りくどい話を、長いすに腰掛けたまま静かに黙って聴くことに専念していた。「あー、そのだな」「うーん、だからな」の前口上から始まり「それでな」「というわけだな」と続き、なかなか話が進まない。さすがにうんざりしかけたところで、目の前の人がかほんといつ咳をした。

「というわけでな、後のことはお前に頼みたいと思う」

どうやら長かった話もやっと終わってくれたらしい。エルメリクはそつとため息をつく、開き方を忘れたのではないかと思うほど、長い間閉じていた口を開いた。

「わかりましたよ。まったくそれだけの話をするのに何時間かかっているんですか。気の長い僕でもさすがに途中から意識が遠のきましてよ」

相手がこの国で一番尊い国王であるにも関わらず、エルメリクの言葉は辛辣だ。その言葉に目の前の椅子に座る国王は渋面を作った。「お前、仮にも私はこの国の国王なんだぞ」

「知ってて言ってるんですよ、もちろん。毎度毎度、僕に面倒ごとを押し付けてくれる伯父上に感謝の気持ちも籠ってますけどね」

「何を言うか、その面倒ごとを一番楽しんでるのはお前ではないか。知ってるぞ、この前だって面白いことになりそうだからとファニールを外に連れ出したことも」

「知ってるも何も、ちゃんと伯父上に許可頂いたじゃないですか」

「私はそんな許可なぞ出してはおらん。許可したのはアデルであつて私ではないぞ。お前といいアデルといい、あれを玩具か何かと勘違いしていいいか？お陰で益々奇妙な娘になってきたではないか」

鼻息も荒くそう言い放つと、「昔はあんなに可愛かったのに」とうつすら涙を浮かべている。

「やだなあ、そんなわけじゃないですか。仮にも伯父上、いやいや国王様が実の娘のように可愛がっているファニール様を玩具になど。とんでもないですよ」

玩具というより愛玩動物と言った方が正しい、とエルメリクは心の中で付け加えた。玩具では自分で動かしてやらねばならないが、かの姫は自身が考え行動する。その行動がまた破天荒で、エルメリクの想像を超えてくれるものだから面白いのだ。餌をちらつかせてやれば、一目散に跳んでくる。あれを愛玩動物と言わずになんというだろうか。

（どっちかっていうと、餌の方が僕にとっては玩具かな）

怒りの形相で剣を向けてくるシェリーナの姿を思い出して、エルメリクは微笑んだ。

「エルメリク、お前また何か良からぬこと考えているだろう？」

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

「お前がそういう笑い方をするとき、大抵よからぬことを考えているではないか」

「それよりも、さっきの話ですけど、早い話隣国からいらっしやる姫の警護にシェリルをつけるということですよね」

「うむ」

「それで、シェリルをつけると件のファニール様が騒がれるのでどうにかしてくれと」

「う、うむ」

「伯父上、そうなるのがわかっていて何故シェリルを護衛につけるんですか」

「それがな、どこから聞いたのか、うちの国には男装の麗人が近衛騎士にいと知ってるようだな。姫直々のお願いなのだよ」

「へえ、随分我が国の情報が他国にただ漏れしてるようですね」

シェリーナのことが漏れているくらいなら、どうということはないが、これが国家機密に関することまで漏れていたら由々しき事態だ。大公が目をつぶっていた密入国者が隣国からも紛れていたのは

間違いない。密入国者の殆どが諜報員とは思わないが、そう考えるとかなりの数の諜報員がこの国で暗躍しているのは間違いなさそうだ。

「密入国者の洗い出しは進んでいるのか？」

「いいえ、そちらについてはさっぱりですよ。人数はわかっている、人的特徴などの情報は皆無ですからね。動きがない限り確認のしようがありませんよ」

「ふむ。ではある意味今回のカロッツ伯を名指しの話は、動きと捉えて良いのではないか？」

「まあ、確かに。ですけど、シェリルが巧く情報を引き出せるとは思えませんけどね」

「女性同士なら警護出来ない場所も少ないし、うってつけだと思っただけだな。ほら、何故か女性は男装の麗人に惚れ込むではないかうまく惚れさせて情報を頂戴するといった按配だ」

いいことを思いついたとばかりに笑みを見せる国王は、エルメリクの前ではすっかりただの伯父さんだ。こんなお人よしそうな人がよく国王をやっているらるなと半ば感心せずにはいられない。ついでに言えば男装の麗人に誰より惚れ込んでいるのは、国王が娘の様に可愛がっているファニールが一番だが。

「うってつけねえ……伯父上、シェリルは騙されることは得意でも、騙すのはとても下手ですよ」

あれだけエルメリクに色々煮え湯を飲まされてきたというのに、シェリーナから仕掛けられたことは一度もない。精錬実直の騎士道精神といったところか。

「そうか……いつそお前が警護につくか？そしたら全て丸く収まるが。あちらには巧い事言っておくから」

「巧い事言ったところで納得しないと思いますよ。ま、どっちだっていいんですけど。それより、僕はそろそろお暇したいんですけど。そろそろ昼ですからね」

「なんだ、私と一緒に食べて行かないのか。そう思ってた準備させて

いたが」

「結構ですよ。今日の昼食はもう決めてるんで。では、ファニール姫を宥める件については、いずれ何か考えておきますよ。伯父上は精々シェリルを諜報員にする算段でもなさってください。では、失礼して」

立ち上がったエルメリクは国王に一礼をすると部屋を出た。

ドアの外で待っていた従者に声をかけ、馬車の準備へと赴かせた。馬車の準備が出来るまでには少し時間があるだろう、少し考えながらゆっくり歩いて行くことにする。

回廊の窓から差し込む日差しが暖かい。寒い時期程太陽が心地よく感じる。国内外で渦巻いている策略も、この心地よさの中ではどうでもよく感じてしまう。

これから行く昼食の席でも、ある種の心地よさを感じるだろう。

国の謀略に巻き込まれた哀れなセイレーン。彼女はきつとこれから色々なことに巻き込まれていくのだろう。

「誰よりもそれに巻き込んでいる張本人は僕だけだね」

ぼつりと言葉を漏らし、レネスの顔を思い出しては笑みが零れる。今日もきつと元気な笑顔で僕を迎えてくれるだろう。

ふと、先ほどの玩具と愛玩動物の話が頭をよぎる。シェリルが玩具でファニール姫が愛玩動物だとしたら、レネスはなんだろう？ シェリルの様に思うままに動くわけでもなく、ファニールの様に突拍子もないことをしてかしてくれるわけでもない。進めていた足を少し止め、腕を組んだ。

エルメリクの言うことに、不平をこぼしながらも割りと素直に従うあたりは玩具だが、無意識に妙なことに巻き込まれるのはある意味天才的で見ていると厭きないのは愛玩動物なのだろうか。

「いや、やはりあの子はセイレーン以外の何者でもないか」

歌で人を惑わすセイレーン。やはり自分も惑わされてしまったのだろう。

そう納得したエルメリクは、また歩を進め始めた。

回廊を進んだ先で、騎士姿のシェリーナの姿を見つけた。こちらに背中を向け部下に何か指示を出しているようだ。指示を出された騎士は一礼するとシェリーナの傍を離れていく。離れ際、エルメリクの姿に気づいた騎士は丁寧な礼をし、足早に去っていった。その動きでエルメリクが存在に気づいたシェリーナが振り向いた。

「やあ、僕の可愛い玩具……ではなくカロツツ伯。元気かい？」

麗しの女騎士シェリーナは一気に渋い顔へと変貌させた。そしておもむろに辺りを窺うとツカツカと足音高くエルメリクへと近づいてきた。

「その可愛い玩具とは何のことだ」

シェリーナが王宮の中でありながら、こんな言葉遣いをするのは近くに誰もいないからだ。これで誰かが近くにいうものなら上下の区別とばかりに、恭しい態度をとってくるのだが。

「おや？そんなことを言った覚えはないけど」

「いいや、私はすっかり聞いたぞ。この耳がな」

しかめ面で自分の耳を指差すシェリーナ。そこまでしなくてもシェリーナが聞こえるように言ったのだ。聞き取れるのは当たり前だ。相変わらずの容易に想像できる反応がおかしくてたまらない。

「嫌だなあ、僕がそんなこと言うわけじゃないか。誰かさんでもあるまいし、心の内までそうそう表に出さないよ」

「誰かさんとは、まさか私のことではあるまいな」

何を言っても自分を馬鹿にしてる台詞だと思ふあたりが、すっかり玩具の反応だなとエルメリクは思った。玩具根性が染み付いているシェリーナがほんの一瞬だけ気の毒になるも、もちろんそんな素振りはおくびにも出さない。

「違うよ、ただ漏れの常習犯といえばレネスに決まってるじゃないか」

その言葉にシェリーナは少し考える素振りを見せた。その顔がふと和らいだ。きっとレネスは僕の知らないところでも、おかしな言動をしてくれたのだろう。

「ああ、確かに、彼女のただ漏れ具合はなかなかの物だったな」

「だろう？ところで、国王から最近何か言われてないかい？」

「ん？ああ、年末年始にかけて隣国の姫がこちらに訪問されるという話なら聞いたが。その警護を近衛騎士に一任したいとか」

「ふうん、やっぱり、もう話は行つてたんだね」

だがシェリーナ本人による護衛の話はまだ言っていないようだ。

「その警護がどうかしたのか？」

「うーん、いずれ国王より直々に指示が来るとは思うけど、その姫が来たら、君当分専属護衛になるから」

「え？私がか？それは光栄な話だが……」

「となると、ファニール様がね、ただではすませてくれないだろうなと」

「え……それはどういうことだ。国王指示ならさすがのファニール様とて納得せねばなるまい」

「そう事は簡単だといいね。僕としてはどっちにしろ面白いからいいんだけど、伯父上からなんとかしてくれと泣きつかれてねえ。さて、どうしたものだろう？」

「それを私に聞くか………そもそも面白いとはなんだ、一体」

レネスの話で和らいだはずの表情が、またしても渋面を作る。

「うーん、まあ僕が色々考えてみることにするよ。君には無理だろうしね。それよりも、僕はこれから彼女のところに昼食を食べに行くんだけど、君も良かったらどうだい？」

「私には無理の意味もわからんが。まあいい、その件について詳しく聞きたいからな、私もついていこう」

丁度良くも、馬車の準備を頼んでいた従者が戻ってきた。早速二人で馬車に乗り込み白砂亭へと向かうのだった。

年越しは波乱含みで……………その2（前書き）

今回は視点があの方に変わります

年越しは波乱含みで……………その2

「いいことを思いついたよ」

あの日忙しく立ちまわるレネスを眺めながらエルメリクが口にした言葉に自分はなんと返しただろう。

「それは素晴らしい」

と答えただろうか。それとも、

「どんないい考えが浮かんだんだ？」

とでも返しただろうか。

いいや、それはあり得ない。

シェリーナは確かこう言っただけだ。

「お前の考えるいいことに、いいことがあつた試しがない、即刻その考えを打ち消せ」

まさにその通り打ち消してくれていれば良かったのに……………と、手渡された女官服を眺めシェリルは嘆息した。

「おや、随分艶やかな溜息だね。もう身も心も女性になりきってるようだね」

シェリーナの部屋の長椅子に、優雅に脚を組んで腰かけたエルメリクの発した、すつとぼけたその言葉に苛立ちが増す。

「私は産まれてからずっと身も心も女性だが」

「ああ、言われてみればそうだったね。失礼失礼。あまりに長いこと君の男装ばかり見て来たものだから、ついつい」

なにが「ついつい」だ。自分の都合で男と言ってみたり、女と言ってみたり。ついには騎士と言ってみたり女官と言ってみたりか……………と考えているうちに益々腹が立って来た。

「ところでレネスが君のところの茶菓子がとても美味しかったと言っていたが、僕にはふるまってはくれないのかい？」

夜分に人の屋敷に図々しくも上がりこんだ拳句、菓子まで所望す

るとどこまでも図々しいやつだ。そうは思ったものの、仕方なく使用人を呼び茶の準備を頼んだ。

すぐさま茶と菓子との準備がなされると、エルメリクは早速その一つを口にしている。

「で、何故女官なのだ」

我ながらまるで男のように低い声が出てしまったと思う。

「ん？乳母の方が良かったかい？うん、この菓子はなかなかの物だね。レネスが心まで蕩けておかしなことを口走するのも納得がいくね」

レネスがここで口走ったギンギラのデブやハゲの話を思い出し、一瞬口が緩んでしまったが、今はそれどころではなかった。

「つまりは、あれか、お前もそれを食したからおかしなことを口走っているだけか」

「ははははは、レネスでもあるまいし、僕はそんなことはしないよ。ああ、でも君が久しぶりに笑いの発作を起こしたいのなら、レネスを見習っておかしなことを口走ってみるかい？」

「バカも休み休み言え。そんなことを言ってるんじゃない、何故女官なのだ」

「何故って言われてもねえ。我ながらいい考えだと思っただけ。でもたまにはいいんじゃないかい。女性になりきるのも。君の所にお嬢に来てくれる人も見つかるかもしれないよ」

ブチっという音が頭の中で聞こえた気がした。

「この……………ボンクラ大将が！なんで近衛騎士である私が、今更女官になどならねばならぬのだ！」

怒鳴ったと同時に手にしていた女官服をエルメリクに向かって放り投げた。

こともなくそれをひょいっと避けたエルメリクは、何事もなかったかのように茶器を手にして中身をすすった。

「こらこら、女官というものは主にそんな声を張り上げたりしないものだ。それに紳士に物を放り投げたりもね」

「誰が主だ！紳士だ！隣国のの姫のお求めなのは男装の騎士である

うが！それならいつもの私でいいではないか！」

「でもほら、ファニール姫のことがあるじゃないか」

確かに先日より国王が心配しておられたのはファニール姫への説明だった。だからこそこの目の前にいる男に全てを任せたのも承知している。だが――。

「ファニール姫がどうので、私が女官になるのどう関係があるというのだ。あの方だって馬鹿ではない。重要な任務と聞けば納得したださるだろう」

「うーん、納得したふりして隣国の姫に呪いでもかけてしまいそうだけだね」

「まさか、あの方は普通の女の子――」

「普通り女の子が魔方陣書いたりすると思ってるのかい、君は」

呆れた様なエルメリクの声に、シェリーナは言葉をつまらせた。

魔方陣の被害にあった身だけに、その恐ろしさはわかりきっているし、ファニールの力も思い知っている。

「の、呪いの勉強はさすがにしておられないだろう？」

「さあね。でも呪うことはなくても、件の魔方陣使ってなにかするかもしれないよ。そうなれば国交問題だ」

国交問題になったことを想像したのか、エルメリクは苦悩の表情を浮かべて頭を左右に振った。なんのかんの言ってもエルメリクは時期国王だけに色々と国のことを心配しているのは本当だ。苦悩するのもわからなくはないとシェリーナは思った。

「ならば私が護衛することは極秘にしておけばいいのではないか」

我ながらいいことを思いついたとシェリーナは手を打った。別の人間が護衛していると思っていればなんら問題がないではないか。

「そうなんだよ。僕が考えたのもまさにそれさ」

シェリーナの考えにうんうんと頷きながら、エルメリクは横に放り投げられたままの女官服を手にした。

「だからこそこれが必要になるんだよ、シエル。そして君はしばらくの間領地に帰っていることにするというわけさ」

さつきまでの苦悩の表情はかなくなり捨て、エルメリクは晴れやかな表情で女官服を広げた。王宮でよく見慣れた女官服は生地も仕立ても申し分はなかった。が、それは今のシェリーナには関係のないことだ。

つまりシェリーナ本人は領地に帰っていて、隣国の姫の傍にるのはただの名もない女官。そういうことにしてしまえばいいと考えてるのはエルメリク一人で誰も賛同はしていないのだ。

「私が領地に帰ったことにするならば、そのまま騎士として護衛をしても差し支えないのではないか」

「シェエル、君は自分がとても目立つということを忘れているようだね」

やれやれといった風にエルメリクは肩をすくめ女官服を隣にそつと置いた。誰より目立つエルメリクに呆れた顔をされると何やら腹がたつ。自分を落ち着けようと、シェリーナも座ると茶器を手にした。

「帰ったことにしても隣国の姫が王宮内をうろついている時にフアニール姫に遭遇してごらん？あつという間にバレてしまうじゃないか」

「そ、そうだろうか」

「そしていつものごとく、隣国の姫などおかまいなしに君に突進するわけだよ。『シェーリル様！』ってね」

訳知り顔で茶をすするエルメリクにそう言われてしまえば、返す言葉が見当たらない。だが、ここで俺たら負けだとシェリーナは自分を奮い立たせた。

「だが、何も女官でなくてもいいじゃないか。他にもお付きの役が何か……」

「シェエル、来るのは姫だよ。女性だよ。女性の周りには女性が付き従うものだろう？」

「私の周りには特に女性は付き従ってはいないが」

「君はある意味特殊だけど、普通一般のそれも高貴な女性には女官

がたくさんいてかしくされてるものだろう」

そうしてエルメリクは菓子をもう一つ手に取った。そしておもむろに茶の中に沈みこませる。

「ほらね、どんなに美味しい菓子でもこうして別の物の中にいれてしまえばその味は薄れてしまうのだろ」

「それがどうした」

「つまり、女性の中に騎士然とした男の姿がいたら目立つとは思わないかい？だからこそたくさんいる女官の中に紛れるのが一番というわけさ。まあ、君は女官になっても目立つとは思うけどね。その髪と顔では」

「どっちにしろ目立つなら意味がないではないか」

「まあ、それについては考えがあるから大丈夫」

その考えが何より不安なのだと言ってやってもいいだろうか。

「そ、それに隣国の姫は男装の騎士を御所望なのだろう？ただの女官ではそれこそ気分を害されて国交問題に――」

「大丈夫、大丈夫。それについては僕が説得してみせるから。実はとある筋から隣国の姫の情報をもらってね。なかなか理解のある方の様だから心配ないよ」

「そのとある筋とはどこの筋だ」

「まあまあ、それはともかく、似たような体系の女官から借りてはきたけど、もし寸法が合っていないようならば合わせなきゃならないだろうからね、僕は席を外すから試しに着てみてくれたまえ。それとも仕立て屋を呼んで君のためだけの女官服を作ってみるっていうのもいいかもね。剣帯できそうな特殊な女官服に仕立ててみるかい？」

エルメリクはもう一度女官服を手にし立ちあがるとシェリーナに軽く当ててみた。「大きさ自体は大丈夫そうだけどね」などと言っている。

「む、そうか女官服だと通常は剣帯できないのだったな。それでは護衛として心もとないな」

「そういうこと、仕立て屋を呼ぶかい？」

「ああ、頼む」

シェリーナは力強く頷いた。護衛となるからには完璧にその任務を全うするつもりだ。それには武器がなくては意味がないだろう。もちろん体術もそこそこ使えるが、武器がないのはやはり不安だ。女官服を手に取りどこに武器を仕込めるかを考え始めた。夢中になつて考えてる間、エルメリクが人の悪い笑みを浮かべたのにも気づいてはいなかった。

数日後、ついに隣国の姫がセレンに到着した。

年越しは波乱含みで……………その2（後書き）

お久しぶりです。

久しぶりに時間と心の余裕が出来ましたので、番外編の更新を試みました。

番外編が一番書いてて気楽で好きかも。

リハビリにはもってこいです。

段々には本編の方にも手を出そうとは思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0880h/>

歌を忘れたセイレーン～祈りの歌が聞こえる～

2011年8月1日03時25分発行